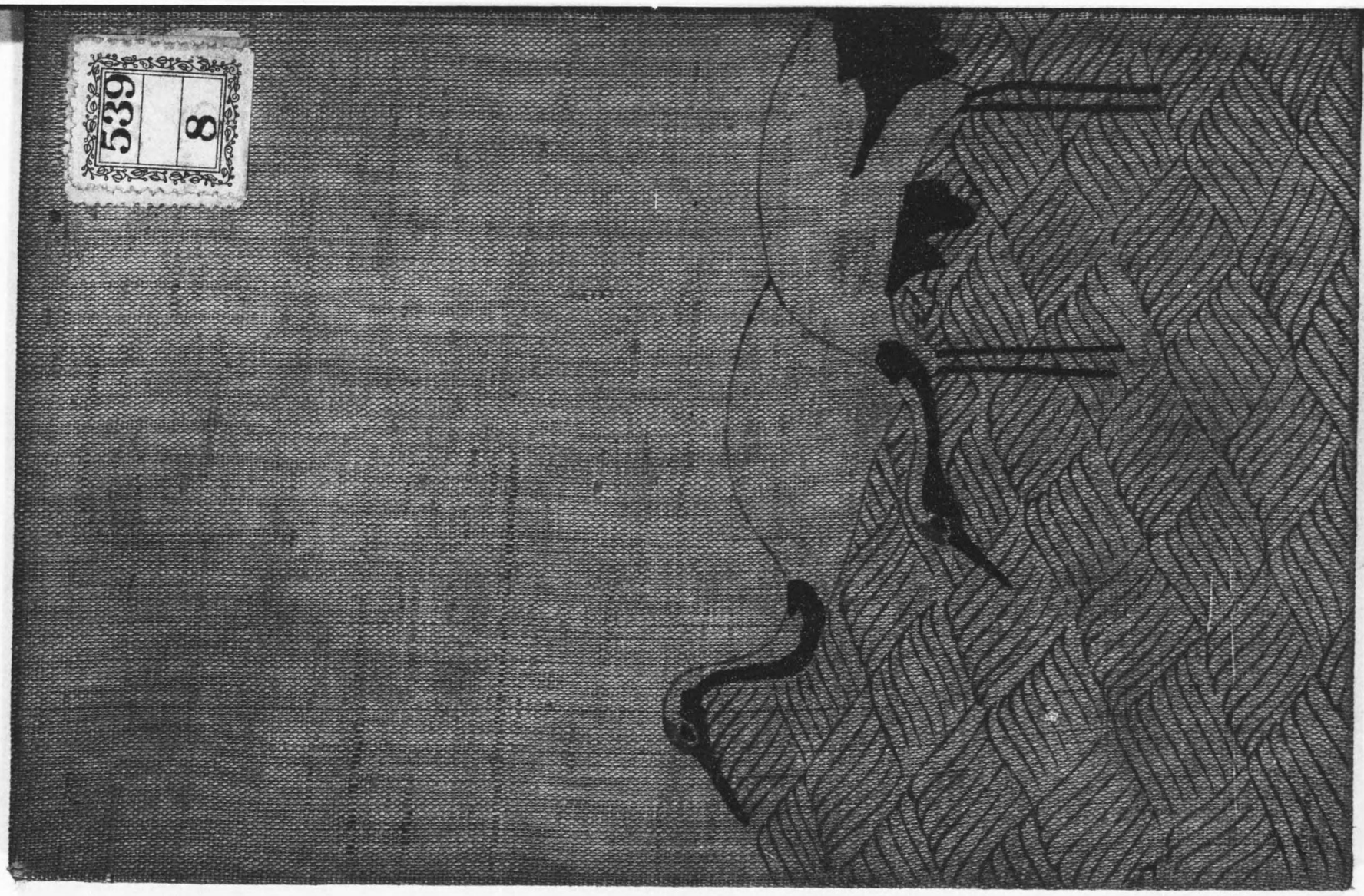
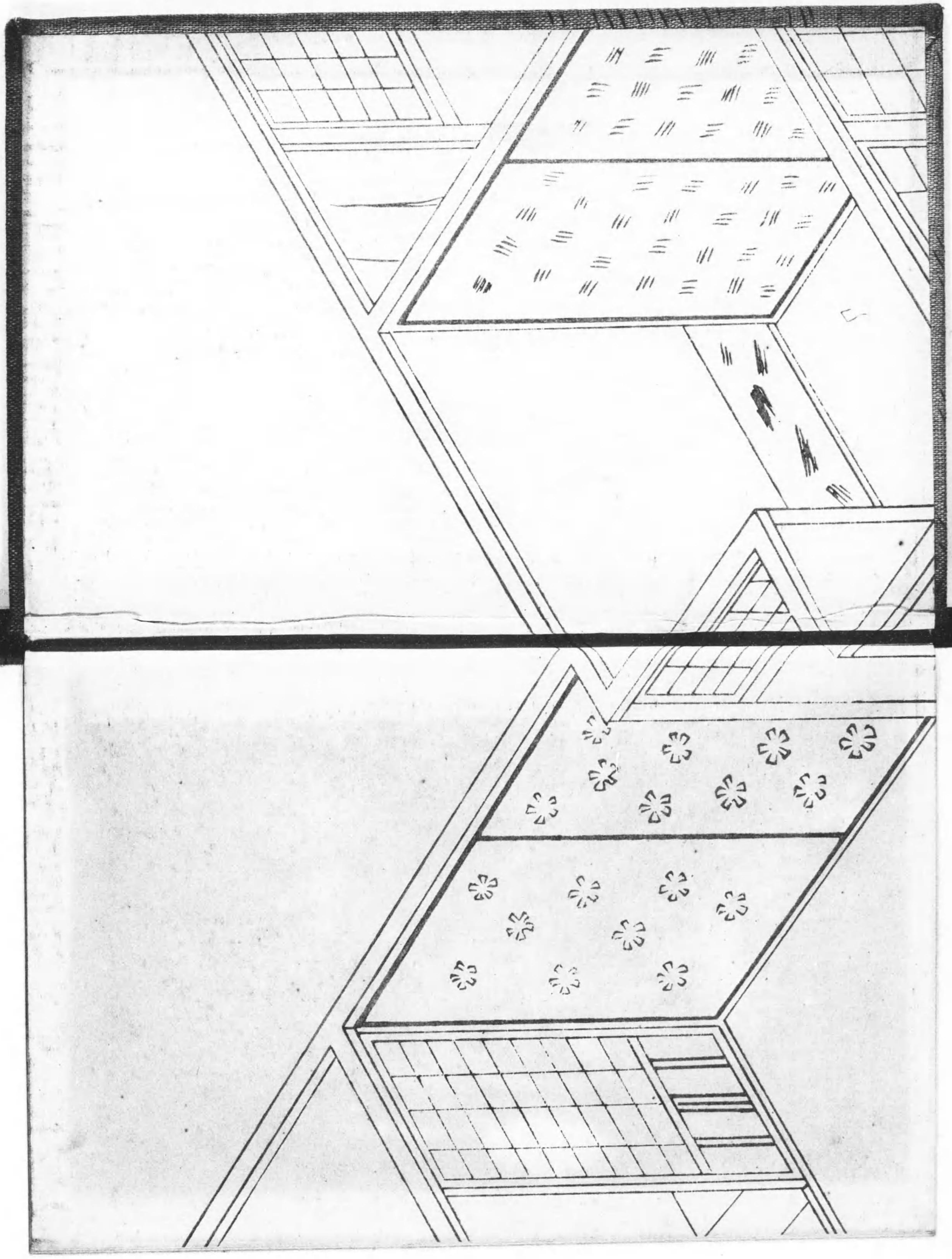
投





大東小學之集

第十四卷

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第十四卷

東京 春陽堂刊行

大正
15. 6. 3
内交

539-8

大南北全集　第十四卷　目次

解説及年表……

口絵解説……

春狂言　八重霞曾我組絲……自一頁至三九二頁

曾我對面とお園六三郎
近江八幡と小絲綱五郎

夏狂言　初冠曾我皐月富士根……自三九三頁至六八二頁

男草履打と浦里時次郎
元服曾我と夜討ち曾我

春狂言　阪蓬萊曾我……自六八三頁至八一七頁

畑右衛門と鬼王の貧家
曾我對面と月小夜團三

挿繪目次

◎陬蓬萊曾我（三建目の錦繪。コロタイプ版。初世豐國筆）……卷頭
◎八重霞曾我組絲（四建目の錦繪。コロタイプ版。五渡亭國貞筆）……一七頁の前
◎八重霞曾我組絲（二番目序幕の錦繪。コロタイプ版。初世豐國筆）……三二頁の前
◎初冠曾我皐月富士根（大詰の錦繪。コロタイプ版。三世豐國筆）……六七頁の前
◎八重霞曾我組絲（繪本番附全部。亞鉛凸版）……本文挿入
◎初冠曾我皐月富士根（繪本番附全部。亞鉛凸版）……本文挿入
◎陬蓬萊曾我（繪本番附全部。亞鉛凸版）……本文挿入

口繪解說

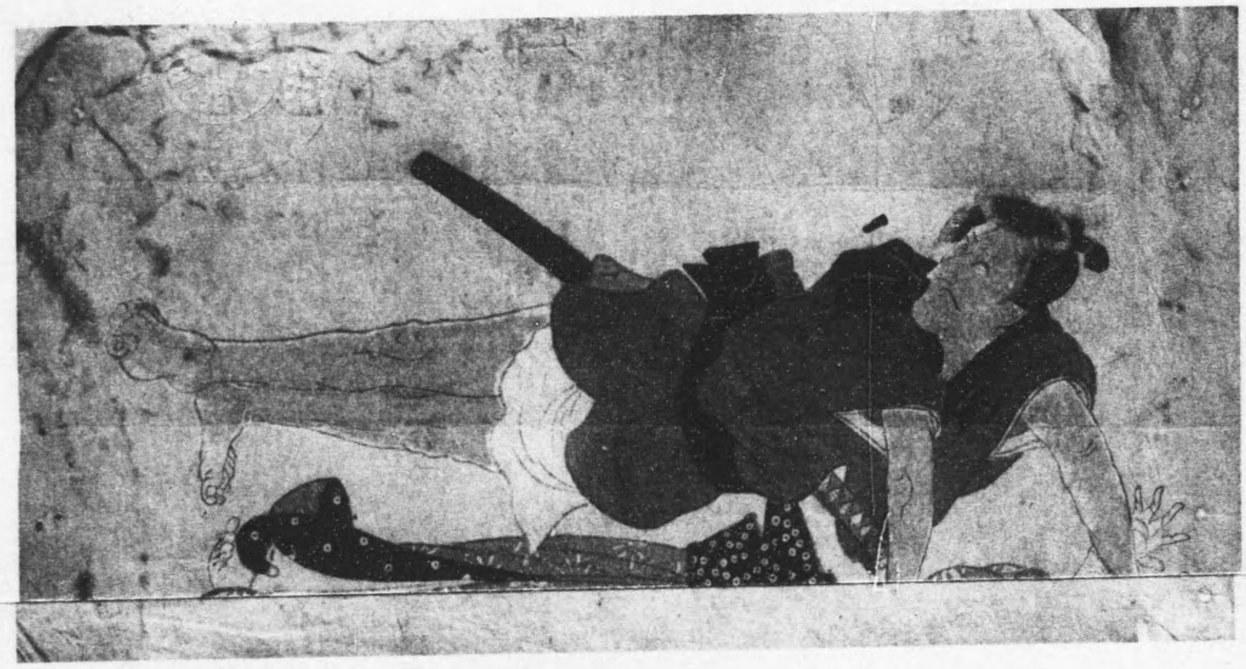
■本編には材料不足で、繪畫を多く挿入出來なかつたのが殘念である。

■卷頭に入れた、初代豐國の三人立ちは、「陬蓬萊曾我」のうち、「名越川だんまり」の場である。この場は、臺本に缺けてゐるが、筋は解說に載せた通りである。この錦繪は、三枚續きではなく、横繪の一枚ものである。珍らしい方の種類に屬する。

■「八重霞曾我組絲」のうちで、饗の河原の二枚續きは、再演の折に發行されたものである。筆者は國貞。「奥藏の場」にお園六三が色模樣の場の二枚續きは、初演の時のもので、初代豐國の名にはなつてゐるが、多分は二代の代筆であらう。

■「初冠曾我皐月富士根」に入れた錦繪は、三代豐國筆で、八世市川團十郎が討入りの五郎の圖である。討入の場の繪が見當らなかつたので、昔の討入の五郎の姿だけをもお見せ申したいと思つて、この一枚摺りを挿入したのである。

■繪本番附は、三種とも初演の物があつたので、例の通り亞鉛版にして、その幕々へ入れて置いた。



解說及年表

八重霞曾我組絲

文政六年一月、市村座へ書きおろされた、吉例の曾我狂言で、世話物としては、お園六三の「八重霞」と、小絲佐七の「本町丸」とが、二つまで搦ひまぜになつて、南北の作の中でも、この二番目は、特に複雜きはまる筋を作つてゐる。

文政元年以來、三世尾上菊五郎と七世市川團十郎とは、「助六」の事から喧嘩をして、長い事同座をしなかつたのが、五世岩井半四郎の仲裁で和解が成り、前年同座の顔見世に、久方振りで合同をした。その第二回目の興行が、この狂言である。全篇、各幕とも、團菊を嚙み合せるやうに出來てゐるのは、その爲である。殊に一番目四建目の、近江八幡で兩優の早替り競爭の幕は非常に好評で、外の幕は初演ぎりで絶えてしまつたが、この一幕だけは明治まで殘つた。イカサマ、殘るだけの價値はある。彼れの作中でも、有數な幕と稱へてよい。

二番目は、臺本では大詰となつてゐるが、實際は事件の解決がついて居ない。もう一幕、あつたに違

ひはないが、何にしても、久し振りの團菊顔合せで、殘つた一幕は、たうとう千秋樂まで出なかつた。外の脚本にもさういふのがあるが、昔の惡い習慣で、大入の時は全部出さなかつたものである。臺本が殘つて居なかつたのはその爲である。そこで、結末が解らないから玆に略筋を附記して置く。場面は、

「大工六三内の場」である。

六三はお絲を隱まつてある。半時九郎兵衞がお絲欲しさに强請りに來る。東林の毒藥が祟つて、六三は鳥眼になる。權兵衞殺しの詮議が嚴しい。六三は四方八方から責められて大困苦に陷る。綱五郎の女房お房が、六三の罪を引受けようとする事があつて、結局、小絲は自殺し、九郎兵衞の手から三品の寶物が六三の手に戻り、鳥眼も全快し、船越十右衞門が情の裁きで、六三は元の神原左七郎に戻る。

初演の役割は、左の通りであつた。

工藤左衞門祐經。大藤内成景（實ハ近江小藤太。曾我十郎祐成。宮大工、六三郎（實ハ神原左七郎（四ヤク三世尾上菊五郎）化粧坂の少將。綱五郎女房、お房。千住の藝者、はれ吉（三ヤク市川門之助）曾我の禪司坊（尾上三朝）伊豆次郎祐兼。大黑屋槌右衞門（二ヤク中山錦車）山住五平太。閻王寺、閑坊和尙。絲屋後家、お岩。宇佐美彌太夫（四ヤク大谷馬十）鬼王新左衞門、夜番人、太郎助（二ヤク惣領甚六）神原佐五郎（市川男女藏）絲屋娘、お絲。菅女、明石（實ハ景淸娘、人丸（二ヤク五世岩井半四郎）醫者、百川東林（大谷門藏）三浦奥女中、岬。絲屋下女、お芳（二ヤク市川おの江）梶原平三景時。絲屋後見、庄九郎（二ヤク松本國五郎）所化、雲哲（大谷曾呂平）輕子、おつや（嵐小さん）所化、雲才（松本錦吾）雲助、山瀧權九。船頭、市川屋三次（二ヤク市川門十郎）吉原の若林屋五郎八。箱根の畑右衞門（二ヤク鶴屋小團次）馬士、梶原村の平次（坂東善次）宿場女郎、花咲（吾妻藤藏）ごろつき、七郎助（實ハ曾我の團三郎。久須美七郎俊次（二ヤク尾上蟹十郎）宿場藝者、十六夜お京（尾上菊次郎）劍澤彈正左衞門時國。家主、左五兵衞（二ヤク澤村四郎五郎）小林の朝比奈。古鐵買ひ、栗島權兵衞。船越十右衞門（三ヤク二世關三十郎）大磯の虎。条本の藝者、小絲。六三云ひ號け、お園（三ヤク五世瀨川菊之丞）曾我五郎時致八幡の三郎　氏（實ハ赤澤十內。本町丸の綱五郎。盜人、半時九郎兵衞（四ヤク七世市川團十郎）鳶の者、小いさみの吉（市村羽左衞門）

前にも云つた通り、本筋の方は初演ぎりで廢れてしまつたが、閻王寺と養の河原の一幕は、その後も度度上演された。その第二回目は、天保四年一月、河原崎座「富士扇三升曾我」である。

大藤内、祐成（二ヤク尾上菊五郎）鬼王（市川壽美藏）祐兼（市川高麗藏）閑坊（大谷友右衞門）彈正（市川團九郎）畑右衞門（市川宗三郎）十六夜（尾上菊三郎）禪司坊（尾上松助）八幡、時致（二ヤク市川海老藏）

第三回は天保十一年一月、河原崎座の「梅咲若木場曾我」である。

大藤内、祐成（二ヤク尾上菊五郎）祐兼（尾上菊四郎）十六夜（荻野伊三郎）禪司坊（市川勘藏）畑右衞門（尾上

岩五郎）閉坊（大谷萬作）鬼王（市川壽太郎）八幡、時致（ヤク市川海老藏）

この時までの近江八幡は、初演通り團菊の顔合せであつたのである。

第四回は弘化元年一月の市村座「當訥子萬歳曾我」である。

大藤内、祐成（ニヤク澤村訥升）彈正（尾上菊四郎）禪司坊（山科甚吉）十六夜（坂東佳好）畑右衞門（澤村紀次）

鬼王（淺尾工左衞門）時致（坂東しうか）八幡（嵐吉三郎）

弘化元年一月には、大阪中座の「浪乘曾我花景清」の中に、この一幕を加へて上演した。市川海老藏が江戸お構へで、上阪してゐたので、出したのだと見える。

大藤内、時致（ニヤク市川海老藏）八幡、祐成（ニヤク實川延三郎）禪司坊（嵐三十郎）祐兼（中山文五郎）十六夜（尾上芙雀）彈正（市川市友）

第五回は明治三年一月の中村座「水仙梅幸曾我」である。

大藤内、祐成（ニヤク尾上菊五郎）岬（嵐榮三郎）禪司坊（尾上幸藏）十六夜（中村いてう）祐兼（中村仲太郎）

閉坊（尾上尾の右衞門）八幡、時致（ニヤク大谷廣次）

初冠曾我皐月富士根

文政八年五月の中村座に上演された、南北の作には珍らしい時代狂言である。夜討曾我を土臺にして、これへ「鏡山」の草履打ちを、男に直して書き加へたものである。男鏡山と稱して好いものには、前にも「有職鎌倉山」があるが、それを逃げて「鏡山舊錦繪」の方に形式を近づけてある。世界が曾我であるところから、草履打ちの方も同じ背景にしたのが、多少の無理はあつても目先が變つて面白い。

「夜討曾我」は、現今では默阿彌の「夜討曾我狩場曙」に獨占されて居るやうだが、默阿彌以前の「夜討曾我」といへば、この狂言より外は無かつたのである。その所爲か、上演數度に及んでゐる。

南北手記の正本を見ると、最初は、この狂言の名題を「八重霞皐月富士」と附けてある。それは、當初の腹案が、お園六三の筋を搦ませる豫定だつたからなのである。序幕に、船越十右衞門といふ人物が出て、六三や七郎助の筋を賣つてゐるのも、その爲なのである。それが、途中から變更して本名題になつたのである。

四建目下の平塚宿の場は、ちよつと挿話的に、本筋と大した關係なくて、しかも面白い一幕になつてゐる。大阪狂言の「定助權八」の匂ひがするが、あれよりも趣きがある。さうしてこれを、浦里時次郎へ結びつけた趣向が面白い。新内節が當時流行してゐた事がわかる。

二番目に曾我祭の所作事があるのは、臺本としても珍らしく、戯曲史上相當の資料でもある。江戸歌

舞伎は初期から、曾我の狂言と關係が深い。曾我兄弟の爲に、芝居も繁昌する。報恩の爲とあつて、安永の頃から、討入の五月二十八日を期して、曾我祭といふ事が江戸芝居の年中行事になつた。この日は仕切場へ神輿を飾り、曾我兄弟の像を祀つて供物を捧げ、樂屋では賑やかに神樂を奏し、座中が祭禮氣分になるのである。さうして、春から芝居が大入を續けた時は、五月興行にこの曾我祭を舞臺へまで延長して、大切に祭禮の所作事を出すのが例だつたのである。この年は、團十郎菊五郎の顔合せで、ズツと大入を續けたので、曾我祭の所作事を添へた譯である。臺本以外、その日〳〵の趣向に應じて、種々な思ひ附きの茶番や、手踊があつたものである。今日、常磐津の所作になつてゐる「勢獅子」は、この曾我祭が殘した形見と云つてよい。

初演の折の役割は、左の通りであつた。

曾我十郎祐成。宇佐美尾上之助。お祭り佐七（三ヤク三世尾上菊五郎）仁田四郎忠常。槍持ち、うつそり官助（賈ハ十右衞門忰、五郎吉。曾我の母、滿江。肌ぬぎの手古舞（四ヤク三桝源之助）若黨、小由留木小源次。手古舞ひ（三ヤク尾上松助）政子御前（吾妻藤藏）中間、鴈助（市川宗三郎）蝮の仁太郎（大谷門藏）鬼王新左衞門。槍持ち、津久木傳六。祭の赤坂奴（三ヤク坂東善次）加藤大部光貞。足輕、畑右衞門（二ヤク市川染五郎）宇田五郎信重（鎌倉平九郎）若黨、勘次（尾上梅太郎）草履取り、萬八（市川市五郎）岡部彌三郎（坂東勝藏）乳母、お倉（成田屋銀兵衞）片瀨左仲太（中村千代藏）梅澤屋長太（市川長四郎）梅澤屋小平次（松本虎藏）吉良小次郎惟貞（松本小次郎）愛甲三郎季高（松本錦吾）義時妻、三崎（市川おの江）船越十右衞門。劍澤彈正時連（二ヤク尾上蟹十郎）尾上之助妻、二の宮（尾上菊次郎）醫者、針野灸按（澤村しやばく）頼家公（市川高麗藏）大磯の虎御前。梅澤屋下女、お園（賈ハ小藤太娘、浦里。三目月お扇（三ヤク岩井粂三郎）岩藤女蕃之丞時元。曾我太郎祐信御所五郎丸重宗。祭の世話人（四ヤク五世松本幸四郎）下部、初平（後ニ尾上伊太八賈ハ鶴賀時次郎。本町の綱五郎曾我五郎時致（三ヤク七世市川團十郎）牛島主税。祭の鐵棒曳（二ヤク中村傳九郎）

男草履打ちの件は、天保十年七月の河原崎座に再演された。名題は「其往昔戀江戸染」二番目の八百屋お七の名題を借りたものである。

尾上之助（澤村訥升）鴈助（大谷萬作）岩藤女蕃、曾我祐信（二ヤク七世市川海老藏）政子（市川鯉之助）小源次（市川勘藏）二の宮（尾上榮三郎）初平（八世市川團十郎）

夜討曾我の第二回上演は、天保十二年五月の河原崎座で、名題は初演の通りであつた。

祐成（澤村訥升）滿江（嵐みんし）小源次（澤村銑之助）閉坊（市川宗三郎）時致（市川海老藏）劍澤（澤村四郎五郎）仁田（澤村清十郎）虎御前（岩井紫若）五郎丸（市川團十郎）

第三回は、嘉永四年五月の市村座。名題は「橘牡丹皐月夜話」であつた。

祐成（市村竹之丞）満江、五郎丸（三ヶ市川九蔵）仁田（嵐吉三郎）閉坊（成田屋宗兵衛）剣澤（市川高麗蔵）
小源次（坂東橋蔵）虎御前（阪東しうか）時致（市川團十郎）

安政三年四月、中村座「一曲奏子寶曾我」では、夜討曾我の一幕のみを演じた。

祐成（片岡我童）虎御前（市川團之助）仁田（市川團三郎）五郎丸（市川九蔵）時致（岩井粂三郎）

安政三年五月の市村座、「花菖蒲裾野討入」二幕では

祐成（坂東彦三郎）満江（四世尾上菊五郎）虎御前（中村歌女之丞）小源次（坂東又太郎）五郎丸（浅尾與六）
剣澤（市川新升）時致（河原崎權十郎）仁田（坂東龜蔵）

元治元年四月の中村座「譽曾我皐月念力」二幕では

時致（河原崎權十郎）五郎丸（市川八百蔵）満江（坂東龜蔵）小源次（市川新之助）仁田（市川團蔵）剣澤（中村鶴蔵）虎御前（岩井紫若）祐成（坂東彦三郎）

この河原崎權十郎は、即ち九代目市川團十郎である。團十郎が明治七年に、默阿彌の夜討曾我を勤めて以來、「初冠曾我皐月富士根」は廢滅したのであるが、夜討の場は大體が同じ「曾我物語」其まゝなのであるから、両者が極めてよく似てゐるのも不思議ではない。

陬蓬萊曾我

文化八年一月、南北がまた勝諺藏時代に、市村座へ書きおろされた、吉例の曾我狂言で、その鬼王貧家の場は、世に名高いものである。坂東三津五郎が忠實な鬼王新左衛門で、種々な災厄にあつて悶えながら、遂に最後に成功する役。岩井半四郎がその妻で、夫と共に苦しみながら、身を殺して遂に夫を世に出す役。松本幸四郎は、鬼王を苦しめる實悪で、その憎々しい藝風を發揮する役。三役とも定評があつたもので、この三人が同座した時の曾我狂言には、種々と形式の變つた鬼王貧家で、三人がいつも同じ役柄を勤めて來たものである。木脚本はその代表的なもので、貧家の場は特に傑出してゐる。

本編へ收錄した定本には、三建目の返し「名越切り通しの場、名越川の場」が缺けてゐる。殘念ながらいくら探索しても發見し得ない。その二幕の筋は

浪人、關の畑右衞門が、病み疲れた禪司坊を殺して、彼れが久上寺から盜んで來た百兩を奪ひ、名越川へ埋めて印しを立て、置き、その旨を梶原へ手紙で送つたが、取次をした馬士彌藏が無筆なところから、かれて畑右衞門から執持ちを頼まれてゐる、月小夜への艷書と間違へて、その密書を月小夜へ渡してしまつた。月小夜は夫鬼王が、逆澤潟の鎧質請けの百兩調達に腐心してゐるので、よき幸ひと名越川へ行つて、その百兩を掘出す。畑右衞

門も掘出しにやつてくる。鬼王は又。畑右衞門が所持の狩場の繪圖面を取らんとして來かゝり、三人がだんまりになる。

卷頭へ挿入したコロタイプ版の錦繪は、實にこの「だんまり」の場面なのである。

畑右衞門といふ名は、曾我の狂言へは、いつも出てくる役であるが、「八重霞」や「初冠曾我」で見られる通り、いつも百姓か馬士の、極めて輕い役ときまつてゐるのである。この脚本ではそれが、實惡の重要な役に宛てゝあるのが面白い。これは當時、畑右衞門といふ呼び聲に似た名の惡黨があつて、評判だつたのを、取込んだものだらうと思ふ。「片瀨川の場」に、劍術遣ひが大勢出てくるのも變つてゐる。これも當時の何かの出來事を、暗示したものに違ひない。初演の役割は左の通りであつた。

近江八幡之助成氏實ハ　赤澤十内（助高屋四郎五郎）中老、二の宮（市川團之助）久上の禪司坊（花井才三郎）近江彌太夫成國（市川宗三郎）近藤七郎國平（市川團兵衞）宇佐美小文次（松本芳三郎）腰元、龜菊（坂東八十八）盛俊娘、卯杖（市川照之助）侍女、小動（岩井瀧次郎）梶原娘、簸（岩井梅藏）朝比奈妹、舞鶴（市川德之助）工藤犬坊丸祐友（坂東蓑助）梶原三太郎景茂（岩井喜代太郎）久須美玄蕃（澤村淀五郎）梶原源太景季、眞刀作平（ニヤク坂東善次）醫者、似た山通庵（坂東大吉）馬士、はれ罠の彌藏（市川粟藏）大藤内成景。新刀新五兵衞（ニヤク中村次郎三）手代、善八。一刀五郎太夫（ニヤク嵐新平）手越の少將（吾妻藤藏）小林朝比奈（大谷門藏）

曾我の滿江御前（三條浪江）頼朝息女、大姫（山下八尾藏）曾我の團三郎。曾我五郎時致（ニヤク七世市川團十郎）鬼王女房、月小夜（五世岩井半四郎）鬼王新左衞門。曾我十郎祐成（ニヤク三世坂東三津五郎）浪人、關の畑右衞門實ハ大友常陸之助頼國。工藤左衞門祐經（ニヤク五世松本幸四郎）

渥美清太郎識

八重霞花紬絲

やへがすみそがのくみいと

八重霞曾我組絲

第一番目　三建目

千住初酉の場

役名――深川の女郎、小絲。千住の女郎、花咲。同藝者、お京。同藝者、はね吉。本町の綱五郎。大黒屋槌右衛門。山住五平太。僧、雲哲。家主、左五兵衛。馬士、梶原の平次。箱根の畑右衛門。醫者、百川東林。新貝荒次郎。葛西六郎重清。御所の黒彌吾。粕谷藤太有景。七郎助實ハ曾我團三郎。若い者、多七。粟島の權兵衛。大工、六三實ハ神原左七郎。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて格子、のれん口、天水桶、すべて小塚原商賣屋のかゝり。下の方、軒口に草履草鞋、日光の道中記などを吊したる居酒屋。その側に『口附き無しの小荷駄馬乘るべからず』と書いたる傍示杭。上の方、格子の脇に多七、若い者にて、醤油樽に腰をかけ、格子の内に花浦、此山、女郎の形にて、莫盆を扣へ、見世を張つてゐる。新貝荒次郎、葛西六郎重清、御所の黒彌吾、粕谷の藤太有景、素袍の股立を取り、熊手を頭に押し、大名の體にて、見世を素見して

ゐる。通り神樂、鳥追ひ唄にて賑やかに幕明く。

多七　サア、モシ〳〵。

ト袖を引く。

荒次　コリヤ〳〵、お身はこの家の手代か。

多七　ハイ、若い者でござります。

重清　若い者にしては、大分頭が禿げて居るな。

黑彌　我れ〳〵は鎌倉の大名、當所は大江の廣元どの預かりの場所ゆゑ。

有景　逗留いたす我れ〳〵、傾城どもを買はうと存ずるが、揚げ代金はいか程ぢや。

多七　ハイ、平常は四六度でございますが、今日はお酉樣ゆゑ、物日でござりますれは、兩一でござります。

荒次　平常は四六と申すか。四六二十四文で賣ると申すか。

多七　とんだ事を仰しやりませ。夜鷹ではあるまいし。今日は二朱でござりますよ。

重清　勤めは南鐐一片で、床へ廻るは何遍廻る。

此山　オヤ〳〵、嫌な事をきく客人だの。

花浦　冗談云はずとお上がりなさんせ。

黑彌　然らばこの矢大臣で、酒宴を催ふした上遊びませう。

有景　それがようござらう。

ト皆々下の居酒屋の床几へ腰をかける。通り神樂、鳥追ひ唄になり、向うより東林、醫者の形にて、とやしげ、とやに附きし女郎、これを馬に乘せ、その手綱を曳いて出る。跡より六三、革羽織、いさみの拵へにて、頭に熊手を挿し、唐の芋を提げ、鐵、勝、同じ職人にて、德藏、大工小僧の形にて附添ひ出る。餘程あとより梶原平次、柿色に矢筈の紋の切附けしたる廣袖に、馬の沓を口に咬へ、醉つたるこなしにて出て來り、花道にて

六三　そこへ馬を曳いて行くなァ東林さんぢやァねえか。

東林　オヽ、六三か。どこへ行くのだ。

六三　お前も余ッぽど後生樂な人だ、熊手と唐の芋を持つてゐる者をつらめえて、どこへ行くと云ふ者があるものか。

東林　この男も世間の狹い事を云ふ。熊手と唐の芋を持つたとて、高砂の婆アが八百屋へ嫁に行つたかとも思はうぢやァねえか。酉の町に限つた事でもあるまい。

鐵　オイ、東林さん、べら坊に好い形だね。お前、醫者と馬士と、ちやんぽんにするの。

勝　虎を曳いてくるのは聞えたが、馬とは氣が附かなんだ。

東林　なぜ醫者樣が虎を曳くのだ。

勝　ハテ、お前は藪醫者だもの。

東林　おきやァがれ。馬士の平次、どうしたしらん、

平次　カウ、お醫者さん、大分馬の曳きやうが上手だの。お前、醫者をやめて馬士になればいゝ。人を殺す氣遣ひねえ。

六三　うさァねえ。東林さん、歩びなせえ。シイ。

ト跡から馬を追ひながら本舞臺へ來る。

花浦　オヤ〳〵、とやしげさん、お歸りか。

多七　東林さん、この子の病氣は、どうでござります。

東林　なにサ、病氣も横痃の事だから、今日おれが大酉へ詣つて、この子の親許へ寄つたところが、退屈の樣子、殊に今日は物日だから、此方へ來たいと云ふゆゑ、平次が馬に乘せて連れて來たのよ

とや　多七どん、聞いてくんな。わつちも内に居ると、樂でよかつたけえが、てえくつなこんだから、お

醫者樣に連れて來てもらつたも、今日は物日ゆゑ、忙がしかんべいと思つてだ。主思ひだと思つてくれせえ。

多七　そりやァお前、奇特な事だ。

平次　コレ、とやしげ、てめえが病氣で内へ歸つてゐるゆゑ、おらァ素敵に案じて、お酉樣へ唐の芋を斷ち物にしたお庇で、今日歸つてくると聞いたゆゑ、おらが馬に乘せて、おらァ丹波與作の心意氣で曳いて來た。まだその上に、てめえの紋と、おらが矢筈の紋と比翼に附けて、馬の腹掛けに染めさせた。心中者だんべい。

とや　平次さん、久し振りでお前の顏を見て、氣が晴れたノシ。わしはけいに心勞な事があります。小塚ッ原が繁昌につけて、吉原の邪魔になるといつて、おッつけお手が入るさうだ。さうすれば、わしらァ田舍へでもやられる事だと思へば、苦患なこんだ。

六三　みんな聞きや。苦患なこんだと……こいつは大笑ひだ。田舍へ行くのは、本國へ歸るやうなものだ。ナニ苦患な事があるものか。

鐵　さうして、自惚れた事を云ふぜ。爰があるといつて、ナニ吉原が構ふものか。

德藏　その色で思ひ出した。彼の所から親方へ、渡してくれろと寄越しました。

ト徳蔵、懐より文を出す。

六三　オイ、よし〳〵。

ト文を取り、莫入れに入れて懐に入れる。

鐵　カウ、頭、そりやアどこの文だ。

六三　ソレ、彼の。

鐵　アヽ、本町の絲屋の娘か。

六三　エヽ、大きな聲をして、野暮な男だ。

ト思ひ入れ。大名皆々これを見て

黒彌　ハテ、いづれも色の世の中でござる。

荒次　あの赤い男でさへ、毛の拔けた女郎と色事の樣子。

有景　我れ〳〵にも出來さうなものでござる。

ト これを聞いて、平次ムッとして

平次　なんだ、この手合ひは。烏帽子を着て熊手を挿し、萬歳が煤はきの手傳ひを見るやうな態で、赤い男が色事をするが珍らしいか。今は斯ういふ男が流行るワ。馬鹿な奴等だ。

荒次　此奴が〳〵、鎌倉の大名に向つて今の雜言。

平次　鎌倉大名なら猶面白い。おらが親仁も鎌倉ぢやア、梶原平三といつて、鎌倉大名の内での俠だ。おらア小さい時に里にやられて、今は王子の梶原村に居る、馬方の平次といふ者だ。鎌倉大名だらうが、なまくら大藏だらうが、頓着はねえぞ。途方もねえ奴等だ。

ト力む。皆々立ちかゝり

荒次　樣々の痴言。梶原どのゝ落し胤でも、今は匹夫の下郎め。イデ、我れ〳〵が

四人　手を下ろして。

ト立ちかゝる。六三、この中へ入り

六三　オイ〳〵、マア〳〵待つてくんねえ〳〵。カウ、大名さん方、初春早々瘤を出しても、野暮だらうぢやアねえか、元を糺せば、根も葉もねえ木片喧嘩。通りがゝりのわしが挨拶だ。不請しなせえ、不請しなせえ。

黒彌　イヤ〳〵、余りなる不埒者。以後の見せしめ、手討に致す。

とや　なんだ、ぬしを手討にするえ。慮外ながら、此とやしげが、さうはさせやせんよ。

平次　サア、手討にでも、ぶッかけにでも、勝手にしやアがれ。

六三　コレサ、人が挨拶してゐるのに、おとなしくもねえ……オイ〳〵、立烏帽子さん、どうしても料簡が、ならぬと云ひなさるのかえ。

四人　料簡ならぬ〳〵。

六三　それぢやァごたつきに枝が咲くわえ。コレエ、摺粉木や紙屑籠が仲人に入りやァしねえぞ。料簡がならざァしてもらふめえ。これからはおれが相手だ。この木蒐め、

ト持つたる唐の芋にて荒次郎の頭を叩く。

荒次　おのれ、大名を芋でくらはしたな。もう料簡が

ト立ちかゝる。多七、捨ぜりふにてとめる。此うち上の方へ七郎助、悪者の拵へにて、頬かむりをして出かゝり、この喧嘩のうち、熊手にて馬の尻をくらはせる。この馬驚いて喧嘩の中を刎れ廻る。これにて皆々ゴッチヤになり、大名四人逃げて入り、女郎二人に、とやしげ、多七、平次、東林、奥へ入る。此うち六三、懐より紙莨入れを落す。七郎助これを拾ひ、知らぬ顔にて隠れる。六三これに心附かず

六三　とんだ交ぜッけえしだ。

勝　カウ、今ので腹がへつた。

鐵　頭、削らうぢやァねえか。

六三　よく飲みたがる。仕方がねえ、爰の酒屋で。

両人　そいつは有り難え。

六三　サア、來さッし。

ト下の酒屋へ入る。七郎助、莨入れより文を出して見て

七郎　なんだ『六三さま參る、絲より』。エ、、イケ嫌らしい。これも何ぞの

ト懐へ入れ

ドリヤ、お京の顔でも見ようか。

ト通り神樂になり、思ひ入れあつて下座に入る。直ぐにこの鳴り物にて、向うより畑右衛門、つゞれの形にて、飴の袋にお市を入れ、これを食ひながら出てくる。跡より五平太、上下、大小、老けたる拵へにて出て來り

五平　コレ〳〵、そこへ行くのは畑右衛門ではないか。

ト聞いて畑右衛門振り返り

畑右　南無三。

ト逃げにかゝる。五平太、ツカ〳〵と寄つて畑右衛門の襟首を捕へ

五平　おのれは〳〵、先達てまで身が家の小者、見所あるゆゑ、一大事の用を頼みしところ、その品を受取ると其まゝ、逐電いたして行き方知れず。おのれが在所を、諸州方々と尋ねて居つた。サア、その品を出し居らう。

ト引据ゑる。

畑右　モシ〳〵、成る程私しはあなたの家來、お主樣の御用を足しまするは當り前なれど、あなたは兼ねて大江の家國を奪はんと

ト五平太思ひ入れあつて

五平　コリヤ、大きな聲で申すな。

ト あたりへこなしあつて

兼ねて祐兼さまと心を合せ、小藤太成家、浪人してゐるを幸ひ、神原左五郎、弟左七郎、みな忠臣の侍ひを、亡きものにせんと思ふゆゑ、かゝる大事を打明かし、頼みし其方。駈落ち致してモシひよつと、露顯に及べば一大事と、種々に心を碎いて居つた。

畑右　サ、そこでござりまする。只の御用なら兎も角も、豆州三島宿にて神原左七郎、曉丸の劍、國許より持參のところ、大藤内が盜み取り、彈正さまに渡せしとの事。まつた江戸屋敷にて、十右衛門が預かりの、菅家の色紙に印子の尊像、あの九郎兵衛と二人して盜み、私しが持つて居ります。直ぐにあなたへ渡す時は、出かした愛い奴、下郎は口のさがなきものと、水も濁らず……トサア古手なせりふを聞かうより、持つて逃げればいつか一度、金になる時節もあらうと、旦那の惡事の足許を、見拔いた仕事、さりながら、田を行くも畦を行くも、金が欲しいの出來心。褒美の金と引替へなら、今でも尊像渡しませう。

五平　サ、その尊像ゆゑ、十右衛門は死罪のところ、日延べを願ひ、左七郎は追放。紛失の劍出でぬ時は、あの十右衛門は切腹。さすれば家中に、忠義立てする者は、神原左五郎只一人。曉丸の一腰は、いかにも彈正左衛門所持なれど、われが持ちゐる二品を、身共へ爰にて渡し居らう。

畑右　お前もいゝ氣な事を云ふものだ。今も云ふ通り、褒美と引替へでなければ渡されませぬ。

五平　うぬ、主の申す事を背くか。

畑右　背くのサ。金づくの事だもの、命がけの仕事。なんぼ主でも、只渡してつまるものか。

五平　うぬ、その口を

ト立ちかゝる。この前より東林出かゝりゐて、この時ツカ〳〵と出て

東林　山住さま、まづお待ちなされませ。

五平　御身は東林老。最前からの樣子を

東林　承りました。何を申すも堤に蟻の譬へ、一大事の事でござりますれば、あの者が申す通り、褒美の金を遣りました方が、よろしからうと存じまする。

五平　イカサマ、そこも承知いたし居れど、只今と申しては、持ち合せたる金子とても

東林　ござりませぬか。左樣なら斯うなされませ。あの者へ書附を書いて遣はされませ。いつ何時でもその手形證文を持つて、金と引替へ。

畑右　こりやアお醫者樣のいゝお裁きだ。併し、その證文も、只の證文では心許ない。ちつといやらしいが、神々樣を誓ひにかけて、神文書いて下さらば、この二品を渡しませう。

五平　神文の一札で、二品を出すとあれば、隨分爰にて書いて遣はさう。

畑右　左樣ならお賴み申します。

ト下の酒屋の内より硯箱を持つて來り、五平太に渡す。五平太證文を書く。此うち畑右衞門、以前の飴の袋に入れしお市を、錦の袱紗に包み、尊像と摺りかへる。五平太、此うち證文を書き終り、東林に渡す。

東林『取かはし置く誓紙の事。一ッ、この度、其方と契約の上は、日本の神々を誓ひに立て、僞はりこれ無く候ふ。もし二心あるに於ては、佛神の御罰を蒙むり、未來は無間地獄へ落入り、長く苛責を受くるべく、現世にてはこの色紙、印子の尊像書附けを以て、いづ方へ罷り出で候ふとも、決して恨み申すまじく候ふ。後日の爲、仍て件の如し』

五平　それで申し分はあるまい。

畑右　そんなら、この書附けを褒美と引替へ。

東林　その文言は書かずとも、此方の大事の書附け、違變はない。して、名前の所は。

五平　主が家來に證文をやるのに、名前どころか味なもの。

畑右　モシ〳〵、左樣なればその名前を、私しより兄の名前。わしが絲屋へ奉公に行つたとき、請け人に立ちましたる、家主の左五兵衞と、その名前になされませ。

五平　然らば名前は、左五兵衞どの。

ト書き終る。

畑右　左樣なら印子の尊像。

東林　して、いま一品の菅家の色紙は。

畑右　ドツコイ。二品ともには渡されぬ。この色紙は金と引替へ。

五平　ハテ、抜目の無い畑右衛門。然らばそれまで大切に

畑右　きつと懐へ入れて居りまする。

ト色紙を懐へ入れ、件の似せ物を五平太に渡す。五平太懐中する。

東林　然らば五平太さま。

五平　東林老。ナニ畑右衛門、その時きつと

畑右　お金と引替へ。

五平　ハテ、間違ひは無いわい。

ト通り神樂になり、五平太下座へ入る。東林は暖簾口へ入る。畑右衛門殘り、思ひ入れあつて

畑右　先づ、まんまと一札を取つて似せ物を渡し、誠の倉像は此方にあり、この二品にてこの身の出世併し、五平太が誠と思ひ、金を渡さば隨德寺。餘ッほどうまい……うまいと云へば、馬めがひだるからう。イヤ、馬よりもおれの腹が來たわえ。ドリヤ、この勢ひに一杯やらかさうか。

ト下座へ入る。通り神樂、鳥追ひ唄になり、向うより雲哲、所化の拵へにて、札の附きし打敷を持ち酒に醉うたる體。左五兵衛、老けたる家主にて骨壺を提げ、燒場の歸り。權兵衛、古鐵屋の形、木綿

やつしにて出で來り

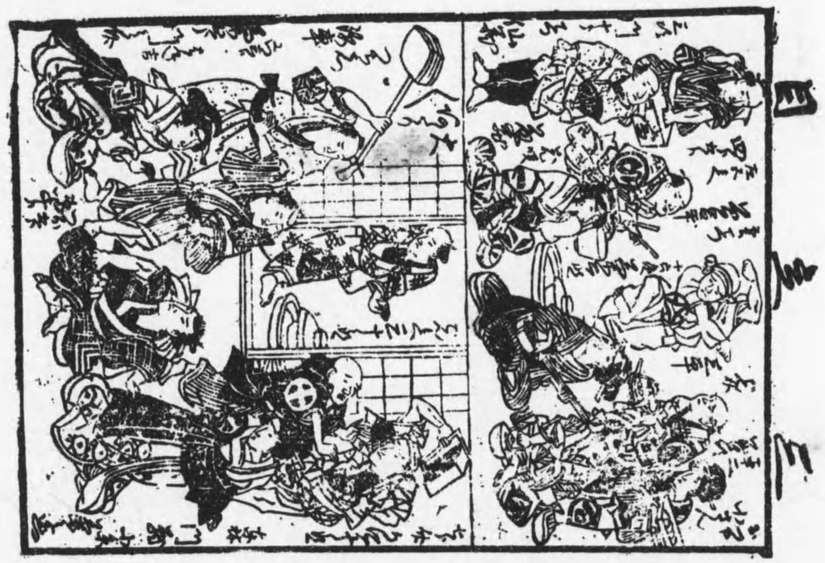
雲哲　カウ〳〵、施主の家主さん、千住に灰寄せに來て、只歸る法はない。是非小塚ッ原で遊んで行かう。この雲哲は大の剛染みがある。おれが臺を一枚奢るぜ。どうだ〳〵。

左五　コレサ〳〵、坊さん、とんだ事を云ひなさい。灰寄せに來て女郎を買つては、家主の役が濟まぬ殊に店子に云ひ譯がない。

權兵　左やう〳〵、わしも御町内の夜番太郎助が養子、この權兵衛が一緒に參りまして、氣が紛れては濟みませぬ。殊にお内儀樣がお果てなされまして、直ぐに女郎買ひとは、佛の手前もござりまする。

雲哲　なにサ、お家主のお内儀は、あんまり惜しくもない女だ。近頃不躾ながら、とても幽靈になつては出られぬ。出れば化け物の口でござる。

左五　成る程、御坊の云ふ通り、女房の死んだのは、錢を三百落した心持ちだといふが、それほど惜しいとも思ひませぬ。それにつけても、貴樣の妹分のあのお梶、内にゐる時はこの家主、至つて執心であつたが、緣のないやら、今ではこの宿場の藝者、女房が死んだを幸ひ、二度添ひが欲しいが、あのはね吉は相談は出來まいか。



權兵　サア、あの妹も、今月年季が明きましたが、いろ〳〵借金の殘りがござりますゆゑ、主人方でもすべよくは出しませぬ。

左五　サ、そこぢやて。妹が得心されたれば、借金位は拂つてもやる。高の知れた借り殘り。それも承知ぢやが、いよ〳〵貴樣は妹を

權兵　得心さへ致したならば、御相談いたしませう。

雲哲　ア丶、權兵衞どの丶妹といふは、はね吉の事か。宿場で評判のはね吉、左五兵衞どの丶女房には打つてつけた。器量はよし。惜しい事にはね吉……これは兄貴の前で麁相な事を云つた。併し、氣前は好いものサ。本町の綱五郎と、大色だといふ事だ。……ホイ、また差合ひを云つた。ハ丶ハ丶丶丶、大きに醉つた。ちよつぴり洒落やせう。オイ、多七どん〳〵。

ト奥より多七出て來り

多七　これは〳〵雲哲さま、ようこそ……オ丶、權兵衞さん、親方が逢ひたいと云つて居られた。

權兵　わしも妹の事で、相談に來ました。

左五　そんなら次手に、妹に逢つて右の事を

權兵　談じて見ませう。

雲哲　其うち左五兵衛さん、ちよつぴり一盞。

左五　跡から行きやせう。

權兵　わしはこれよりお部屋へ行つて、何かの掛合ひ。

左五　待つてゐるによ。

多七　お客だよ。

ト多七先に雲哲、權兵衛奥へ入る。左五兵衛殘る。この時下座バタ〳〵にて、畑右衛門逃げて出てくる。跡より庄九郎、羽織ばつち。傳助、吉原の若い者にて追ひかけ出て、畑右衛門を捕へ

庄九　ヤイ、うぬは〳〵。こちの絲見世の番頭、左五兵衛が弟ゆゑ、奉公に置いたところ、内の品を引出して駈落ち。爰で逢うたが幸ひぢや。持つて逃げた代物を、殘らず爰で返し居らう。

傳助　カウ〳〵、畑右衛門、吉原の若い者傳助だ。去年の暮れから、この春の仕舞ひに、一座の前があるから呑み込んで、貴樣の顔を立てゝやつたに、梨の礫もない上に、附けてやつた馬まで、道で踏みのめして寄越さず。聞けば貴樣は商賣が馬士ださうだ。馬士が附馬をはぐらして濟むものか。なんでも今日は、是非連れて行かにやァならねえ。歩ばつせえ〳〵。

庄九　そんならわりやァ、今では馬士になつたか。イヤ、呆れた奴ぢや。もう〳〵、さういふ身狀では、

ちよつとも待たれぬ。サア、盗んだ物を、いま寄越せ〳〵。

ト大聲をあげる。左五兵衛この中に入り

左五　これは絲屋の後見庄九郎さま。ようこそ弟を捕まへて下されました。この左五兵衛は兄ながら身狀の悪い弟、御帳に附きましたあなた方の、御勝手になされませ。

畑右　これサ兄貴、そんなに氣まづい事を云ふものぢやねえ。現在弟が難儀の場所、どうか始末を附けて下さい。

左五　押しの強い事を吐かせ。難儀するのも身から出た錆ぢや。おれが目にかゝれば、召連れて訴へねばならぬ。知らぬ顔をするは、兄の情といふものだ。

庄九　何もかも云ふ事はねえ。盗人同然な此奴め、直ぐにこれから代官所に。

傳助　わしも願はにやなりませぬ。

畑右　モシ〳〵、お二人ながら、段々御尤もでござります。たゞ口でばかりお詫びを申しては濟みますまいが、爰に斯ういふ代物がござります。

ト懐中より色紙と尊像を出し

これは金になる代物でござりまする。金の出來るまで、この二品をお預かり下さりまして、どうぞ四五日、お待ちなされて下さりませ。

ト庄九郎、尊像をよく〳〵見て

庄九　成る程、こりやア金になりさうな代物。われが風體で、どうして此やうな物を……これも大方

畑右　イエ〳〵、出所は慥かなお屋敷の寶物、以前の旦那から預かつたのでござります。

傳助　この色紙も、そんなら金の代りに、此方へ取つて置きます。

庄九　金の埒が明かぬと、この品は流れるぞよ。

傳助　此方は流れては勝手が悪い。間違ひなく四五日のうちに。

左五　それまで待つてやつて下さりませ。左樣なら庄九郎さま、御不請ながら

畑右　エヽ、兄貴、大きにお世話だ。口出しをしてもらふまい。

左五　兄に向つてその口は

畑右　たつた今、兄ぢやアねえと云つた。

傳助　これサ、兄弟喧嘩は此方は構はぬ。旦那へ云ひ譯、この品を預かつて歸ります。ちつとも早く金を拵へて下さい。こりやアどなたも、おやかましうございました。

ト傳助は色紙を懐へ入れて向うへ入る。

庄九　左五兵衛、あんな奴に構はずと、奥で飲んで行かうではあるまいか。

左五　おんぶなら參りませう。

畑右　エヽ、慾張り親仁め。

左五　何だと吐かす。

庄九　ハテ、構はずと、サア來やれ。

ト兩人奥へ入る。畑右衛門殘り、思ひ入れあつて

畑右　エヽ、いま〳〵しい。折角似せ物を摑ませて、捲きあげたあの一品、つまらぬ事に……併し又、どうか仕事があらう。年寄りの癖に彼奴らは……いヽワ、押しかけて、酒でも飲んでやらう。

ト畑右衛門、暖簾口へ入る。通り神樂、跳への流行り唄になり、向うより槌右衛門、羽織着流し、町人の形。小絲、深川の女郎にて、駒下駄を穿き、三次、船頭。おつや、輕子の形にて、皆々出て來り

槌右　半右衛門が所も、東屋も、みんな座敷が混んだゆゑ、初酉へ參りながら、今夜はひねつて小塚ッ原と酒落るつもり。翁の鰻といふ景物もありやす。

三次　モシ〳〵、旦那、わしやァ此方は、さつぱり勝手が知れやせぬ。その上お客を送り申しても、お

つりもあるまいし、ふさぐ譯だね。

小絲　何ぢややら氣味の惡い所。早く内へ歸りたいわいな。

つや　そして、お前はんには泊りが附いてゐるし、早う歸る方がようござんす。

槌右　コレおつや、この小絲は、男嫌ひといふ噂。それに又どういふ事か客がたんとある。ちつとは又中に、嫌はぬ男がありさうなもの。まづ差あたり、この槌右衛門なぞは

小絲　取分けて嫌でござんす。女郎をしながら男嫌ひも、我まゝらしい事、云ふのは勿體ないと思ふけれど、生れついたわたしの因果、兄さんの仕業で、よんどころなう勤めの身。こりや内の旦那さんも承知の上。床のある女郎衆より、猶更辛いわたしが勤め。可哀さうなと思うてなら、その氣で附合うて下さんせ。

槌右　その氣がとんと恐れる譯だて。おぬしも女ではないか。マア男と寢て見やれ。又おつりきな氣になるものだぜ。

三次　イエモウ、小絲さんに限つては、おつな氣になつた事を、今までまだ聞きませぬ。

つや　もしやにかゝつて、客人もお出でなされますが、お前さんも男なら、小絲さんを落して御覽じませ。

小絲　おつやさん、否だよ。手向けておくれでないよ。

槌右　イヤ〳〵、是非ともおれが落して見せう。

ト抱きつく。此うち七郎助、後へ出かゝりぬて

七郎　オイ、門中で見ッともない。

ト引分ける。

槌右　おぬしは七郎助。

七郎　いま後で聞いてゐたら、兄の仕業で辛い勤めと云つたが、兄といふのは醫者の東林、賣つたはおれだ。おれも元はりやんこの端、曾我の家來の團三郎が、兄の間抜けに勘當され、其うちにわれが親、風の神の太左衞門が養子になつた。いはゞおぬしの聟になる氣。てめえがおれを嫌ふゆゑ業が沸えたから、千住通ひをおッ始め、金に詰まつておぬしが身を、仲町へ仕切りで出し、てめえが兄の東林と、一緒におれが金を借り、證文の表はおれが兄なれど、いはゞ亭主の七郎助。

小絲　サ、その男が否でござんす。親とお前が承知でも、わたしが否で杯せねば、亭主でもござんせぬ。あんまり我まゝ云うて下さんすな。

七郎　その又男嫌ひが、なんでわりやァ子を産んだ。

小絲　エ、。

ト思ひ入れ。

七郎　男嫌ひが、父なし子を孕んだか……云ふな。何もかもおれが知つてゐらァ。成田へ詣つて歸ると其まゝ、ほてれんになつて子を産んだ。それでもわりやァ男嫌ひか。サア、この上は、亭主でなくば矢ッ張り兄よ。兄の高下で、われを槌右衞門さんの所へ片附ける。女房になれ。

槌右　ハゝア、そんなら小絲は子があるか。さういふ事なら、あんまり男嫌ひでもあるまい。

三次　わしも斯う云へば、どうか金の襟に附くやうだが、客と女郎と、何方も粗末になりませぬ。お前が承知さへすれば、兄貴もお前も、浮び上がるといふものだ。男が嫌ひでなくば、旦那の心に隨ひなさい。

七郎　コレ小絲、なぜ默つてゐるえ。男嫌ひが子を産んだぢやァねえか。否だの應だのと云ふが我まゝといふものだ。たつて否だと吐かすと、打のめしても承知させる。

槌右　コレ兄貴、おれもこれまで小絲にかゝつて、門屋敷も半分家質、もう〳〵云ひかゝつては、否でも應でも女房にする。さう思つて下さい。

三次　カウ、小絲さん、お前、默つてゐちやァ解らねえ。どうとも返事をしなせえな。

七郎　エ、、小焦れッてえ女だ。なぜ物を云はねえ。

ト小絲思ひ入れあつて

小絲　サア、おつやどん、行かう。

ト おつやの手を引き、行きにかゝる。

七郎　待つた。挨拶なしにどこへ行く。

槌右　今日一日はおれが自由だ。斷わりなしに、やる事はならねえぞ。どうとも斯うとも返事をしろ。

小絲　いつまで云つても返事は一つ。

七郎　否だと吐かすのか。

小絲　アイサ。

トすましてゐる。槌右衛門ムツとして

槌右　この女ア、太え女だ。

ト小絲、槌右衛門の顏を見て

小絲　モシ、どなたから御朱印を貰つて、わたしを女呼はり、措いて下さんせ。詞の凄味や金づくで、女郎が自由になるものと、思ふ心の行きどまり、苔の清水でその顏を、寫して見てから云はしやんせ。わたしも女子に生れたからは、好いた男もござんせう。無うてかいなア。思ふ男はたつた一人。浮名巽の中裏で、噂されるは口許が、淺い仲ではござんせぬ。誠に眞實心底づく。それより外はどなたでも、男嫌ひと評判を、賣りつけ今日まで辛抱した、憚りながらこの小絲、否ぢやと云ふに間違ひは、金輪奈落無いほどに、マアさう思うて下さんせ。

七郎　わりやア大分云ひ草が上がつた。わりやア又外に男があるなア。

ト懷より以前拾ひし文を出し

『六三さままゐる。絲より』。こりやアわれが手紙であらうが。

小絲　いかにお前、わたしを苛めたいとて、覺えもないその手紙。そんな事は知らぬわいな。

七郎　イヽヤ、われが文に違ひはねえ。

槌右　そんなら小絲はまた外に、色男へやるその濡れ文。エ、、腹が立つわえ〳〵。

トこの前より六三出かゝりゐて、懷を探し見て、そこらを尋ねる思ひ入れ。

六三　先刻たしか爰らへ。

ト七郎助の持ちし文を見て

オヽ、爰にあつた。こりやアおれのだ。

ト取りにかゝる。

七郎　貴様は誰れだ。

六三　おらァこの文の主の、六三といふ大工だ。

槌右　ハヽア、そんなら小絲が色だといふ。

六三　イヽヤ、そりやァ間違ひだ。先刻のごたつきに、紙莨入れの中へ入れて落した文。いかにも絲といふのはおれが色だが、小絲と書いちやァねえぜ。元より小絲といふ女は、おらァ見た事もなし世の中にやァ同じ似た名もあるものだ。絲と小絲の間違ひで、先刻から見てゐれば、可哀さうに若い女を捕まへて、人中でわつぱさつぱ。どこの人だか知らねえが、見つともねえ、よさつしやい。この文はおれがのに違ひない。

槌右　イヤ〳〵、それでもその文は、小絲が手蹟に違ひない。男嫌ひと吐かす癖に、嫌らしいその文ゆゑ。

六三　それで貴様か腹が立つか。見かけは立派な人だが、わからねえ男だ。當人も覺えはねえと云ふし宛名の六三は猶知らぬ小絲。アヽ、こりやァなんだな。譯もない難題を、この子に云ひかけて口説くのか。アヽ、不便な事だ。色の仕様を教へてやりてえものだ。

ト嘲笑ふ。七郎助思ひ入れあつて

七郎　この男は、大分おいらをきよくるが、そんならその文の、絲といふのはどこの女だ。

六三　それを聞いて何にするのだ。そんじよそこの、斯う〳〵いふ女だと、迂潤にしやべるべら坊があるものか。

槌右　それが云はれずば、いよ〳〵小絲に違ひねえ。

三次　小絲さんの文なら、おれが手をよく知つてゐる。ちよつと見せやれ。

ト六三にかゝるを、突き廻して見事に殴りのけ

六三　どんな用が書いてあるやら知れぬ文、うぬ等に見せて堪るものか。人の色の文詮議も、いらぬお世話だ。よし又この文があの子の文で、おれが所へ來たならどうする。女郎は賣り物買ひ物。勤めの習ひ、客の所へ文を寄越すめえものでもねえ。貴様は間抜けて振られてゐるから、女の文は見た事はあるめえな。この文は、成る程、小絲さんの所から、おれがとこへ來た文よ。

ト小絲思ひ入れあつて

小絲　モシ、わたしやァそんな覺えは

六三　ねえ筈よ、おれも知らねえものを。併し此奴等が、あんまり氣を揉むゆゑ、お前の文だと云ふな

ら云はせて置いて、片ッ端から面の皮をひん剝いてやらァ。コレ、お客だか飛脚だか知らねえがこの文は、おれが紙莨入れに入れて置いた。どうして貴様が持つてゐる。大方人ごみの中で、稼ぎでもしやァがるのだらう。サア、文を入れて置いた莨入れを、どこへ吐いた。

槌右 それをおれが知るものか。

六三 知らねえも凄まじい。この盗人めらァ。女子供をつらめえて、無理無體の難題の、云ひ草は達者に吐かすが、文の名宛の六三はおれだ。云ひ草があるならおれに云へ。大工の六三が相手にならう。初春早々ごたつくも、誰が指し金の節なしに、出入りも濟むか墨壺の、絲と小絲の間違ひから、一寸ならぬ五分鑿でも、引かぬひつきり氣の荒醜、こいつは一番、團十郎を出さにやァなるめえ。

トこれにて皆々氣味惡き思ひ入れ

槌右 これサ〳〵、若いの、いゝよ〳〵。間違ひなら間違ひで、そんなに筋を出す事はねえ。ナァ三次

三次 左やうサ、畢竟酒の上の事で、いはゞ痴話喧嘩も同じ事。

七郎 先刻爰で拾つた文、丁度名前が似たゆゑに、ツイ云ひかゝつた間違ひだ。

槌右 カウ〳〵、腹を立たずに、不請しなせえ〳〵。

六三 ムウ、張合のない奴等だ。そんなに云ふものを、此方から好んで出入りをしたくもねえ……

小絲 小絲さんとやら、お前も機嫌を直しねえ。

小絲 どなたか存じませぬが、有り難うござんす。

つや どうなる事かと、わたしや大抵案じた事ぢやござんせん。

六三 ナニお前、案じる事があるものか。聞けばあの子は、男嫌ひださうだね。わしもこの文の、絲といふものに搦まつてゐるざァ、少しはあの子に、こぐらかりてえ心もあるが、何を云つても、彼方は男嫌ひの事なり、どうで出來ねえ相談だ。縁があつたら又その後逢ひやせう。

つや モシ、ちつと深川へお出でなされまし。

六三 アイ、お忝うござりやす。わッちらがやうな者でも可愛がつて

槌右 エヽ、見ること聞くことにつけて小胸の惡い。

三次 マアモシ、お酉様へでも詣つて、氣を直しなせえ。

七郎 小絲を爰へ殘して置くは、ほんの猫に鰹節。

槌右 それ〳〵、狐に油揚げ。サア〳〵小絲、一緒に來やれ。

ト小絲の手を取るを、振り放し

小絲　サア、おつやどん。

ト おつやに手を引かれる。

槌右　そんなに否か。

三次　ハテ、野暮を云はずに歩びなせえ。

六三　ざまを見や、犬を見たやうな奴等だ。

三次　わんだと吐かす。

七郎　ハテマア、行きなせえ。

ト 通り神樂、鳥追ひ唄になり、この人數皆々奥へ入る。

六三　いま〳〵しい奴等だ……オイみんな、好い加減に食へな。

ト 酒屋の内より勝、鐵、德藏出て來り

勝　カウ、親方、お前いま後で見てゐたが、今の女に氣があるの。

六三　馬鹿を云へ。彼奴は男嫌ひだ。殊におらア、知つてゐる通り、絲屋のエテがあるし、どうしてそんな事があるものか。

德藏　ひよつとそんな事があると、わつちが云ひつけます。

六三　ソレ見や、子供は正直だ。おらア外の女は目に入らねえ。

鐵　嘘をつくぜ。時に勝や、勘定はよかつたかえ。

勝　あれで澤山よ。

六三　そんなら酉へ詣つて來よう。

皆々　サア、行きなせえ。

ト 六三はじめ、この人數皆々下座へ入る。直ぐに通り神樂、流行り唄になり、向うより、はね吉、藝者の拵へ。綱五郎、羽織股引、藤倉草履にて、熊手と御多福の面を持つて、はね吉に引ツ張られ出る跡よりお京、宿場藝者の形にて附いて出る。

はね　コレ、綱五郎さん、お前何をウロ〳〵してゐる。大方先へ行つた、深川の女郎衆とかいふ風な、女に見惚れての事か。お前も餘ッぽどのろい男だ。今日爰へ一緒に來たも、わたしの兄判で、權兵衛どのが賣り主。それに内では年季が明いても、借の抵當に出す事はならぬ何のと云ふゆゑ、その譯道を附けてもらはうと思つて、一緒に來たのではござんせぬか。

綱五　知れた事だ。おれもふとした事で、てめえと浮名が立つて、本町河岸で人にも知られた綱五郎、絲屋の内へ聟に入り、中根屋の次右衛門どのが病死の跡、たうとう内はおれが潰して、今ぢやア

その株を買つた人は、阿野屋十兵衛といつて、本町二丁目で絲屋商賣。その株を賣つたこの佐七は、元へ戻つて矢ッ張り本町綱五郎。女房は本所の松坂町で、相も變らぬ苦しがり。てめえの事もどうかして、昔の身ならばと、新内じみた事を云つたばかりぢやァ始まらねえ。金といふ强者にやァ、關羽が渡りに來ても叶はねえ譯だ。それゆゑてめえの兄貴に、主人方へ嘆いて見ろと云つて先へ寄越したが、マァ〳〵、その返事を聞いた上、また思案もあらうぢやァねえか。

お京　わたしもいろ〳〵借金はあるけれど、年季々々と分けらるればよいけれど

綱五　そこが主人方の附け目。鹽引で茶漬を食つた錢まで貯めて置かれて、年季にされちやァ、子供も困る譯だ。

トこの時奥より權兵衞出てくる。はね吉見附けて

はね　アレ兄さん、お前、旦那に逢つておくれか。

權兵　オヽ、綱五郎さん、段々主人方へ掛合ひましたところが、妹の借金は、みんな證文になつてゐるゆゑ、その濟み方の附くまでは、藝者が否なら女郎にしても勤めをさせると、とつてもつかぬ强情ばかり。どうしたものでござりませう。

綱五　爰らの商賣屋ぢやァ、その位な横は云ふだらう。何を云ふにも借りたが不請。

はね　お前借りたと云つて、固まつた金でも借りはしめえし、ツイ浮れた酒の上で、臺を取つたり何かしたのサ。あんまりわッちが氣前がよかつたものだから、その上にわッちやァ、どこか門之助に似たとか云つて、來る客も褒めるから、旦那にグッとのりが來て、女郎衆にでもする氣ださうだ。吉原の花魁にでも、なるのならいゝけれど、小塚ッ原ぢやァ冴えないね。

綱五　あんまりべら坊云ふな。それだから世間で、兄貴の前ぢやァ云ひ憎いが。

權兵　刎ね者ぢやとの評判。そこでてめえの名もはね吉。

はね　オヤ、お前方、よく知つてお出でだね。みんながわッちの事をさう云ふよ。

綱五　困つたものだ。てめえ、門之助にやァ似ねえ。小野の小町に生寫しだ。

はね　ムウ、ちいッと似てゐると、直にそんな事を云ふよ。

權兵　これはしたり、其やうな事を云ふより、てめえの身の上の事。その證文も出しては見せたが、恥かしいがわしは無筆。どういふ事が書いてあるやら、よいやうにされたかも知れぬ。兄がこれ程苦勞をしてゐるに、おぬしはよい氣な

はね　兄が苦勞で枕を投げた。

お京　はね吉さん、あんまりだよ。あのやうに兄さんが、苦勞をしてゐるもの。綱五郎さん、どうぞ仕

様はござんせぬか。

綱五　仕様と云つたら、借金を償ひさへすれば、一も二もねえ、と云つたところが差當つて

はね　色男は、いつでも金が無いものサ。

お京　わたしも同斷。相手にする思ふ男は

はね　矢ッ張りごろつき眞ッ裸。

權兵　また彼方から惚れてゐる男には、金があつても妹の氣には

綱五　して、その男は

ト權兵衞、綱五郎に囁く。

ア、、そんなゥ大家の

權兵　先刻も先刻、その事を

綱五　殊に女房が死んだ噂。その相談から

はね　わッちやァ否だよ。年寄りの癖にあの家主、頭は藥罐で、あんま鍼の療治。

お京　そこを辛抱したならば

綱五　一番何ぞ好い思案がッ何かの話しは隣の酒屋で

權兵　そんなら妹へ今の話しを

綱五　兄貴と一緒に

ト はね吉を突きやる。

はね　それでも兄さん、今の事は

綱五　兄貴ゆゑには綱五郎、心を許して

權兵　委細の話し。

綱五　とつくり御思案。

はね　大福餅あつたかい物で一つおやりな。

お京　わたしは内のしがくをば

はね　お京さん、賴むよ。サア兄さん

ト權兵衞の手を取り

綱さん後にえ。チャン

ト我が手に唄を唄ひながら、權兵衞の手を取り、酒屋へ入る。お京、奥へ入る。綱五郎殘り、床几に腰

をかけ

綱五　あのはね吉には困るぞ。

ト下座バタ〳〵になり、小絲駈けて出て來り

小絲　モシ、ちよつとわたしを隱して下さんせ。

ト綱五郎の羽織の裾へ隱れる。下座より槌右衞門、三次駈けて出て來り

槌右　どこへ逃げやァがつたか。

ト綱五郎を見て

モシ〳〵、お前、先刻から爰に居なすつたか。

綱五　アイ。

槌右　爰へ女が一人、逃げて來やァしませんか。

綱五　アイ、來やした。

三次　その女は、どこへ行きました。

綱五　その女は、風呂敷包みを背負つて、杖を突いて、西新井の大師樣へ行くと云つて、今まで爰に休んでゐました。

槌右　なにサ、そんな女ぢやァねえ。グツと年の若い、派手な女サ。

綱五　アヽ、そりやァ今、あの地藏樣の後で、派手な着物を着て、嫁菜を摘んでゐた。餘ッほど年も若かつた。

三次　いくつ位な女でございます。

綱五　七つか八つ位、まだ芥子坊主だ。

槌右　エヽ、この人は、よく人をちよつくり返す人だ。深川の女郎のやうな風體の女よ。

綱五　そんならさうと、早く云ひなさればいゝに。その女は、いま爰の内へ入りました。

槌右　アノ爰の内へ、何しに。

綱五　それまではわしやァ知りませぬ。

ト槌右衞門、暖簾口へ向つて

槌右　オイ、賴まう〳〵。

ト奥より多七出て來り

多七　ハイ〳〵、これはようお出でなされました。お客だよ。

槌右　これサ〳〵、おれは客ではない。

三次　いま爰の内へ女が一人

多七　一人でも二人でも、女郎衆はいかい事ございます。サア、先づお上がりなされませ。ソレ、お茶を上げろよ。

槌右　これサ、客ではないと云ふに。

ト云ふを聞かず、多七、捨ぜりふにて無理に二人を連れて入る。

綱五　サア、もうようございやす。

ト立つ。小絲、癇の起りし體にて、床几にかゝり、俯向いてゐる。

どうした〳〵。ア、癪か。

ト後へ廻り、いろ〳〵介抱して

アヽコレ、何ぞ薬が

ト紙入れより何やら薬を出して服ませ

カウ、女中さん、氣をしつかり持ちなせえ。

小絲　ハイ、有り難うございます。もうようございます。

綱五　お前、どうしたのだえ。

小絲　ついぞ逢うた事もないお前さんに、此やうにお世話になり、お氣の毒でございます。

綱五　なにサ、そりやアいゝが、お前、一體どうしたんだえ。

小絲　初めて逢つたあなたへ、お話し申すも恥かしい事ながら、わたしは深川の小絲といふ遊びの者。少し譯がございまして、云ひ交した男、しかも子まで生した仲、その男の行くへも知れず、その後いろ〳〵艱難して、斯うした身の上。男嫌ひと云ひ通す、勤めの内の猶辛さ。いま爰へ來たあの人が、酒で落すと無理無體、斷わり云ふても恥しめても、一向聞かぬ無理口説き。それゆゑ爰へ逃げて來て、お前さんに隱してもらひ、濟まぬ心に血の道と、持病の癪にて又ぞろや、お世話になつた氣の辛さ。御恩は一生忘れませぬ。有り難うございます。

綱五　ムウ、女郎商賣にやア似合はぬ、一人の男に心中立て。それで男嫌ひとは、猶々好もしい。人も迷ふ筈だ。そしてお前、子があると云つたの。

小絲　アイ、今年で五つになります娘の子。わたしが養子に參りました、先の親の心が悪さに、後には わたしをむがうして、その後産み落した娘も、里親へ預けたと云ふたは嘘。誠はその子を捨てたといふ事。跡でわたしはその話しを、聞いた時の悲しさ。初めて逢うたお前さんに、恥かしい身の上話し。外へ話して下さんすなえ。

綱五　ハテ、とんだ話しだね。併しお前、子を産みながら男の肌を、今に知らぬといふ事もあるまい。

殊に浮氣な商賣柄。小絲さん、なんとお前、恩にかけてぢやァねえが、今の禮をする氣はねえか。

小絲　詞の禮で濟まぬというて、不躾らしいお禮の仕樣も

綱五　なにネ、いくらもありやす。

小絲　そのお禮の仕樣は

綱五　そのお禮の仕樣は……斯ういふお禮よ。

ト抱きつく。

小絲　これはしたり、お前は餘ッほど冗談ものだね。

綱五　野暮を云ひなさんな。冗談に男の口から云はれるものかな。初めて惚れたのぢやァねえ。先刻橋場の渡し場から上がつた時に、小嫌らしいがゾッとする樣、ぷッつけて云やァ矢ッ張り惚れたのだ。これサ、いゝぢやァねえかな〳〵。

ト寄り添ふ。

小絲　誠に嬉しうござんすが

綱五　そのがの字が氣障だの。

小絲　そりやお前にも似合はぬ仕方。男嫌ひと云ひ憎い、その譯道を聞いてゐながら、恩を見せての板

縛り、否と云はさぬ所なれど、こればつかりはお斷わり。いかに深川に澤山な馬鹿ぢやとて、冷かして下さんすな。

綱五　その云ひ草が堪えられねえ。

ト又抱きつく。下座よりおつや出て來り

つや　アヽ、小絲さん、お前を先刻から尋ねてゐたわいな。

小絲　わたしや持病の

つや　また癪かえ。そんなら爰の内を少つとの間借りて

ト暖簾口へゆき

お賴み申しませう。

ト奥より多七出て

多七　ハイ〳〵、どなたでござります。

つや　モシ、少つとお賴みが

ト多七に囁く。

多七　エヽ、左樣なら、下の茶の間の座敷が明いて居ります。そこへお連れ申しなさい。

つや　そんならわたしが先へ行つて、小絲さん、早く來なさんせえ。

ト多七と連れ立ち入る。

小絲　おつやどん、わたしも一緒に

ト行かうとする。

綱五　小絲さん、蛇の生殺しは恐れるぜ。どうしてくれるな。

小絲　ほんに困るねえ。

綱五　なぜな。

トまた抱きつくを

小絲　お氣の毒ぢやが……好がねえよ。

ト振り切り、有あふ莫入れを綱五郎に打ちつけ、唄になり、暖簾口へ入る。綱五郎は莫が目に入りし思ひ入れにて、うろ〳〵してゐる。下座より六三、何心なく出てくる。綱五郎、小絲と思ひ、六三にしがみつく。

六三　誰れだ。何をするのだ。

ト綱五郎、目をこすり、六三を見て

綱五　てめえは六三か。

六三　兄貴、こりやァ何の眞似だ。

綱五　エヽコレ、いま爰へ深川の女が來て、古い奴だが

六三　悪い所へ來たと云ひさうな鹽梅だが、兄貴、また始まつたの。よすがいゝぜ、見つともねえ。

綱五　そりやァ何を。

六三　何でもいゝ、ちよつと爰へ掛けなせえ。

ト合ひ方になり、綱五郎を床几に掛けさせ、思ひ入れあつて

いま改めてこんな事を云ふのも、をかしなものだが、仔細あつて、二人が仲は兄弟同然、兄分と頼んだこなたに、意見がましく云ふではないが、絲屋の娘お房どのゝ所へ聟に入り、一年經つか經たぬうちに、財産を潰し、絲屋の株を人に讓り、居附きの娘のお房どのまで連れて出て、たんと苦勞をさせたのに、たうとうそのお房どのを構ひつけず、此ごろ聞けばお房どのは、捨て子を拾うじ育て上げ、行く〳〵はその子にかゝると、お前の事は恨みもせず、女の身の獨り持ぎ。今時の女には珍らしいと世間の評判。野暮な事を云ふやうだが、ほんに涙のこぼれるやうな志し。それに引替へ、いゝ氣になつて女狂ひ。それも思ひ附きのある女ならばまだしもの事。小塚

ッ原で名代の馬鹿藝者、はね吉といふ奴にくらひ込み、人に後ろ指をさゝれるのも知らず、外で噂を聞く度に、わしやァ辛くつてなりませぬ。その上いま聞きやァ、深川の女にどうとか斯うとか云つたが、大方そりやァ先刻の、男嫌ひだと云つた、小絲といふ女郎の事だらう。あの女を口説いてよけりやァ、わしが口説いて色になる。それさへ一人の男に情を立て、女郎の身で大それた、男嫌ひといふ程な女、光る源氏業平が口説いたとて、ナニ得心をするものか。それにマア見つともねえ。よし又得心したところが、女に貞女を破らせて、末も遂げねえ浮氣話し。先づ第一先祖へ立つめえぢやァねえか。ほんに〳〵愛想の盡きた。コレ兄貴、女狂ひも、少つとは止められさうなものだによ。

ト思ひ入れ。綱五郎溜め息をつき

綱五　成る程、おぬしにさう云はれては、おらァ一言もねえ。誤まつた〳〵。もう止める。ふつ〳〵女は振返つても見ねえ。

六三　久しいものだ。口は立派に云ふけれど、どうしてそれが

綱五　本當にやめる。女は一生斷ち物にする。併し女を斷つてしまつた日にやァ、鰯の頭を丸嚙りにしてもいゝ理屈だ。それぢやァあんまり色氣が無い。一月に一度ぐらゐは、よさゝうなものだ。

六三　それ〳〵、その位な心持ちでゐれば、間違ひはねえのサ。

綱五　いよ〳〵そんなら、きつとその心持ちだの。

六三　そりやァ誰れに云ふのだ。

綱五　お前樣に。

六三　ヤ。

綱五　人の一寸、我が身の一尺……誠は神原左七郎さま。

六三　ヤ、コレ。

ト入れ替つて六三を上座へ直し、誂らへの合ひ方、綱五郎こなしあつて

綱五　モシ、若旦那樣、あなたは私しが爲にはお主筋。いつぞや豆州三島宿にて、お預かりの曉丸、何者の爲にか奪ひ取られ、その越度ゆゑ今の御流浪。兄御十右衞門さまとても、江戸屋敷にて尊像色紙紛失ゆゑ、日延べの日限までに、その二品の出ぬ時は、兄御十右衞門さまは御切腹。都合三品の寶をば、詮議せにやならぬ大切なお身の上。それゆゑに世間體は、私しが弟分。御器用な細工氣から、思ひ附いたる大工の六三。御流浪なされて日もないに、最早手馴れし職人業。今ではどうやら棟梁株のやうに弟子も殖え、世間の詞使ひなど、敎へてあゲたが仇となり、喧嘩好み

の專法附合ひ、馬鹿な面だの、べら坊のと、それが神原左七郎さまの……トサア、今更そんな野暮を云はずとも、御承知でもござりませうが、いま私しへ女狂ひの御意見、身に比ぶればあなたこそ、まだ御勤役のその以前、京都祇園町の藝子、ほしといふ女に迷ひ、しかもその頃懷妊との事。又その上にお國許には、お園さまといふ云ひ號け。互ひにお顏は知らねども、お國許にはさういふものがありながら、この頃聞けば今の絲屋、阿野屋の娘お絲といふ女に現になり、一人が噂、二人が話し、三人四人云ひ觸らし、今ぢやアぱつと浮名が立ち、寶の詮議もどこへやら、女狂ひは町人の事、あなたは心を入れ替へて、紛失の品を取戻し、再び見返るお國の松、家名を吹き起す所存はござりませぬか。いかにお年が若いとて、身持ち惰弱な若旦那。エヽ、お前樣はなア。

ト思ひ入れ。六三、モヂ〳〵して

六三　成る程、おぬしにさう云はれては一言も無い。誤まつた〳〵。もう止める。ふつ〳〵女は振返つても見ねえ。

綱五　久しいものだ。口では立派に仰しやるけれど、どうしてあなたが

六三　本當に止めます。この左七郎は侍ひ、手斧にかけても……イヤサ、刀にかけても嘘はつかねえ。

イヤ、僞りは申さぬ。女は一生斷ち物にする。併し、女を斷つた日にやア、鰯の頭を丸嚙りにしても……イヤサ、魚の頭を丸で食べてもよい理屈でござれば、あまり色氣がない。一月に一度ぐらゐやッつけても、イヤ、おやッつけなされても、よからうではあるまいか。

綱五　その心持ちでゐれば譯は無いのサ。

ト奥より權兵衞出かゝり居て、六三に見えぬやうに、綱五郎の袖を引く。

誰れだ、氣味の悪い、何をするのだ。

ト權兵衞招くゆゑ、下の方へ行き

權兵衞、何ぞ用か。

權兵　ちよつと〳〵。

ト綱五郎を花道の方へ連れゆき

外でもない。あれにござるは神原の御次男、左七郎さまではないか。

綱五　成る程、あれは若旦那左七郎さま。先度もおぬしに話した通り、今では御浪人、町家のお住居。

權兵　それも寶の紛失ゆゑ、御兄弟の御身の上。おれも若黨奉公の時分、聊かの誤まりにて、お暇は出たれども、何を云つても元は主筋。寶の御詮議なさるゝなら、及ばずながら共にお力にもなりた

いが、なんとおぬし、お詫びをしてはくれまいか。

綱五　オットよし〳〵、合點だ〳〵……。若旦那、少とあなたへお願ひがございます。

六三　これは改まつた、わしへ願ひとは。

綱五　外でもございませぬが、以前勤めて居りました若黨權兵衞、聊か誤まちにて、お暇下されたなれども、古主のあなた樣、御流浪なされるを、よい氣味顏に見てゐられず、それゆゑお詫び致してくれいと、私しへの賴み。この儀はどう致したらよろしうございませう。

六三　以前暇を遣はした家來が、主人の流浪を恨みもせず、詫び事するは忝い志し。賴み少ない我が身の上。兎も角もこなた、よいやうに賴みます。

綱五　早速の御承知、有り難うございます。サア、權兵衞どの、お詫びが叶つた。サア〳〵爰へ。

權兵　參りましても大事ございませぬか。

ト前へおづ〳〵出て

若旦那樣。お久しうございまする。

ト六三へ挨拶する。

六三　おぬしも無事で、めでたいな。

權兵　有り難うございます。綱五郎どのとは昔朋輩。あなたのお身の上。寶の紛失何もかも、詳しく樣子を承りました。我れ〳〵が爲にもお主の御難儀。身を粉に碎きましても、共々詮議いたします。必ずお氣遣ひなされますな。

六三　ハテ、賴もしいその詞。この上ともに二人の衆。

綱五　その事はお氣遣ひなされまするな。その代り若旦那、少つと眞面目になさるがようございます。

六三　おれも心を改めるによつて、其方も今日向藝者狂ひは

綱五　なにサ、私しのは、斯ういふ譯でございます。

ト六三へ囁く。

六三　ア、、そんならおぬしは假の色事。誠の男はこの權兵衞。

權兵　何と仰しやいます。誠の男はこの權兵衞とは、ア、はね吉の事でございまするか。

六三　その、はね吉とやら、どんな女か、見たいものだ。

權兵　お目にかけるも、お恥かしうございます。

綱五　その女を玉に使つて、金の工面や何やかや。

權兵　お主を貢ぐその爲に

綱五　朋輩同志が及ばずながら
六三　おれへの忠義、その深切。
權兵　寶の手がゝり知れるまでは
綱五　浮世を憚り
六三　町人姿に
權兵　矢ッ張りあなたは
綱五　大工の六三。
六三　その兄分の
權兵　綱五郎どの。
綱五　元へ戻して、今夜はワッサリ。
權兵　とんだ所で
綱五　姫はじめか。
六三　ヤ、そいつはあやまる。
權兵　何かは二階で

六三　兄貴、權兵衛どん
權兵　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、三人思ひ入れあつて奥へ入る。下座より畑右衛門、生酔ひにて、跡より平次、馬を曳いて出で來り
平次　コレ、畑右衛門、大分醉つてゐるから、野暮を云はずに、内へ歸つて早く寢やれ。
畑右　それでもアノ、問屋の小八のべら坊め、あんまり人を安くしやアがる。
平次　いゝよ〳〵。おれが何もかも承知だ。早く行つて寢やれ。
ト無理に畑右衛門をなだめる。此うち畑右衛門、ヨロ〳〵して、以前の手形證文を落す。畑右衛門これを知らず
畑右　そんなら平次、貴樣に任せるぞ。
トよろ〳〵しながら捨ぜりふにて向うへ入る。平次、落ちたる書附けを見付け
平次　オイ〳〵、何か書附けが落ちた。オヽイ〳〵……エヽ、あの野郎め。併し、役に立たねえ書附けだんべい。
ト馬を曳き、右の書附けを懐へ入れて、馬に沓を穿かせる。この時奥より五平太出て來り

五平　ヤレ〳〵、様々な用事で困り果てる。困ると云へば、最前は人目があるゆゑ、先刻の尊像、受取つたまゝ改めもせぬが、念の爲め、ちよつと爰で

ト懐より最前の尊像を出し、見ようとする。下手より伴助出て來り

伴助　それにござるは、山住五平太さまではございませぬか。

ト この聲を聞き、恟りし、尊像を後へ隠し、伴助を見て

五平　其方は神原佐五郎どのゝ、家來ではないか。あわたゞしい。身共に恟りさせる。何ぞ身共に用事でもあるのか。

伴助　何も左樣に恟りなさるやうな、用事でもございませぬ。ちと内々にあなた樣に

ト段々側へにじり寄る。五平太、尊像を見られては惡いと、後へ隠したまゝ段々後すさりして、馬の鼻面の所へ行き

五平　神原氏の御家來、身共に用とは何事ぢや。

伴助　別儀でもございませぬが、今度頼朝公へ差上げる印子の尊像、まつた友切丸の紛失も、箱根下山の箱王丸とも、因幡幸藏が仕業とも相分らず。併しながら、その因幡幸藏と申す盗賊、金錢に目を掛けず、名ある刀脇差ばかり盗み取る事。それゆゑお上より内々の御詮議。そのお役目はあなた樣と、主人佐五郎。即ち用意の金子十兩、相渡せと、お役所よりの御用金。イザ十兩、お受取り下さりませう。

ト包み金十兩出す。

五平　ヤレ〳〵、それで少し落ちついた。何事かと大きに恟り致した。然らば金子受取るでござらう。

ト左の手を出し、金を受取る。

伴助　私しの落でございれば、お受取を下さりませ。

ト この時、後に隠したる尊像を、馬が喰ひつく。

五平　アイタ、、、、、。

伴助　どうなされました。

五平　馬が喰ひつきました。

ト馬、吹替への尊像をムシヤ〳〵食ふ。五平太驚き

ヤア〳〵〳〵、手を喰ひついたばかりか、大切な尊像、あの馬めが……イヤサ、尊像ではないアレ〳〵、ムシヤ〳〵、こいつは大變だ〳〵。

伴助　モシ〳〵、その受取を。

五平　それどころではござらぬ。屋敷で認めて、持たせて遣はしませう。

伴助　左樣なれば私しは

五平　お使ひ御大儀。

伴助　お暇申しまする。

ト伴助引返して入る。

五平　サア、この畜生め。

ト馬の口を取出す。

平次　モシ〳〵、お侍ひ樣、その馬を、どこへ曳いてお出でなされます。

五平　この馬は、身が大切な品を食つてしまつた。それゆゑ屋敷へ曳いて行く。

平次　モシ〳〵、とんだ事を仰しやります。この馬を取られては、私しの鼻の下が干上がります。お前さんの大事な物とは、どんな物でござります。

五平　サア、その品は……云ふに云はれぬ大切な品を

平次　どんな品か知りませぬが、馬は食ひ物でなけりやア喰ひはしませぬ。そして食つてしまつたものを、どうなるものか。

五平　此奴が〳〵、武士に向つて慮外千萬。是非とも馬を身共に渡せ。

平次　馬はどうしても渡されません。

五平　おのれ、渡さぬと手は見せぬぞ。

平次　手は見せなくつてもいゝから、馬を返さつしやい。

五平　さう云や、おのれ

ト脇差を鞘のまゝ拔き、平次の眉間をくらはせる。

平次　ヤア、切つた〳〵。人殺しだ〳〵。

ト無性にわめく。この物音に下座より大名四人、七郎助、奥より左五兵衞出で來り

皆々　ヤ殺しを、ふん縛れ〳〵。

荒次　相手は誰れたと思つたら、先刻我れ〳〵と喧嘩をした

黑鼠　原の息子平次景高、馬士になつても以前は大名。

左平　陪臣の侍ひに頭をぶち毀されて、知らぬ顏をしてゐるは

多仲間の達引が無い。これからは我れ〳〵が相手だ。先の野郎を、踏み倒せ〳〵。

ト皆々立ちかゝる。七郎助、左五兵衞中へ入り

七郎　間違ひだ。靜かにさつしやい〳〵。
左五　五平太さま、どうした譯でござりまする。
五平　サア、少々の間違ひで、これ程にならうとは存じなんだ、左五兵衞、御身よろしいやうに扱うてくりやれ。
左五　マア〳〵、疵人を見てからの事に致しませう。
　　ト平次の側へ來り
　まづ第一、疵に風が浸みては惡い。何ぞ紙でも押附けるがよい。
七郎　紙と云つたところが何にもねえが、この男が何ぞ紙を
　　ト平次の懷より以前畑右衞門が落したる起證文を何心なく出し、半分引裂き、宛名の無き方にて、平次の額を拭いて捨てる。
左五　マア、早く醫者を呼びにやるがいゝ。
　　ト暖簾口より多七、東林を連れて出で來り
多七　丁度お醫者樣が來てござります。
左五　モシ〳〵、お醫者樣、早う御覽じて下さりませ。

東林　ハヽア、酒興の上の刃傷と見える。して、疵人はどれにゐるな。
七郎　疵人の頭から血が流れまする。顏が赤いゆゑ一向に解りませぬ。
東林　ハヽア、疵人はこれか。ドレ〳〵、脈體を伺ひまして
　　ト平次の脈を見て
　コレ〳〵疵人、食はどうでござる。通じの鹽梅はようござるか。この病人は何を申しても默つてゐるが、舌を出して見せさつしやい。
　　ト平次パツクリ口を開き、舌を出す。東林惝りしてハテ、怖い面だ。これは昔流行いたした、擂粉木闇魔といふ病氣でござる。
皆々　何を云はつしやる。
　　ト五平太、左五兵衞をソツと招き
五平　コレ、左五兵衞、爰に金子が十兩ござるが、この金子で疵の扱ひ。身共はあの馬が所望でござるが、これで求めてはくりやるまいか。
左五　あの馬を何になされます。
五平　さればサ、仔細あつてあの馬から起つた顚末。是非とも此方へ。

左五　マア、何にしろ掛合つて見ませう。

ト十兩の金を受取り、平次の側へ來て

オイ、馬士どの。疵養生代、これで濟ます氣は無いか。

ト右の十兩の内、二兩取つて摑ませる。平次ニツコリして

平次　こりやア小判だね。

ト思はず大きな聲をして、また疵の痛い思ひ入れにて

外の人なら料簡はならないが、お前の挨拶だから、ようございます、不請しませう。

左五　早速得心して忝い。時に爰が相談、馬はお侍ひ樣にやるのだぜえ。

平次　とんだ事を云ひなせえ。あの馬をやつて堪るものか。ありやア二兩二分で買つた馬だ。

左五　これサ、その馬の代も、爰におれが

ト殘りの八兩をいちらせ

爰に持つてゐるから、跡でどうでもしてやるわサ。

ト平次に呑み込ませる。平次思ひ入れあつて

平次　そんならようございます。よろしうお賴み申しまする。

左五　それでサツパリ物事が納まるといふものだ。

ト馬を五平太の側へ曳いて行き

サア、お望みの通り、お前さんへお渡し申します。

五平　これは大きに世話でござつた。

左五　どなたもマア、やう〳〵扱ひが濟みました。

皆々　それは大きに御苦勞でございました。

七郎　時にこれから二階へ行つて、ワツサリと仲直り。

大名　我れ〳〵も係り合ひ。

荒次　男は當つて碎けろ。早く濟んでめでたい。一體、馬士が侍ひに切られるとは、此やうなめでたい事はない。

多七　そりやアなぜでございます。

荒次　馬士どのめでたう侍ひに切られる（誠にめでたうさむらひける）といふ事がございます。

皆々　何を云はつしやる。

七郎　これから惣一座で大洒落にしやせう。

左五　あのお侍ひ様の名代には、わしが參ります……お前様、早く馬を曳いてお出でなされませ。
五平　ぢやと申して、身共が自身にこの馬を
平次　わしに疵を附けたその代りぢや。わしは構はぬ。獨りで曳いて行かつしやい。
五平　アヽ、仕方がない。上下なりで小荷駄馬、これも浮世の廻り合せ。
ト馬の口を取り、花道へかゝる。
皆々　我れ〳〵は。これより奥へ。
七郎　疵人相手に仲直り。
平次　馴染みの色の顔でも見ようか。
五平　その樂しみに引かへて、槍一本の主たる身が、今は昔の刀さし、鎌倉諸侯の列座の中、引くに引かれぬ。
皆々　なんと。
五平　大井川がなアえ。
ト馬士唄を唄ひながら、馬を曳いて向うへ入る。舞臺の人數殘らず暖簾口へ入る。引違へて奥より權兵衛出る。下の酒屋の内より、はね吉出る。權兵衛と顔見合せ

はね　權さん、ちよいと來ておくれよ〳〵。
權兵　これサ〳〵、其やうに引ッ張つて、何の話しだ。
はね　サア、お前に先刻ちよつと話した借金の事だわね。
權兵　どういふ趣向にするつもりだ。
はね　サア、その事をあの左五兵衛さんに……斯ういふ筋の狂言サ。
ト囁く。
權兵　そいつは奇妙々々。然らば萬事ぬかるな。
はね　それサ、どうぞ惚れたといふ證據を見せて
權兵　あの大家めを浮れさせ、おぬしが身拔けをさせるやう。
兩人　何ぞ證據はねえかしらん。
ト思ひ入れ。この時暖簾口より花咲、飯もり女郎の形にて出かゝり、捨てゝありし血の附いたる起證文を拾ひ、よく〳〵見て
花咲　モシ、お二人さん、その魂膽があるねく。
ト前へ出る。兩人惚りして

はね　ヤア、お前は花咲さん

權兵　そんなら今の話しを

花咲　アイ、殘らず聞いたよ。

はね　南無三、身の上の大事とこそはなりにけり、

ト聲色いやうに云ふ。

花咲　何を云はんす。併し、わたしとても朋輩同士、ちつとも氣遣ひ

はね　中橋の、槇木屋樂と利き目のよい。して、お前の魂膽は。

花咲　サア、お前とも仲のよいわたし。左五兵衛さんを、この書き物ではどうぢやえ。

ト書き物を出す。權兵衛見て

權兵　そりやア先刻血を拭うた反古ではないか。して、その趣向は。

花咲　この書き物を左五兵衛へ、この子の起證と僞り、役に立てゝはどうぢやえ。

權兵　イカサマ、無筆のおれには讀めねども、見える人が讀んだら

花咲　男女に限らぬ起證の文言。

權兵　そんなら、この書き物を起證と云つて、あの家主に見せ、私しは兄でござると云ふから、その時

てめえ巧くやるかよ。

はね　よしサ、百も承知。芝居の女形氣どりで、わたしやお前に斯うぢやわいなと、あの左五さんをの

ろくさせ。

權兵　借りを濟ませば身拔けして

花咲　一日二日家主の、女房になつたその上に

はね　思ひ入れふざけ追ひ出され、それからお前の女房だ。

花咲　この子もお前ゆゑには苦勞する。お羨ましいね。

はね　今時の男にやア、氣前を見せねば承知しないよ。

花咲　わッちらもしがねえ中で、客人と親には、時々當て身をくふのサ。

はね　當て身と云へば、わッちが親仁は、變る事はねえかえ。

權兵　隨分達者だが、何か工面が惡いさうサ。何ぞ貸してやるがよい。

はね　久しいものよ。わッちもこの頃はめんくも惡いが、この簪は一分一本通用。そんならこれを貸

してやつておくれ。

ト出す。權兵衛取つて

權兵　これでも親仁も喜ぶであらう。併し、落さぬやうに、何ぞへ巻いて

ト何心なく落ちてありし最前の起證の名宛の方に、件の簪を包み、懐中する。

はね　そんなら權さん、今の話しが首尾よく行くまで

花咲　わたしが部屋で

權兵　何かの譯を

はね　寢てしつぽりと

花咲　御遠慮なしに

はね　たんとしやせう。

權兵　それではどうか

はね　なにサ、話しを

ト寄り添ひ、花咲と顔見合せ

堪忍おしよ。

ト花咲あちら向く。

權兵　通り者め。

ト花咲へ思ひ入れあつて、はね吉を抱く。

花咲　呆れるよ。

ト唄になり、三人よろしくあつて、この道具廻る。

本舞臺、正面安紙にて貼りたる襖、下の方階子の上がり口、木にて拵へたる燭臺を灯し、酒肴を取散らし、爰に大名四人、以前の形にて大あぐらをかき、東林は平次の頭へ膏藥を貼りゐる。七郎助は左五兵衛その外へ、仲人の思ひ入れにて、捨ぜりふ云つてゐる。すべて小塚ッ原四六屋體二階のかかり。『わたしや何でも』の唄、寺鐘にて道具とまる。

ト皆々よろしく、七郎助、八寸の上に杯を二つ戴せ持ちながら出で

七郎　さて〳〵、どなたも御不請でござりやせうが、疵人も早速承知してくれたゆゑ、ちよつと御挨拶を申しやす。この上ながら、お心安うして下さりやし。

左五　私しも不慮の爭ひにて、既にお代官沙汰にもなりますところを、お取扱ひにて事故なく相濟み、有り難うござります。

東林　イヤモウ、兎角世間に事なかれ。愚老も好い所へ參り合せ、療治を致しましたが、この分では、

病人もよろしうござらう。

平次　あんまりよくもねえのサ。初春早々頭をぶち毀されて、毎年曾我の役割りに、梶原の名が廢ります。

荒次　大名と違つて、百姓の梶原ゆゑ、此やうな間違ひは有うちだ。

黒彌　併し喧嘩に花が咲くとは、延喜もよし

有景　いはゞめでたい初春だ。

東林　祝つて一つゞめてくれ。

皆々　よい〳〵〳〵。

ト手を打つ。

左五　時に皆さんにお世話になり、此まゝでも濟みますまい。

平次　先刻仕舞はせて置いた、ふんばりどもはどうした。

七郎　若イ衆、子供を早く、出さつし〳〵。

多七　ハイ〳〵、畏りました……サア、どなたもお出でなされませ。

ト合ひ方になり、奥より多七、見世茣盆を四つ持ち出で、跡より、とやしげ、花浦、此山、花咲、初

會女郎、ツンとしたる思ひ入れにて出で來り、よろしく居並ぶ。多七、茣盆を並べ、杯と銚子を持ち、平次の前へ置く。平次取つてとやしげへ献す。荒次郎は花浦、黒彌吾は此山、成景は花咲へ献すその度々、多七杯を持ち廻る。女形四人、杯をカツチリ云はせ、客の方をちよつと見てツンとする事など各々心にあるべし。皆々よろしくあつて

七郎　サア〳〵、これから大騒ぎだ。早く藝者を呼びにやれ。

荒次　この男は藝者が好きと見えるな。

此山　そりやアその筈サ。あの七郎助さんは

花浦　十六夜お京さんといふ藝者衆と

花咲　何やら譯があると、きつい評判。

平次　七さん、おうら山吹茶漬飯。

ト「わたしや何でも」の唄になり、奥よりはれ吉、お京、めい〳〵三味線の長箱を持ち出で來り

はね　わたしが參る座敷は、右か、左か、奥座敷でござりやす。ソコ〳〵テン〳〵。

ト口三味線にてよき所へ坐り

二人　これはどなたも、よう入らつしやりました。

はね　さて私しははね吉と申しまして、ずんと不調法者、御贔屓のほど偏へにお願ひ申しますと、役者が舞臺に口上の通り、隅から隅までといふ洒落は、どうでござりませう。

皆々　イヨ、口上有り難い。

荒次　成る程、はね吉とは、よく附けたわえ。

左五　はね公、いつもながら御盛んだね。

はね　オヤ、さかんとは、鏝で塗る人ぢやァねえかよ。

東林　此奴、悪く洒落るな。

七郎　お京さん、お前一つ献しては

お京　左様ならちよつとお手許を

花咲　オヤ〳〵、ぬし達はお睦まじいね。

とや　そりやその筈、骨がなくば一つになるべいと

女皆　イヨ〳〵、七さまの色男さま〳〵。

七郎　これサ、そんなに煽てねえものだ。

左五　ぬし達はお樂しみだね。それに引替へ、この左五兵衛の半老、一人ころり寢とは、南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛。

はね　オヤ〳〵、左五さん、何かふさぎの蟲や赤蛙だね。

左五　おれも女房が死んで、今日は灰寄せの歸りがけよ。

はね　さうかえ　そりやァ嬉しの森や花川戸だね。

左五　ひどい所で洒落るな。なぜおれの女房が死ねば、てめえは嬉しい。

はね　おかみさんが無けりやァ、わつちやァお前の所へ行くからよ。

左五　よく嘘をつく。おぬしにやァ綱五郎といふ、色男があるではないか。

はね　その綱五郎さんは、疾からよしの木さいかち猿すべりよ。

花咲　これは地口で目を突きさうな。はね吉さん、ちつと眞面目に〳〵。

はね　オツト承知々々。憚りながらお前さんへ差上げませう。

ト東林へ杯を出す。

東林　これはちよつとお手許を

ねど　どうやら主は、貲屋町の芝居にゐる、門藏に似ておいでだね。

左五　其やうな事云ふからは、てめえは芝居が好きと見えるな。

東林　貴公は誰れが贔屓だ。
はね　わつちやァ濱村屋が大贔屓サ。去年石段のとき、濱村屋と門之助、脇差を持つてカタ〳〵と、斯うやつた所はようござりました。
　　トよろしく振りする。
皆々　濱村屋、瀧野屋。
七郎　よく覺えて來たな。そんなら色と度々芝居へ行つたな。
はね　贔屓の役者が居れば、度々芝居へ參ります。顔見世も葺屋町へ行つて
左五　ぐつと手を廣げたか。
はね　芝居へ行きやァ錢金を湯水のやうに
左五　いくらほど遣ひやした。
はね　二朱と六百、なんと氣前者でござえませうが。
皆々　おきやァがれ。
東林　時に先生たち、三筋の手は、どうだな〳〵。
はね　心得丹波の大江山サ。

お京　わたしが彈くから、お前はいつか芝居で覺えた事を、一つおやりな。
はね　そんなら一つ所作事をお目にかけやせうかね。
皆々　そいつは奇妙だ。所望だ〳〵。
　　トはね吉お京、何にてもちよつとあつて納まる。
皆々　やんや〳〵。
　　トこの時奥座敷にて
綱五　否だ〳〵。料簡しねえぞ。
　　ト云ひながら、骨の入りたる壺を持ち、雲哲を引立て、跡に多七、これを止めながら出で來り
雲多　御料簡なされませう。
綱五　料簡しねえぞ。この坊主めが。どうするか見やァがれ。
雲哲　堪忍さつしやい〳〵。
花咲　綱さん、おとなしくもねえ。坊主を捕まへて、どういふ間違ひだ。
綱五　マア、聞いて下さい。この坊主が廻しをくつて、むかッ腹を立つて、投打ちに事をかいて、初春早々から骨壺をおれに打ちつけられちやァ、延喜が悪い。料簡しないぞ。

雲哲　おきやァがれ。おれも小塚の初買ひに、廻しをくつちやァ延喜が悪い。ふんばりを、出しやァがれ〳〵。

多七　モシ〳〵、とやしけさん、お前さんも、どうしたものでございます。お初會が濟んだらお客人の方へ、お廻りなさるがようござります。

とや　サア、そりやァ尤もだが、坊さんも日暮れ前から來て、隨分度數を取つたぢやァねえか。

平次　イヤア、そんならてめえは廻しか。この瘡ッかきめ。よく嘘をつくぜ。あの坊主めを廻しに取つた、こゝな廻し坊主め。

東林　ハヽア、廻し坊主とは、賣僧坊主といふ地口だな。奇妙々々。

綱五　洒落どころぢやァねえぜ。この坊主め。おれに骨を打ッつけやァがつた。

ト件の骨壺を雲哲に打ちつける。左五兵衛見て

左五　コレ〳〵、その骨壺は、おれが女房の骨だ。なぜそんなに、ぞんざいにするのだ。その上見ればそこらあたりの藝者にくらひ込み、毎日々々小塚通ひ、腹が立つぞ〳〵。コレ綱五郎、おぬしもちつと内に居るがよい。

綱五　なにサ、店賃さへ拂つてゐれば、大家にあやまる譯はねえのサ。

左五　イヤ〳〵、そればかりぢやない、第一大家を安くする。なぜおれが女房の骨を投げた。

はね　骨を投げたも今道心、とはどうだえ。

左五　洒落どころぢやァない。また和尚もその通り、灰寄せの歸りに女郎を買ふとは、不埒千萬だ。

雲哲　やかましいわえ。坊主が女郎を買はうが、大家の世話にならうが、生きてゐる内ばかりは、大家だといつて長屋で力むが、死ねば旦那寺の厄介になるヲ。馬鹿な大家だ。

左五　ナニこの、ヨイ〳〵め。

ト立ちかゝる。多七中へ入り

左五　ナニこの馬鹿とは何事だ。

多七　マア〳〵、御料簡なされませ。モシ、わつさりと、酒にしてはどうでございます。

雲哲　イカサマ、坊主は當つて碎けろと云へば、大家さんも綱五郎どのも、料簡さつしやい。時に大家さん、一つ上げませう。

ト酒を飲み、大平の中を見て

この大平は精進だな。なぜ鯛の潮でも出さないか。小塚にやァ鯛はねえか。

綱五　コレ〳〵、若い衆、佛の頼みだ。早く云ひつけてやらつしやい。
多七　ハイ〳〵、只今申しつけまする。マア、一つお上がりなされませ。
　　トまた酒を飲ませる。此うち東林、件の壺より骨を出し、大平の中へ入れて
東林　サア〳〵、和尚さん、鯛の潮が來ました。
雲哲　そいつは奇妙〻々。
七郎　成る程、この和尚も洒落者だわえ。洒落者といへば、爰らあたりの藝者めは、おれを先刻から待
　　たせておいて、どこへやら穴ッ入り。大方藝者の方から、客をころばしたがる助兵衛藝者か。
お京　モシ、七さん、おつな事を云ひなさるが、助兵衛とはわたしが事かえ。
七郎　マアそんなものサ。
皆々　ソリヤ痴話喧嘩の、始まり〳〵。
綱五　イヤモウ、この藝者も襟について、てんてれつくのおれを突出し、そこらあたりの禿頭といちや
　　つき、始終は大家の女房になる心か。腹が立つわえ〳〵。
はね　オヤ綱さん、をかしな事をお云ひだが、わつちも藝者の身の上、この左五さんが深切にしてくれ
　るゆゑ。

左五　ちつと話し合つた事もあるが、おぬしは岡燒き餅ぢやア、云ひ分があるのか。
綱五　云ひ分がなくつてサ。この藝者にいちやつく奴があれば、大家でも何でも、一番云はにやアなら
　ねえ。
左五　この女に家主が惚れても、店子の世話になるか。べら坊面め。
綱六　べら坊とは誰れが事だ。
左五　うぬが事よ。
綱五　ナニこの禿頭が、
左五　イヤこの野郎が。
　　ト兩人立ちかゝる。この時薄ドロ、寢鳥のやうな通り神樂になり、雲哲スックと立ちあがり、女の振
　りになり、左五兵衛を捕へ
雲哲　申し〳〵こちの人、わたしといふ女房がありながら、なんでお前は、あのはね吉さんに惚れさん
　した。エヽ、こなたはなう〳〵。
　　ト女の思ひ入れ。
東林　イヤア、この坊樣は、女のやうになつたぞよ。

皆々　イヤア。

東林　ハヽア聞えた。あの壺の中の骨を、潮にして食はせたゆゑ。

左五　イヤア、ありやアわしが女房の骨、それをあの坊様が食つたゆゑ、死んだ女房が乗り移つたか。

皆々　イヤア。

左五　コレ〳〵、おぬしは死んだ女房の幽霊か。

雲哲　アイ、あたしやおかみさんの幽霊。聞えぬぞや左五兵衛どの、わたしが死んで間もないに、あのはね吉さんに惚れるとは、エヽ、こなさんはなア。

ト よろしく思ひ入れ。

左五　アヽ、コレ〳〵、それはついした出来心、堪忍してくれ。南無阿彌陀佛々々〳〵々々々。

ト 珠數にて打つ。雲哲グンニヤリして倒れる。

綱五　あれ見なせえ。幽霊でさへ焼き餅を……おれが前であの大家と譯のあるのを、どうして見てゐられるものか。

はね　たとへどのやうな事云はれても、襟許に附くが當世ぢやわいなア。

ト 左五兵衛に寄りそふ。

綱五　うぬ、そのいけ口を

ト かゝらうとするを花咲とめて

花咲　モシ、綱五郎さん、腹の立つのは尤もぢやが、これには段々譯のある事。一旦左五兵衛さんに身を任せて、其のち金を

綱左　ヤア。

花咲　サア、金ゆゑ身儘にならぬが勤め。何かの話しは。

ト 囁く。

綱五　そんなら金を

花咲　モシ、何であらうと、細工は流々。

七郎　お前方の話し合ひは、解つたか知らねえが、此方は腹が立つわいく。

お京　お前が腹が立つなら、わたしも腹が立つわいなア。

ト 有合ふ物を打ちつける。

七郎　こいつ投打ちをするな。うぬ、ふんばりめ。

ト 立ちかゝるを皆々とめる。

皆々　ハテマア、静かにさつしやいく。

七京　イヤ、料簡がならぬく。

ト皆々ワヤく云ふ。七郎助とお京をなだめながら、この人數奥へ入る。はね吉、左五兵衛思ひ入れあつて

はね　サアく、邪魔は拂つた。これからは左五兵衛さん、お前とわたしがしつぽりと、ちんく鴨の鍋焼きで、一つ飲み直しは如何ぢやえ。

ト左五兵衛を引寄せる。

左五　どうもおれは合點がゆかぬ。俄におれに靡く樣子。こいつは夢ではないかしらん。

はね　サア、わつちが俄に此やうな事云へば、浮氣な仇者と思ひなさんせうが、今まではおかみさんがあつたゆゑ、死になさつたら、どうぞわつちをお前の女房に。

左五　オット、その手は桑名の、焼き蛤く。おぬしの色仕掛けは、大の嘘々。

はね　エヽ、なんでわたしが

左五　ハテ知れた事、内證に借金のあるおぬしが身の上。その金が出來ぬゆゑ色を仕掛け、おれに金を出させるつもりか。

はね　何だな、疑ひ深い。それにはキツとした證據があるわいな。

左五　して、その證據は

ト權兵衛出かゝりぬて

權兵　アイ、その證據は、私しが持つて居ります。

ト左五兵衛見て

左五　こなたは兄の粟島權兵衛。して、その證據は

權兵　外でもござりませぬ。これを見て下さりませ。

ト最前の起證を出す。

左五　ヤ、こりや生血の附いた起證ぢやな。

はね　サ、それが嘘をつかぬといふ、わたしの證據。

左五　成る程、起證に違ひないが、肝腎の名宛もなく、半分引裂けてあるは、どうした事だ。

ト兩人悔りして

はね　サア、その破れてあるは、どうした事であつたなア兄さん。

權兵　サア、その破れてあるは何やらで……オヽ、それく、妹はまだ勤めの身の上。此やうな事をし

て、親方に見られてはならぬと、わしが意見をしましたら、名宛さへ無くば大事あるまいと、刃物で切らぬが色文の魂膽。それゆゑ引裂いてございます。

はね　わたしが血汐はお前へ心中。その起證では、アイタヽヽヽ。

ト急に指の痛むこなし。

權兵　儎りならぬ妹の心底、お疑ひは晴れましたか。

左五　當人といひ兄御まで、其やうに云はるゝ事なれば、疑ひは晴れました。

はね　それでわたしも、どうやら心が

權兵　又もや御意の變らぬうち、お疑ひの晴れた上は、親方樣へ借金を濟ませ、妹が身拔けして下さりませ。その時は私しも、共々お取持ちを致し、お前の女房に上げませう。なんと得心しては下さるまいか。

左五　解りました。當人も承知、兄貴も承知とあるからは、町内組合のところは何ぞと云うて、女房にもらひませう。して、借金は、いくら程ござる。

權兵　ハイ、十五兩ほどでございます。當金半分償へば、妹はわしが連れて歸り、跡金をお前からお貰ひ申せば、直ぐにその晩が婚禮サ。

左五　解りました。當人も承知、兄貴も承知なら、その半金を貸してやりませう。

はね　そんならお前がその金を

左五　解りました。當人も承知、兄貴も承知なら、女はこなたに預けますぞや。

權兵　イヤモウ、金さへ出して下さる上は、外々よりこの女に、指でも附けさせる事ではございませぬ。

ト此の時綱五郎、後に出かゝりゐて

綱五　イヤ、その女には足があるよ。

ト合ひ方になり、前へ出る。三人見て

三人　ヤア。お前は。

左五　綱五郎、おぬしがこの女と、譯のある事は知つてはゐれど、立て金すればおれが女房。それを兎や角云ふからは、そんならおぬしは

綱五　なにサ、心の腐つたこの女、何の念が殘りませう。併しながら、女に突き出されたと云はれては世間へ外聞が惡い。この上は左五兵衞さま、わしが顏の立つやうにしてくんなせえ。

左五　サア、その仕樣と云つたところが

ト迷惑なる思ひ入れ。權兵衞思ひ入れあつて

權兵　モシ〳〵、左五兵衞さま、お氣遣ひなされまするな。この兄が附いてゐますから、たとへこの女に足があればとて、私しが自由にはさせませぬ。まして風來者の綱五郎、憚りながら、この兄がなりませぬ。

綱五　さう云へば此方も自棄無茶。この女はおれが貰つた。サア、來やアがれ。

ト手を取る。三人顏見合はせ、目くばせする。はね吉のみ込み、その手を拂ひ

はね　なんだな、綱五郎さん、イケ聞いた風だ。わつちやアお前が否になつたから、寢返りだよ。必ず物を云つておくれでねえよ。今までとは違つて、兄さんの意見について、襟許の世の中となら、今日からわつちやア左五兵衞さんのおかみさんだよ。主のある女に、構つてもらひますまいよ。なんだな、一緒に來いの何のと、いかに正月だと云つて、呆れが禮に來るわな。

綱五　おきやアがれ。さう吐かせば面あてに、うぬを殺して此方も死ぬわい。

ト立ちかゝる。左五兵衞考へて、包み金を綱五郎に投げ

左五　手切れの金、取つて置きやれ。

ト綱五郎金を見て

綱五　ヤア、こいつは小判で八兩。

左五　不足であらうがこの金を

はね　納まつた上は、それがおしやぎり。

左五　目腐れ金を、古風も云はずに

綱五　お時節柄ぢや、取つて置きやせう。

權兵　それはおてちん、合點か〳〵。

綱五　知れた事だ。

はね　やう〳〵わたしも一つは安堵。

左五　安堵次手に親方と

權兵　金の押切り何やかや

綱五　片附けてから、おれもこれから

はね　夜の更けぬうち、こちの人。

ト左五兵衞へ思ひ入れ。

綱五　とはいへ女は

ト思ひ入れ。

權兵　コレ、何も辛抱して

左五　やがてめでたう

はね　それまでわたしの

綱五　兄貴が慥かに

權兵　預かる上は

左五　そんなら必ず

はね　其うち綱さん

ト綱五郎へ思ひ入れ。

權兵　アヽコレ。

ト中を隔てる。

左五　俠に金なし、喧嘩を以て渡世とする。浮世の勇みは、あゝしたものぢや。

三人　エヽ。

左五　馬鹿ではないわい。

ト唄になり、左五兵衞、骨の入りたる壺を持つて、はね吉に心を殘し、階子の口へ入る。三人殘ると、

奥より花咲出で來り

花咲　モシ、皆さん、先刻拾つた起請の魂膽。細工は流々、仕上げはどうだえ。

綱五　古いやつだが亭主の權兵衞、兄貴の仕打はきついものだ。

はね　わたしが間夫は綱五郎さんと、見せてたうとう手切れの金。

權兵　お主を貢ぐ綱五郎、朋輩同士が云ひ合せ。

花咲　まんまと首尾よく、この子の年季を

綱五　拔かせるやうに此方の惡法。

はね　一杯くつた男の自惚れ。

權兵　鼻毛よまれた色の世の中。

花咲　音に聞えた

綱五　はね吉よりも

はね　左五兵衞さんは

權兵　大きなはねもの。

四人　ハヽヽヽヽ。

花咲　アコレ。

ト思ひ入れ。唄になり、皆々よろしく奥へ入る。「元より薬」と云ふ唄になり、槌右衛門先に東林、三次。お京をなだめながら出て來り

三人　ハテ、どうともなる事だ。靜かにするがよい〳〵。

お京　イエ〳〵、わたしや腹が立つて〳〵ならぬわいなァ。

東林　ハテ、思ふ仲の戀いさかひは間々ある事。また醫療の致しやうもござらう。

三次　左やう〳〵、物には間違ひといふ事もあるもの、靜かにしなさい〳〵。

槌右　コレ〳〵、お京坊、その腹の立つを、横にする法がある。なんと、おれが料簡に附かねえか。

お京　して、その仕樣は。

槌右　サア、何にしろ文を一本書いて、七郎助が所へやるがいゝ。

お京　それは心安い事。それで七さんの心が直りますかえ。

三人　直るとも〳〵。

お京　して、その文は、どう書いたらようございませう。

槌右　待て〳〵。その文言は、東林さん、話した通り、お前よろしく。

東林　承知々々〳〵、幸ひ爰に懷中矢立。サア〳〵それにて認め給へ。

ト懷中より矢立を出す。お京鼻紙を出し、

お京　その文言は、よいやうに云うて下さんせえ。

東林　「一筆しめし〻〻、最前は心にもなきこと申し上げ候ふ、御前樣心を引き見るため、誠にそれほど思し召し下さるは、我が身に取り御嬉しく存じ〻〻、それにつき、奥の小座敷に御待ち候ふまゝ、首尾を見合し、御出でのほど待入り〻〻、その節目じるしには屏風に私しの帶を掛け置き候ふ。御出での節合圖には内より灯を消し候ふまゝ、くれ〴〵も御出でのほど御待上げ〻〻めでたくゐし」。名宛は七郎助さまも野暮だ、御許さまへ、京よりとするがよい。

ト お京、仰せ書のやうに認め、上書の京の字、思はず糸といふ字になる。お京見て

お京　オヤ〳〵、わたしが名の京といふ字、どうやらこれでは糸といふ字に

槌右　大事ない〳〵。少しも早くこの文を、小ぢよくに持たせ、向うへやるが此方の目算。

お京　エ。

三次　この文で、もし七郎助が來たならば

お京　あの小座敷で何かの事を

槌右　山々話して仲直り。
東林　物事丸く納まる祝ひに
槌右　一杯飲み直しはどうだ。
お京　成る程、それがようござんせう。
東林　そんならいづれも。
四人　サア、參りませう。
ト流行り唄になり、四人こなしあつて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、正面二間の屋體、前側あかり障子、東西落間、冬木の植込み。下の方つくばい。いつもの所に枝折り戸。しつぽりした合ひ方にて道具とまる。
トこの合ひ方にて向うより綱五郎。文を見ながら出で來り
綱五　いま小じよくが持つて來たこの文、何だか解らねえが
ト下のつくばいの側に來り、文を開き
「一筆しめし〻、最前は心にもなきことを申し上げ候ふ、御前樣の心を引き見るため、誠にそれほど思し召し下さるは、我が身に取り御嬉しく存じ〻、それにつき奥の小座敷に御待ち候ふまゝ、首尾を見合し、御出でのほど待入り〻、その節目じるしには、屏風に私しの帶を掛け置き候ふ、御出での節合圖には内より灯を消し候ふまゝ、くれ〴〵も御出でのほど御待上げ〻、めでたくかし。御許さまへ、糸より」……イヤア、この文の樣子では、あの小絲が心附き居つたわえ。併し、こいつはおれをちよつくり返すのか、但しほんの事か、こいつはどうやら。
ト障子をソツと明け、内の樣子を見て
ヤア、この文にある通り、目じるしは小絲が帶。こいつはまんざらでもないわえ。
ト内より行燈の灯を消す。綱五郎見て
イヤア、註文通り内から灯を。いよ〳〵めたぞ。
トそろ〳〵這ひあがり、屏風の内へ入る。屏風の内、バタ〳〵と音して
槌右　泥坊々々。
ト屏風を刎れのける。内に小絲、絹夜具を着たるまゝ、悄りして起上がる。綱五郎逃げやうとするを
槌右衛門、綱五郎の帶を捕へ
皆來てくれ〳〵。

トこの聲に七郎助、東林、三次、六三、出で來り、皆々捨ぜりふにて、綱五郎を無暗に取つて押へ

六三　泥坊をつかめえた。灯を〳〵。

トこの音にてお京、おつや、奥より行燈を持ち出で來り

つや　大方枕探しでござんせう。

ト小絲懍へてゐる。

六三　何にしろ泥坊の面を見て

ト綱五郎と顔見合せ

ヤア、こなたは兄貴か。

綱五　面目ない〳〵。

小絲　お前は先刻の

皆々　大泥坊め、引摺り出せ〳〵。

ト口々に云ふ。

六三　コレ兄貴、どういふ事でこの體裁。何ぞ譯があらう。その譯を早く云ひなせえ。

綱五　サア、その譯は……どうもおれにも解らねえ。

六三　これサ、そんな詰まらねえ事を云つちやァいけねえ。どうした譯だよ。

七郎　いよ〳〵胡亂な綱五郎。

槌右　こりやァ六三も同類だな。

六三　コレ兄貴、譯もねえ事に泥坊呼はり、この六三まで同類と、云はれるが口惜しい。差當つて云ひ譯もない事か。默つてゐちやァ解らねえ。譯を云ひなせえ〳〵。

綱五　エヽコレ、見す〳〵拵へ事と思ふゆゑ、譯を話せば却つて恥の上塗り。云はにやァおぬしまでも同類との、退引きならぬこの場の仕儀。譯と云ふなァ外でもねえ。この文を見やれ。

ト以前の文を出す。六三、口の内にて讀み

六三　「御許さまへ、糸より」……こりやァ爰へ忍んで來いといふ、小嫌らしいこの附け文。

綱五　先刻おぬしが意見、舌の乾かぬ内にこの始末と、積られるも恥かしいが、迷つた上の煩惱は、犬に劣つた綱五郎、思案も絲瓜も眞暗に、忍んで來たらこの體裁。おぬしが手前も面目ねえのサ。

六三　そんなら、この文は小絲どの

小絲　イエ〳〵わたしや其やうな

東林　覺えはあるめえ。ナニあるものか。
六三　そんならこの文の出所は。
お京　そりやア慥かわたしが先刻
　　ト寄るを七郎助支へて
七郎　これサ、泥坊の詮議に、おぬし達が出るものぢやアねえ。
お京　それでもどうやら
　　トまた寄るを、三次とめて
三次　これサ。それで樣子が荒まし知れた。
槌右　押しの強い綱五郎、小絲に惚れたと云ひ拔けるは
東林　六三が軍師、兄弟で
七郎　枕探しをひろぐのだ。
　　トきつと云ふ。六三、皆々の顏を見て
六三　アヽ、その口振りで樣子も大概。先刻の顚末、意趣返し。六三を引出し、難儀をかけるうぬ等が目算。

　　ト以前の文を取り
勿怪の幸ひ。わいらに鼻を明かすのは
　　ト思ひ入れあつて
小絲さん、ちよつとお目にかゝりませう。
　　ト變つた合ひ方。
小絲　わたしに何ぞ用かえ。
六三　小絲さん、お前は成る程深切者だ。思ひ思つたこの文、こりやアお前、本當の心か。
小絲　コレ、六三さんとやら、そりやお前何を云はんす。眞實わたしや其やうな
六三　覺えはねえと、隱すのも尤もだが、もう斯うなつちやア隱すより、色でござると云ひ通すが、お前も達引、此方も身拔け。
　　ト聲をひそめ
無理な事だがこの通り、この顚末になつたから、無理にも惚れにやアならねえ始末。先刻の顚末お前の難儀、その返禮だと諦めて、この場を平に兄弟二人、若い男を立つてはくれめえか。
小絲　六三さん、解りました。自惚れた事ながら、成る程、お二人を立てませう。が、お前も知つての

わたしが身の上、この場ぎりならどうなりと。

六三　そりやア承知だ。只管お前と。

小絲　ようござんす。

トつと立つて綱五郎の側へ寄り

モシ、綱五郎さん、ふとしたわたしのいたづらから、送りし文がお前の難儀。堪忍して下さんせえ。

ト綱五郎に寄り添ふ。

皆々　イヤア、どうやら風が、變つて來たわえ。

槌右　コレ小絲、あの文はナニわれがのなものか、嘘を吐くかく。

小絲　イヽエ、これはわたしが文。それともお前方の拵へ事でござんすか。

槌右　イヤ、さうではなけれど。

小絲　わたしが文ゆゑ綱五郎さんに、泥坊の悪名は、ござんすまいわいな。

七郎　そんならわりやア綱五郎に

小絲　アイ、惚れました。

東林　ヤア、そんならどうかこの戀は

三次　おいらが寄つて執持つたやうなものだ。

槌右　これサ、それを現に……コレ小絲、いよく〳〵わりやア

小絲　惚れたに嘘はないわいなア。

ト綱五郎にもたれ思ひ入れ。綱五郎解らぬゆゑ、ウロ〳〵してゐる。

槌右　エヽ、うぬは〳〵。

ト立ちかゝる。六三この中へ入り

六三　オツト待つたり。ほんの色ゆゑ忍んで來たを、うぬらが寄つて泥坊呼はり。アレあの通り小絲は色なり、おれは色氣も内證の、拵へ事はうぬらが手盛り。泥坊なりと吐かした返報。一番六三が相手になつて……と角を出すのも矢ッ張り野暮。この場は粹に身分相應、小塚の女郎で、姫はじめでもするがいゝのサ。

お京　それいなア。味に搦んだこの場の仕儀、惚れねばならぬ小絲さん、流石辰巳の心意氣は、違つたものだね。

つや　達引つよいが小絲さんの持ち前、爰に居るほどお前方

お京　恥の上塗り。七さんも一緒に奥へ。
七郎　エヽ、いま〳〵しい。此奴ら三人。
三次　畢竟おいらは岡焼きもち。
東林　この有様を見ては氣が悪い。カウ、仕方なし、奥でしつぽり。
槌右　詰まらぬ者はおれ一人、先刻の意趣を返さうと、思つた文の拵へ事が
六三　廻り〳〵て此方の仕合せ。手を濡らさずに色の執持ち。
槌右　とは云ふものゝ
六三　野暮に痛い目する心か。
槌右　イヤ、それにやア及ばぬ。
お京　そんなら、どなたも
ト槌右衛門、小絲へ立ちかゝる。おつや、お京これを押へ
兩人　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、この人數思ひ入れあつて奥へ入る。綱五郎六三小絲殘る。合ひ方。
六三　小絲さん、誠にきついもの。有り難い〳〵。

ト綱五郎思ひ入れあつて小絲を突きのけ
綱五　六三、おぬしは有り難いか知らねえが　おらア有り難くも何ともねえ。綱五郎の一分が廢つた。
これからこの女ア叩ッ切つて、おれもくたばる分の事だ。
ト小絲へ立ちかゝるを、六三とめて
六三　コレ兄貴、そりやアお前、何を云ふのだ。それぢやアお前、狂人だぜ。
綱五　オヽ、おらア氣が狂つた。本町の綱五郎は、女にかゝつて氣が狂つたわえ。法に乘せられて、盜人だの、泥坊だのと云はれるのも、みんなこの畜生のお庇。人に苛められて、着物から綿を出し綿毛を下げてゐる、只の色事師だと思やアがるか。もう色も戀も覺め果てた。そこ放せ〳〵。
トわめく。
六三　イヽヤ放されねえ。お前も解らねえもんだ。おれが頼んで小絲さんに、表向きの色になつてもらつたゆゑ、この場の顔は立つてゐるぢやアねえか。
綱五　イヽヤ立たねえ。こりやア何だな、わりやア小絲とくッついて、おれを玉に使つて、小馬鹿廻しにするな。
六三　カウ、いかに兄だといつて、いゝ加減に無理を云はつせえな。解らねえ男だ。

綱五　何が解らねえ。何が無理だ。
六三　無理に違ひねえ。無理だ〳〵〳〵。
綱五　無理を云つたらどうする。
　ト此うち小絲、綱五郎の顏をヂッと見てゐて、いろ〳〵思ひ入れあつて、この中へ入り
小絲　六三さん。マア〳〵待つて下さんせ。
六三　小絲さん、どきねえ〳〵。なんぼ兄でもあんまり强情。
綱五　うぬ、兄に向つて
　ト立ちかゝる。小絲、綱五郎をとめながら抱きつき
小絲　綱五郎さん、お前の腹の立つのは至極尤も。腹が立つなら、わたしをどうなとしなさんせ。お前
　にぶたれたら、さぞ嬉しからうねえ。
　トぴつたり寄りそふ。これにて綱五郎グンニヤリして
綱五　エヽ。
小絲　六三さん、堪忍して下さんせ。わたしや今まで料簡違ひで
　ト云ひさして顏を隱す。六三、綱五郎、顏見合せ

六三　兄貴、こりやアおつな話しになつたぜ。
綱五　持つて生れた癇癪で、一かばちかの愛想づかし。
小絲　その云ひ草から氣前まで、女子を迷はせ、憎いお前。
　トふッつり抓る。
綱五　アヽ、いゝ心持ちだ。
　ト抓られた所を撫る。
六三　合せ鏡か知らねえが、兄弟喧嘩が味に崩れて
小絲　法に乘るとは、男嫌ひを立て通す、その譯知つた六三さん、浮氣者ぢやと下げすんで下さんすな
　え。
六三　そんならお前、本當に
小絲　狐狸のお二人さん、どう辛抱が……察して下さんせ。
　ト顏を隱す。
六三　兄貴、何ぞ奢んな。
綱五　夢ぢやアねえか。

ト奥より鐵、勝、徳藏出て

鐵　頭、い、加減に歸りやせう。

六三　オ、みんな、振られたな。

勝　小塚の女郎は腹に合はねえ。

六三　おきやアがれ……兄貴。わしやアもう歸ります。跡でしつぽり小絲さん、お前またあんまり可愛がつて、命まで取らねえやうにしてくんねえよ。

綱五　そんならおぬしやア、直ぐに歸るか。

六三　アイ……サア、みんな來や。

ト三人を連れて花道へ行きかける。

勝　頭、あれを見ちやア、直ぐに内へは歸れねえ。

六三　うさアねえ。おれも羨ましくなつたわえ。

小絲　カウ、六三さん、お前も先刻ちよつと見た、文の所へ。

六三　ちよいと請けさせやせうか。

ト懐より幕明きの文を出す。

綱五　ア、、かのか。

小絲　綱さん。

ト顔を見る。

綱五　エ、。

ト小絲思ひ入れあつて、綱五郎としつぽりこなし。

小絲　きつとだよ。

ト六三はこの文を取つて廣げるが木の頭。

六三　イヨ成田屋に濱村屋。

ト文を頬かむりにする。キザミにて、よろしく拍子幕の外、六三先に三人、流行り唄にて向うへ入る。

通り神樂にてツナギ、引返す。

幕

第一番目　四建目

小地獄閻王寺の場
箱根賽の河原の場

役名――曾我の禪司坊。藝者、十六夜お京。三浦の奥女中、岬。同小姓、雪の戸。八幡の三郎行氏實は赤澤十内。劍澤彈正左衛門。伊豆次郎祐兼。閻王寺閉坊和尚。鬼王新左衛門。所化、雲哲。同、雲才。雲助、畑右衛門。同、權九。庄屋、李太夫。若い者、多七。大藤内成景實は近江小藤太成家。曾我の十郎祐成。曾我の箱王丸。

本舞臺、三間の間、一面の高足本縁附きの本堂。正面に誂への大閻魔、經机、賽錢箱。左右に蟠、天蓋、その外いろ〳〵佛道具を飾りつけ、上手に接待茶と書きし幟を建て、この前に鑵子を七輪にかけ、茶碗など取ひろげ、前に多七、前幕の若い者にて、半合羽、旅形にて、腰をかけてゐる。半八、看屋にて、飯臺にゆで蛸を入れしを下ろし、休息してゐる。雲助二人、小さき長持を下ろし、茶を飲んでゐる。本堂には閉坊和尚、色衣、後向きに双盤を貼つてゐる。前幕の雲哲、地獄極樂の掛け物を、面竹にてよき所に掛けてゐる。舞臺には李太夫、木綿羽織、庄屋の形にて、上座に飯を食つてゐる。畑右衛門、權九、雲助の拵へにて、日光膳に向ひ、飯を食つてゐる。雲才、梗衣の所化にて、給仕をしてゐる。すべて箱根山地獄閻魔寺、本堂の模樣。正月十六月齋日、施餓鬼の鳴り物にて賑やかに幕明く。

李太夫と雲助は無性に飯を食つてゐる。多七、この體を見て

多七　モシ〳〵、このお寺には、御法事でもござりますかね。お賑やかな事でござりますね。

半八　なにサ、今日はお齋日の御供養サ。それでわしもこの通り、佛餉を持つて來ました。

ト飯臺より佛餉袋を出して見せる。

多七　エヽ、左樣かえ。成る程、田舍は正直なものだ。わつちやァ江戸の者だが、藏前の閻魔堂などは齋日だといつて、こんなに人に飯を振舞つた事を聞いた事がねえ。

ト此うち李太夫等、飯を食つてゐる。

雲才　サア〳〵、お辭儀なしにお替へなされまし。

李太　イヤモウ、よい折に參り合して、存じがけない御馳走になりました。

畑右　お辭儀なしに食べたゆゑ、のる事も反る事も出來ませぬ。

權九　てめえはその筈だ。明日の分まで食ひ込んだものだ。

皆々　ハ、、、、、。

トこの時閉坊、双盤をやめ、雲哲、掛け物を掛けしまひ、兩人舞臺へ下りて來て

閉坊　これは〳〵いづれもには、ようこそお詣りなされました。

李太　イヤ、大きに御馳走になりました。

閉坊　なんと、お氣に入つた物は、替へて參らつしやれ。

雲哲　これサ雲才坊、精出して給仕しないか。

雲才　なにを、さう云はねえでも、素敵に食つたものを、この上替へられては、臺所の仕込みが亂騷きだ。

閉坊　何を白痴め。

トこの時半八、閉坊を見て

半八　ア、、和尚樣は、この間まで箱根のお別當で見かけたが、いつ此方へお引越しなされました。

雲哲　この閻王寺は、當山箱根權現の末寺にて、卽ち當院は近頃まで、別當金剛院に役僧を勤めてござつたを

閉坊　只今では隱居いたして、この寺を預かりしゆゑ、入院ひろめや何やかや取まぜて、いづれもをお

招ぎ申したのでござる。

半八　モシ庄屋樣、お前、長持を擔がせて、どこへござりましたのだ。

李太　私しが今日參りましたは、先日權現樣の御神領へ、お觸れがござりました刀の儀につき、私しの支配下の村方へは、殘らず觸れましたれば、百姓の事ゆゑ、刀脇差を所持いたしてゐる者は、早速相知れまして、皆々取集めて、卽ちあの通り長持へ入れ、持ち參りましたが、當院へお取寄せなさるは、どういふ譯でござりますな。

閉坊　愚僧もその譯は、しかと存ぜぬが、この度大江廣元さまより、この近鄕にあるところの、百姓町人の腰の物を集め、檢分の上にて、鍛えのよき刃物を、お上へお買ひあげになるとの事でござる。

畑右　それもお買ひあげならいゝが、百姓町人の要らぬ道具と、取上げられた日にやア、これが取上げ婆アで詰まらぬものだ。

權九　そりやア氣遣ひない。梶原さまのお觸れなら知らねえ事、廣元さまの仰しやる事、なに間違ひがあるものか。

多七　モシ〳〵、先刻から聞いて居りましたが、何か脇差が大金になると、申す事でござりまする。私しも一本差して居りますが、これは金にはなりますまいかな。

ト自分の脇差を出して見せる。杢太夫取つて

杢太　イヤ、これは取り所のないガタ〳〵丸、斯樣な品は、役に立ちさうにもござらぬ。

ト多七へ戻す。

多七　でも、町人百姓の脇差を、お買ひあげなさると申す事ゆゑ。

閉坊　ィヤ、それは斯うでござる。町人百姓どもの古き家には、先祖より持ち傳へ、思ひがけない銘作があるものゆゑ、それで殘らずお取寄せなされ、お吟味の上、不用の品はお戻しなさるとの事。

多七　アヽ、さうかえ。わしやァ又、どんな物でも金になるかと思ひました。

雲哲　ハテ、慾張つた男だ。そんな脇差が御用なら、柳原か日蔭町へお觸れが出るヲ。ハヽヽヽヽ。

杢太　刀のお觸れと申せば、箱根權現樣へ納めあるところの友切丸の一腰、紛失いたしたと申す事でござるが、左樣かな。

閉坊　左樣でござる。たゞ氣の毒なは稚兒の箱王丸、紛失のその夜に下山いたしたれば、その盜賊は箱王丸と疑ひかゝり、養父祐信どのゝ難儀も、弟の事にも構ひなく、兄の祐成は、大磯通ひとの噂でござる。

多七　成る程、その祐成さまは、おいらが本店、大磯の舞鶴屋に、居續けでございます。

雲才　ムウ、さういふ貴樣は、どこだ。

多七　わしやァ江戸の小塚ッ原といふ、奥州海道の宿場で、舞鶴屋といふ女郎屋の若い者サ。

雲哲　さう云へば、どうか見知り越しのやうにもあり

多七　成る程、お前はちよく〳〵、見世へござつたやうなお方。

雪哲　その筈だ。愚僧はこの頃まで、淺草邊に住居して、居ながら拜む觀音ではなくて、尻くらひ觀音で、三日あとから爰へ來たのに、貴樣は又、何を爰らへまごつくのだ。

多七　モシ、お聞きなさい。わしらが見世の十六夜お京といふ女郎。蟲が附いたゆゑ住替へに、大磯の本店へ出したところが、何がその住替へ先から、ガラリ駈落ち。その蟲も、たしかこの近所と足が附いて、それでその女を尋ねに出たのサ。

雲哲　そりやァ大變だ。成る程、その女も知つてゐる。まんざら見ず知らずのこなたでもねえから、その女がこの近所へ來たなら、知らせてやりませう。

多七　それは有り難う。何分お願ひ申します。

杢太　ハテ、いま時の御出家は、嫁入りの世話ばかりでない、おつな口入れもなされますな。ハヽヽヽ

ト笑ふ。この時牛八前へ出て

半八　ヘイ、御免なされませ。先程から、何かいろ〳〵お話しがござりましたゆゑ、扣へて居りましたが、私しは山中の肴屋でござります。佛餉袋を入れて參りました。よろしく御回向をお頼み申しまする。

ト出す。閉坊取つて

閉坊　ヤレ〳〵、お奇特な儀でござりまする。早速回向いたしませう。

雲才　ナニその袋を貰つたとて、奇特な事があるものか。佛餉袋より、その蛸を一ぱい奉納さつしやれば、廣大無邊の功德になります。

半八　そりやアなぜでござります。

雲才　一生に一度、其やうな蛸を、丸で一ぱい食つたなら、この世に思ひ殘す事なく、極樂往生疑ひなし。

閉坊　ヤイ〳〵、こゝな馬鹿坊主め。とんだ事を吐かし居る。

雲才　それでも、いつもお前ばかり食つて、おいらには見せてばかり置いて

閉坊　まだ吐かすか。

ト叱る。雲才しよげる。

多七　成る程、このお所化は、餘ッほど蛸が好きだと見える。行く〳〵は、好い蛸坊主にならつしやるだらう。

半八　それほど好きな物なれば、お齋日のお功德に

雲才　おれにくれるか。

半八　錢せえ出しやアいつでも遣るワ。只食はせては、此方の腮が干上がるから、マアこれは

ト飯臺へ蓋をして擔ぎ上げ

よしに新場蛸々々。

ト呼びながら向うへ入る。

雲才　アヽ、これを思ふにつけても、たゞ恨めしいは親々達。

皆々　そりやなぜに。

雲才　なんでこの身を、出家にした事やら。さりながら、同じ佛門に入りながら、目黑の藥師樣は羨ましい。

閉坊　大だわけめ。

杢太　さて御馳走で腰は張る。この上の樂しみは

畑右　下素の寢樂としようか。
權九　まだ日暮れには間があるよ。
畑右　ハテ、食後の一睡といふわな。
多七　わしもこれから、木賀の方を探して見ようか。
李太　左樣なら和尚樣、この長持は
雲哲　庫裡へわしが案内しませう。
閉坊　これはどなたも
皆々　お住持樣。
閉坊　お雜作でござりました。

ト双盤、てんつゝにて、多七は下座へ、李太夫は人足に長持を擔がせ、畑右衞門權九手傳ひ、雲哲指圖して、皆々下手へ入る。閉坊、雲才殘り、閉坊は又々双盤を貼つてゐる。雲才はそこら片付けてゐる。矢張り右の鳴り物にて、向うより禪司坊、切繼ぎの小袖着流し、一本差し、一文字の編笠を持ち出てくる。跡より鬼王新左衞門、庵に木瓜の紋附いたる木綿の綿入れ羽織、朱鞘の大小にて、苫木綿の頭巾をかむり、疱瘡を煩ひし思ひ入れにて、さんだらぼうしに達磨木蒐と、件のゆで蛸を道にて

買ひしを一緒に包み、疱瘡神送りに來りし體にて出で來り

鬼王　モシ〳〵、そこへお出でなさるは、若旦那禪司坊さまではござりませぬか。
禪司　オヽ、鬼王か。よい所で逢つた。
鬼王　あなたは、どこへお出でなされました。
禪司　わしは養父祐信さま、山中宿の三浦家の御陣屋にお預けゆゑ、そのお見舞に行たのぢやが、鬼王
其方の形は、どうしたのぢやぞいの。
鬼王　成る程。御存じの通り、よい〳〵の病ひの上に、疱瘡に取附かれまして、既に彼方のものと思ひましたが、仕合せと筋が好くて、今日は酒湯でござりますれば、權現樣へ御禮參りに行きました歸り道、そこで肴屋が持つて居つたゆで蛸、あまり旨さうにござれば、買うて參りました。
ト さんだらぼうしの中の蛸を見せる。
禪司　其方、其やうな物を食べて、毒ではないかや。
鬼王　なにサ、毒なら猶ようござります。大當りに又當ります。ハヽヽヽヽ。
ト よろしく兩人本舞臺まで來る。閉坊見て
閉坊　これは〳〵禪司坊さま、ようこそ御參詣なされました。

禪司　ハイ、兄々達のお身の上、息才延命、又は養父祐信さまの、今の御難儀晴れますやうに、現當利益の立願に參詣いたしました。

閉坊　兄箱王どのには、愚僧金剛院に罷りあるうち、別して懇意に致し居つたが、いかなる事にや、箱王下山のその夜より、友切丸紛失ゆゑ、その疑ひが祐信どのゝ御身にかゝり、常々名代の曾我のお屋敷、さぞお取込みと推察いたして居りますると。

禪司　御推量の通り、相談いたすべき祐成さまは大磯通ひ、内へとてはお歸りなく、頼みに思ふ家臣の鬼王は、御覽の通りの病ひ者。

鬼王　その旨い物とはこの事。

トまた蛸を出し

コレ、この旨い物は蛸の入道、これは拙者が大好物。そこで蛸の値段を廉く買つたれば、爰は箱根、これは蛸根でござります。

閉坊　ハヽヽヽ、成る程貴樣は、頓智頓作が、よい〳〵でござる。併し貴樣の年で、殊に見ますれば前歯が入れ歯でござるが、それで蛸が嚙まれますかな。

鬼王　成る程、前歯は一本入れ歯でござるが、跡は殘らず達者で、誠に鬼のやうでござるゆゑ、そこで鬼王でござる。

閉坊　イヤハヤ、取り所もない……感心いたした仁でござる。

トこの話しのうち雲才、掛け物の竹にて後より蛸をソッと取つて、これを一本もぎり、食ひにかゝる

鬼王、さんだらぼうしの蛸見えぬゆゑ、恟りしてあわて、あちこち探し、思ひ入れあつて閉坊に向ひ

鬼王　お住持樣、出して下さい。

閉坊　これは〳〵、俗に申す藪から棒に、愚僧に出せとは。

鬼王　ハテ、落ちつき顏はよさつせえ。サ、甘口なうち、キリ〳〵出してもらはう。

閉坊　そりや何を。

鬼王　オヽ、今おれが提げて來たゆで蛸を。

トこれにて雲才恟りして、屋體の上へ來り、蛸をあちこち隱さうとして隱し所なきゆゑ、正面の閻魔の御首を拔き、その中へ蛸を隱し、御首を元のやうにして置く。この時奥より雲哲出かゝり、この體を見てうなづき、奥へ入る。雲才これを知らず、食ひかけし蛸の足を閻魔の口へ挾み、知らぬ顏にて居眠りゐる。舞臺の三人これを知らず

閉坊　これは存じも依らぬ。愚僧がどうして蛸を

鬼王　取らしつたに違ひない。上がつたら焼いて食はう、下がつたら煮て食はうと、樂しんでゐた蛸を

いよ〳〵出さにやア蛸坊主め、この寺を家探しするワ。

ト いろ〳〵喚き、フト閻魔の口の端を見て

イヤア、蛸ノ盗人が知れた〳〵。

禪司　コリヤノ〳〵鬼王、氣を鎭めて物を云やれ。和尚を捕へて無實の云ひかけ、また盗人が知れたとは

どうした譯ぢや。こりや、酒湯をかけても、疱瘡神様が附いてござるさうぢや。

鬼王　イヤ、疱瘡神ぢやアねえ。蛸盗人は、あの閻魔だ〳〵。

閉坊　木像の閻魔大王が、どうして蛸を

鬼王　盗んだ證據は、口に殘つてゐる。この上は、閻魔を引ッ捕へて

ト立ちかゝる

禪司　たとへ證據があるにもせよ、佛體に向ひ、そりや成らぬ。

トとめる。

鬼王　イヤ、佛體ぢやアねえ、ぶつたくりの蛸坊主。諸人の見せしめ、閻魔の首を引抜いて、獄門に

晒してやるワ。

ト禪司坊を振り切り、二重へ駈けあがる。雲才、首を抜くと聞いて恟りして飛んで出で、鬼王を押へながら無理に舞臺へ引下ろし

雲才　イヤ、像を切らせては、ならぬ〳〵。

ト禪司坊も縋りとめて

禪司　コリヤ鬼王、氣を鎭めてたもいの。

鬼王　イヤ、大事の蛸を閻魔に盗まれては、鎭まれねえ。

ト無性に腹を立て、立騒ぐ。閉坊此うち思ひ入れあつて、そこにある火打ち箱より、火打鐵と石を取つて、鬼王が頭の上にて火を打つ。鬼王これにて捨ぜりふ、惡口を吐きながら段々鎭まる。皆々見て

禪司　やう〳〵の事で、神様がお立ちなされたさうぢや、

鬼王　さて〳〵、あの閻魔は大食ひで、誠につけが荒い。これが本當の、荒いの閻魔だ。

ト皆々よろしく鎭まる。双盤、てんつゝになり、向うより七郎助、紺看板の折助にて、中抜を腰に挾み、跡よりお京、頬かむり、駈落ち者の拵へにて出で來り、花道にて

お京　モシ、七郎助さん、お前がこの箱根へ來なんした跡、あの千住の親方が、惡蟲が附いてゐるわッちだといつて、大磯へ住替へに出したと思はんせ。お前の來てゐる箱根へは近くなる、嬉しくて嬉しくて、住替へに來たその晩に、直ぐに大磯を斷落ちして、方々とお前を尋ねて歩き、やうやうの事で二人一緒に、こんな嬉しい事アねえよ。

七郎　そりやアおれも同じ事、てめえの事は片時も、忘れた事はなかつたわえ。

お京　エヽ、人を喜ばすやうな好い事ばつかり。

ト抓る。

七郎　アイタヽヽヽヽ……なにサ、嘘ぢやアねえ。どうぞして、てめえを身請けして、こんなに朝晩くッついてゐてえと思ふから、江戸に居ても見かけた山もなし、そこで、勘當されても生れ故郷、曾我近邊へ來て、何ぞ好い事もあらうかと、いろ〳〵探してゐるところ、幸ひ伊豆の次郎さまに中間の空があると聞き、まづ當時は雇ひ中間、折助よ。なんと安い野郎だらう。

お京　オヤ、それぢやアお前の事を、白痴の一心に思つてゐる、わッちやアそゝり節にある通りだね。

七郎　そりやアなぜ。

お京　草鞋が切れたか川留めか。

七郎　おきやアがれ。

ト本舞臺へ來る。上の方より多七出て來り、出合ひ頭にお京を見て

多七　ヤア、十六夜お京ぢやアないか。

お京　お前は多七さん。

ト逃げ出さうとするを捕へ

多七　イヽヤ、逃がさぬ〳〵。見附けた〳〵。よく住替へ先から駈落ちひろいだな。見知り人のこの多七が、江戸三界から呼び出されて、てめえを探し歩いたに、爰で逢つたはお引合せだ。それも大方七郎助の指し金であらう。サア、二人ともに大磯の、親方の所へうしやアがれ。

ト お京の手を引き、七郎助の襟髪を取つて行かうとするを

七郎　エヽ、見つともねえ、よしやアがれ。

ト多七の手を拂ふ。

多七　見つともねえは其方の勝手、見えがゝりだ、連れて行くのだ。

七郎　なんだ、見えがゝりも氣が強い。この七郎助さんが色事遊ばした十六夜お京、おれが箱根にゐると聞いて、跡追ひかけて來た女を、見附けられたら仕方がねえ。と歸してやつちやア、この兄さ

んは只の男だ。殊に宿場持ざの伏せ玉は、上げ玉にしても大事ねえ。それともおぬしが手を引いて、連れて歸るなら歸つて見ろ。それこそ忽ち劍の舞ひ、十二神樂のひよつとこ野郎、指でもさして見やァがれ。なんの事た、風ひいた。

ト此うち鬼王、七郎助を見て

鬼王　ヤァ、わりやァ勘當した弟の團三か。今に性根が直らぬな。

七郎　知れた事だ。曾我の屋敷に愛想がつき、江戸三界までごろついて、今の名は七郎助、兄でも杭でもねえ鬼王。

お京　モシお前、兄さんに向つて、あんまりでござんせうぞえ。

七郎　ナニ、勘當されたら赤の他人、なに構ふものかえ。

禪司　その心ゆゑ今のその形、親兄弟の罰とは思はぬか。

七郎　アイ、罰も報ひも知らぬが一德。

お京　それではお前、濟むまいがな。

七郎　濟まぬといつて、どうするものか。

多七　どうといつたら、十六夜を渡さにやァ、身の代の立て金しろ。

七郎　馬鹿な野郎だ。金があるものか。

多七　金が無けりやァ女を連れて

ト お京を引立てるを、七郎助とめ

七郎　爰にゐては、四の五と面倒だ。われは先刻の所で、合點か。

お京　そんならわたしは

七郎　行け〳〵。

ト お京は思ひ入れあつて向うへ走り入る。

多七　玉を逃がしては

ト 七郎助を振り切り行くを、七郎助とめる。鬼王出て、七郎助を引廻して

鬼王　此奴はやらぬ。こなたは跡を

多七　合點た。

ト 立廻り、三味線入り禪のツトメになり、多七は花道へかゝる。七郎助は鬼王を振り切る立廻り。此うち向うよりお京、顏を隱し、チリ〳〵と跡戻りして出てくる。これを押し戻して祐兼、上下衣裳、大小。岬、裲襠抱へ帶、奥女中。跡より雪の戸、定家文庫を持つて奥小姓にて附き出て、よき所まで

來る。お京摺れちがひ、逃げようとするを、祐兼捕へ、押さゝへてお京を後へ圍ふ。此うち多七追ひかけゆき、祐兼をかきのけ、お京を捕へんとするを、祐兼、多七の腕先を捕へ捻ぢあげ、此まゝにて皆々舞臺へ押して來り

祐兼 慮外な匹夫め。

ト見事に投げて

すさり居らう。

ト閉坊、祐兼を見て

閉坊 ヤア、あなたは工藤の御舍弟。

七郎 ほんに、雇はれた旦那の祐兼さま。

閉坊 まづ〳〵これへ。

祐兼 罷り通る。

ト管絃の頭にて通り神樂、合ひ方になり、祐兼、岬、雪の戸、上の方へ通り、皆々よろしく住ふ。

閉坊 祐兼さまのお入りは、何御用にて。

祐兼 今日は狩場の繪圖面内見の爲、まつた友切丸の儀について、來かゝる路地に無禮の女、殊更慮外なあの下郎、それゆゑ餘儀なく引連れ參つた。

岬 私しことは、三浦平六兵衛義村の、奥勤めいたす岬と申す者。先達て主人義村の娘片貝こと、曾我の祐成さまと、云ひ號け致せし上は、内縁ある曾我のお家。然るに友切丸紛失は、箱王さまの業なりと、お疑ひかゝりし上、祐信さまは此方の陣屋へお預けの身。

雪戸 何卒友切丸の劍詮議いたし、箱王さまのお疑ひも晴らし、祐信さまもお預け御免あるやうにと

岬 義村公の内意により、女ながらもこの岬、内々吟味いたすのでございます。

ト此の時多七起上がり

多七 アイタ、、、、、。モシ、お侍ひ樣、御無禮いたしたは御免下さりませ。シタガ、先程からの口振りでは、爰にゐる七郎助は、あなたの御家來かえ。

祐兼 いかにも。

多七 左樣ならば、あなたも遁れッこはねえ。モシ、あの十六夜お京といふ女を、お中間の七郎助が、上げ玉にしたところを、やう〳〵と捕まへたのだ。主人方なら是非共に、あなたへかゝらにや成りませぬ。

祐兼 ヤア、素町人の分際で、一蔸職の弟たる、祐兼へ對し慮外な一言。今一度ぬかさば、眞二つだぞ。

トきつと云ふ。

多七 ア、モシ〳〵、玉を上げられたその上に、眞二つに切られては、根ッから算盤の玉に合はぬ。主人顔をしようと思へば、眞二つにしようと云ふ。こりやア一番切りかへて、元の名の團三郎でかゝらば、幸ひ爰に兄御の鬼王さん、殊に曾我の若旦那もお出でなりや、お二人さん、どうぞこの仕埒をつけて下さい。

鬼王 いお聞く通り、勘當の弟の野郎が、逃げやうが、くたばらうが、なんの構ふ事があらう。

多七 イヤ、勘當しても、肉身分けた團三郎、否でもこなたにかゝらにやならぬ。十六夜お京を渡すとも、但し身の代三十兩、耳を揃へて受取らうか。禪司坊さん、新左衛門どん、どうぞ挨拶して下さい。

岬 その返事は、岬が致さう。

ト皆々思ひ入れ。岬、雪の戸を招き、定家文庫より三十兩出し

曾我に由緣の三浦家にて、この場のあらまし、無難に納めたさ。いらぬ岬が差出ながら、其方が望みの身の代金。

ト投げてやる。多七受取り

多七 エ、。こりやア小判で三十兩。夢ではないか。

岬 それにて云ひ分ないか。

多七 これさへ取りやア、何を申す事がござりませう。こんな夢なら覺めぬうち

岬 キリ〳〵歸りや。

多七 こりやアどなたも、おやかましうござりました。

ト通り神樂になり、多七向うへ入る。

閉坊 ハテ、流石は大家の三浦の奥勤め、岬どのには感心いたした。

七郎 世には彌次馬もたんとあるものだ。なんぼ曾我に緣があればとて、昔の團三郎ならば、有り難い忝いと思はうが、勘當されてごろつきの、七郎助の身にとつちやア、その日雇ひでも御主人の、祐兼さまが有り難い。そのお方も構はぬに、大きなお世話、お女中樣。

ト禪司坊、ツカ〳〵と七郎助の側へ來り

禪司 エ、、其方はなア。御内緣あればこそ、曾我の名の出るをおいとひなされ、おのれ風情に岬どのの お志し、厚く一禮述ぶべきに

鬼王 せめて押し默つてゞもゐる事か。その惡口は何事ぞ。力づくでは叶はぬが、いつその事、かぶり

ついて

ト立上がる。

祐兼 鬼王待て。

鬼王 でも餘りな

祐兼 今日一日は身が家來。殊に其方は勘當したれば、いらぬ口出し。

鬼王 エヽ、あの惡人の肩を持つ、祐兼さまの牛は牛連れ。

祐兼 イヽヤ、賤しい彼れが肩を持つ。曾我に内緣あるからは、一家の端と思ふから。

禪司 ナニ一家とは。

祐兼 元は一家の曾我と工藤。ナニ禪司坊とやら、近しき仲の初對面、伊豆の次郎祐兼が、知る人にならう。鬼王もろとも、これへ參れ。

禪鬼 アノ、私しどもを

閉坊 お召しなさるゝ祐兼さま。

禪司 いはゞ敵の弟御と

鬼王 思へば無念な。

ト さつと立ち、ツカ〳〵と行き無念のこなし。

七郎 そりやこそ怒つた〳〵。

ト囃し立てる。

岬 コリヤ、鎭めて〳〵。

ト押へる。閉坊心得、件の鎌にて鬼王に火を打ちかける。これにて鬼王、力んだまゝ、クンニヤリとなる。

禪司 ムウ。

ト見得。これより誂らへの合ひ方になる。

祐兼 初めて逢つた禪司坊、見ると聞くとは大きな相違。兄祐成は惰弱者にて、廓通ひに現を抜かし、弟は劍の盜賊と、疑ひかゝりし箱王丸、末の弟は禪司坊、見かけからして柔らかな、役に立たずのその生立ち、いはゞ一家の面よごし。久上へでものめずりこみ、くり〳〵坊主が相應だ。ハヽヽヽヽ。

禪司 その嘲りも何故ぞ。親を討たれしばつかりに、現在敵の口の端に、曾我をさみする口惜しさは

鬼王 四百四病の病ひより

閉坊　馬の啼くほど、辛いものはないわい。

鬼王　コレ〳〵和尚どの、なぜ馬の啼くのが辛うござる。

閉坊　ハテ、ひんほど辛いといふ事サ。

鬼王　イヤ、呆れた坊様だ。

祐兼　三ケの莊は、兄祐經が領地となり、河津が胤の兄弟、その態は何事だ。貧乏神の身を以て、敵呼はり氣が強い。

禪司　共に天を戴かざる親の仇。兄弟揃うて。

祐兼　ナニ小差出た小わつぱめ。

鬼王　病みほうけても新左衞門、兄事お主の敵をば

　　トきつとなり、禪司坊と入れ替り、腰なる竹光に手をかけ、無念のこなし。祐兼思ひ入れあつて

祐兼　うづ蟲め。うぬはこの祐兼を睨みつめ、刀の柄に手をかけて、身共を切る氣か。ハ、、、、。當時一蔸職の御舍弟だぞ。貧乏神の澁團扇、破れかぶれと氣紛れて、その赤鰯がちつとでも、身共の體へ觸るが最後、主も家來も逆磔刑だぞ。エ、、まじ〳〵とした大腰拔けめ、

　　ト鬼王を路み倒す。このはずみに鬼王の刀鞘走る。鬼王うろたへ取りにかゝるを、七郎助、ツカ〳〵

と寄つて引ッたくり

七郎　ドッコイ……兄貴の魂ひ、御覽なされませ、

祐兼　曾我の家來の新左衞門、拔き放したる一腰は、お定まりの竹べらか。雀に劣つた業晒し。キリキリ塒へ歸りやァがれ。

禪司　その鳥類さへ親と子の

祐兼　恩を思はゞ

禪司　やがて本望。

祐兼　心許ない。

岬　まだ年若な禪司坊さま、そのお心根が

お京　思ひやらずておいたはしい。

七郎　エ、、べら坊め。いらざる他人の貰ひ泣き。てめえはおれさへ大事にすりやァいゝ事だ。これからどこぞへ行つて、晝飯とせう。マァ來や。

　　ト手を取る。

お京　阿房らしい、そんな事が。

七郎　ナニ憚ふ事があるものか。大事ないわい。

岬　その大事のお主の難儀も、兄御の病氣も外に見なして

お京　思へば〳〵、義理知らずぢやなァ。

七郎　義理に搦まり紙子を着て、見す〳〵川へはまらうより。ナァ、嗚ァ

お京　お前、それではあんまりな

ト氣の毒な思ひ入れ。

禪司　辛き報ひも

閉坊　辛き苦界も

お京　遁れたお禮は

ト岬へ辭儀する。

七郎　たわ言云はずと

ト お京を引寄せる。

岬　禪司坊さまには御一緒に。

閉祐　然らば岬どの

岬　祐兼さま。

禪鬼　とは云へ、見す〳〵

ト祐兼へ思ひ入れあるを

岬　ハテ、その後ゆるりと

ト禪司坊を呑み込ませて押へ

お目にかゝりませう。

ト唄になり、岬は祐兼と閉坊へ目禮して、擬勢する禪司坊と鬼王を押へ奥へ、七郎助はお京の手を引き、下座へ入る。雲才は下手へ入る。跡に祐兼と閉坊殘り

閉坊　祐兼さま。何は差置き承らう。大江の重寶、曉丸の一腰を、盜み渡せと廣元の家中、劍澤彈正に云ひつけ召れたが、右彈正が、又々神職大藤内を賴み、大江の家中左七郎が、預かるところの曉丸、首尾よく盜み、彈正へ渡したを、又々愚僧が預かりござるが、今一品の友切丸は、如何なりました。

祐兼　その友切丸も、矢張り大藤内に盜ませ、彼れめに預けあるワ。

閉坊　彼奴に預けて置く時は、事のばれる氣遣ひはないが、祐兼さま、何故あつて友切丸といひ、大江

の重寶暁丸も、奪ひ取らせたのでござるな。

祐兼 その儀は兼ねて某、蒲の冠者範頼公へ一味なし、鎌倉どのを討ち亡ぼし、範頼公を世に出さんと計らへども、兎角邪魔者は大江の廣元、彼奴があつては何かの妨げ。それゆゑ廣元の家臣、劍澤彈正を味方に引入れ、彼れに仕事を云ひつけて、頼朝公の御懇望ある、大江の重寶暁丸を捲きあげさせたは、廣元を罪にとつて落す一つの計略。それゆゑ刀預かりの、船越兄弟は押籠めとの噂。また廣元もさる者にて、表立つての詮議はならず、内々にて名劍を懇望と云ひ立て、領地領地に觸れを廻し、當院へ皆取寄せ、近々この所へ參詣と號し、誠はその時暁丸、詮議なさんず廣元が計らひ。

閉坊 成る程、それで當寺へ、矢鱈に刀を取寄せる趣意が解り申した。さりながら、なんぼ智慧自慢の廣元でも、暁丸の一腰を、愚僧が方に預かりあるとは、うろたへた閻魔でも、知る事ではござりませぬ。

祐兼 それにつけてもこの所へ、劍澤彈正が參る筈ぢやが。

トこの話しのうち下手より雲哲出かゝり、この時前へ出て

雲哲 仰せの如く、今日劍澤彈正さま、當院へお入りの山。先刻御家來中を以て、お知らせでござりました。

祐兼 ムウ。然らば彈正參るまで、何かの密談。

閉坊 圍ひに於て薄茶一服。

祐兼 御無心申さうか。

ト唄になり、閉坊案内して祐兼附き、二重へ上がり、奥へ入る。跡に雲哲殘り

雲哲 まづ邪魔な奴等は片附けた。これからは、おれが見ておいた先刻の代物。うまい〳〵。

トこれよりいつもの合ひ方になり、雲哲あたりを窺ひながら、そろ〳〵二重へ上がり、閻魔の側へ行くと、バツタリ音して天井より、猫一疋飛び下りる。雲哲惚りして飛び退く。猫は閻魔の口の蛸の足を目がけ、段々に這ひ上がる。雲哲これを見て、猫を追ひ廻し、又そろ〳〵と閻魔の側へ行き、御首を引抜き、中より雲才が隠した蛸を引出し、そこへ置き、御首は元のやうにする。此うち又猫出て來り、右の蛸を咬へ行かうとする。雲哲あわてゝ猫を追ひ廻す。猫、蛸を放さぬゆゑ、同じく猫の眞似をして追ひ廻す。この時向うより中間一人走り出て、直ぐに本舞臺へ來り

中間 物まう〳〵。

ト雲哲これに心づかず、猫を追ひ廻し、トゞ猫を引放す。猫逃げて奥へ入る。中間、いくら呼んでも返

事せぬゆゑ、雲哲の側へ來り

これサ、物まう。

ト脊中を叩く。雲哲惚りして

雲哲　ドウレエ〻。

ト懐へ聲にて挨拶して、蛸を懐へ隱す。

中間　只今これへ、劍澤彈正罷り越しまする。右の段を、お知らせ申せとの儀でござりまする。

雲哲　折角〳〵めようと思うたに、また邪魔が入つた。

中間　ナニ、お邪魔なら、主人へ左樣申しませうか。

雲哲　イエ〳〵、なにサ、邪魔を拂つておきましたといふ事サ。

中間　ア〻、左樣かな。然らばお暇申します。

ト云ひ捨て、引返して向うへ入る。雲哲また蛸を出して嚙らうとする。この時奥にて

閉坊　雲哲〳〵々々。

ト呼ぶ。これにて又惚りして

雲哲　ハイ〳〵。

ト云ひながら、隱し所に困り、股藏へ隱し

ア〻、折角ものして心のまゝに、食はんと思へば邪魔が入る。又せしめんと思へば呼び立てる。

ア〻、蛸は諸道の妨げぢやなア。

ト三味線入りの禪のツトメになり、雲哲いぢかり股して奥へ入る。向うより劍澤彈正、惣髪、馬乘り袴、大小にて、鞭を差し、遠乘りの歸りの心にて出てくる。跡より大藤内、切繼ぎ小袖、着流し、大小、湯禮をかけ、深編笠にて、鈴を持ち、神道者の拵へにて出て來り、花道にて彈正を駈け拔け、先へ廻り、鈴を振りながら

大藤　高間ケ原に神とゞまりまします。すめろみ神ろみ、とうかみゑみたみ、りけんたけん八百よろずの神々達。

トわざと彈正に摺りつく。

彈正　ヤイ〳〵、物貰ひなら、附くな〳〵。

ト掻きのけて本舞臺へ來る。大藤内跡より追ひかけ來り

大藤　拂ひ給へ清め給へ、無性多寶神道加持。

トひつこく彈正に摺りつく。

彈正　エ、、あたしつこい。退きやァがれ。

ト振りきるはずみに大藤内の編笠取れる。兩人顔見合せ

ヤ、其方は

大藤　彈正さま。

彈正　その後逢はう。

ト行きにかゝるを引廻し、立ふさがつてキツと捕へる。彈正拔きかけるを、大藤内ちやつと見る。こ、れにて彈正、鞘に納める。大藤内ドツカリと坐る。双方よろしく思ひ入れ。誂らへの合ひ方。

大藤　彈正どの、こなたは身共を、殺さずばなるまいがな。

彈正　なんと。

大藤　いつぞや身共に内々にて、大江の家中神原佐七郎が預かりの、曉丸の短刀を、盜みくれろと頼みゆゑ、この身の出世にならうかと、首尾よく盜んで渡したも、身貧な態の神道者、大藤内が横しまは、神の咎めも恐れずに、慾にころんでした仕事。それをこなたはそれなりに、短刀取上げ今日が日まで、梨の礫もしねえのは、恐れながらも出來めえと、見越しての惡顏か。もう斯うなつちやァ破れかぶれ、無駄骨折らしたその代り、曉丸の一腰は、劍澤彈正が、所持いたして居りますと、三老方へ云ひ立てゝ、おれが命をきりにかけ、こなたの首はおれが物だ。首が惜しくば劍澤、一かばちかの挨拶しやれサ。

彈正　成る程、さう云はれては彈正、一言もない。併しながら、身共が心から出た事ではない。その頼み手は祐兼どの。それゆゑ貴樣を頼んで盜ませたのだ。しゝ、友切丸の一腰も、慥かにこなたが

大藤　オヽサ、友切もおれが手先で盜み取り、矢ッ張りおれが預かつて、知れねえ所へどめて置いたが褒美の金を貰はぬうちは、おれが刀も同じ事。こなたはそれに事かはり、現在主人の重寶を、他人のおれに盜ませて、濡れ手であはよく大江の家を、こなたが横領する心か。

彈正　アヽコレ、滅多な事を。

大藤　口外されるが否なれば、曉丸の價をくりやれ。

彈正　いま差當つて

大藤　無けりやァ矢ッ張り訴人をせうか。

彈正　サアそれは。

大藤　金を寄越すか。

彈正　サア

大藤　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

大藤　彈正返事を、聞くべいか。

ト彈正思ひ入れあつて

彈正　いかにも、遲なはつたるその褒美、これにて渡し遣はさう。

大藤　すりやアノ爰で

彈正　いかにも。

ト云ひさま拔きかけるを、突き廻して、ちよつと立廻りある。此うち後へ閉坊、掛け物の箱を持ち出かゝり、窺ひぬたりしが、この立廻りの中へ入り、双方を押へる。三人見得。

閉坊　ア、、コレ〳〵、彈正どの、短氣な事をなさらずと、愚僧に任せて、まづ〳〵。

トなだめる。彈正これを好き機にして納まる。閉坊、大藤内に向ひ

成景どの、その請合ひは愚僧が渡す。その證據はコレこの通り、曉丸の短刀は、掛け物の箱に入れて、疾くより愚僧が預かりござれば、何事も頭に免じられて、この場は暫らく

大藤　イヽヤならねえ。なりませぬ。神道者とは氣の合はぬ、挨拶人が出家ゆゑ、惡顏させる彈正どの

その合ひ口なら人喰ひ馬、牛に經文、耳にやア入らねえ。サア、褒美の金が出來なけりやア、その短刀はおれがものだ。ドレ

ト掛け物の箱へ手をかける。

閉坊　イヤ、この品は愚僧が渡さぬ。

大藤　そんなら褒美を、いま寄越すか。

彈正　金といつては今爰に

大藤　二種ともに渡さにやア、この趣きを三老方へ。

ト立上がつて花道へ行かうとする。彈正「エイ」と袱紗包みを手裏劍に打つ。大藤内手早く打ち落す。袱紗とけて、中より符場の繪圖面出る。大藤内取上げ見て

こりやコレ狩場の

彈正　その繪圖面は祐經が、廣元どのへ差上げし、皐月下旬の地割りの繪圖面。

大藤　それを何しに打ちつけたのだ。

彈正　褒美の金を渡すまで、當座の合ひ文。

大藤　すりや、この品を預かつて

彈正　祐兼どのに面談して、金は屋敷で
大藤　そんならそれまで、褒美の形代。
　　ト懷中する。
閉坊　して、この短刀は。
大藤　矢張り貴僧へ。
閉坊　預かり置くは承知でござれど、廣元公よりこの短刀、詮議の爲にこの寺へ、百姓町人の腰の物を
　　いくつとなしに取寄せござるが、これを見分るには、何ぞ外に見どころでもござるかな。
彈正　成る程、出家の身には、曉丸の譯知らぬ筈。元よりこの短刀は無銘なれど、酉の年の者の血汐を
　　注げば、所々にて鷄聲を發し、刃に星の影うつる。名けてこれを曉丸といふ。
閉坊　ハテ、稀代な劍でござりまするな。
彈正　かゝる不思議な名劍ゆゑ、友切丸と一つになし、範頼公の差料となさんとの事。たゞ心がゝりは
　　劍詮議に廣元が、當寺へ來りしその時に、短刀隱しある事を、必ず共に氣取られまいぞ。
閉坊　それはちつとも氣遣ひあるな。この如く掛け物の箱へ秘めあれば、又ぞろ所を變へて、目立たぬ
　　やうに。

大藤　無駄骨仕事は御免だな。
閉坊　その事なれば愚僧が請合ひ。ナニ彈正どの、幸ひ奥に先刻より、祐兼どのもお出でござれば
彈正　イカサマ、何かの密談いたした上
大藤　此方の仕事を分けて下さい。
彈正　そりや申さずとも
閉坊　彈正どの
大藤　成景、繪圖面預かつた。
　　ト唄になり、彈正思ひ入れあつて奥へ入る。跡に大藤内、閉坊殘る。
閉坊　さて〳〵、あの彈正どのは、誠に氣を揉ませるお方でござるて。
大藤　あの位に申してさへ、蛙の面に水とやら。それには代り祐兼さま、奪ひ取つたその日より、友切
　　丸を身共へ預け置かるゝは、流石大家の工藤の御舍弟。
閉坊　して、其許が隱し置く、友切丸の劍はいづれに。
大藤　人目を憚り小地獄の、湖水のあたりへ。
閉坊　天晴れ妙計。イヤ、感心々々。

トこの時奥より雲才出て來り

雲才　モシ〳〵、大藤内さま、只今奥にて祐兼さまが、お前を同道いたし參れと仰せられます。サアサア、お出でなさい〳〵。

大藤　すりやアノ、祐兼さまが

雲才　左樣でございます。

大藤　然らば參つて面談いたさう。ナニお住持、必ずともに、只今申した劍の在所は

閉坊　承知でござるて。

雲才　御案内いたしませう。

ト双盤になり、雲才案内して、大藤内附いて奥へ入る。跡に閉坊殘り

閉坊　ハテ、丈の知れぬ成景が胸中。そればかりでなく、今日計らずも禪司坊、三浦家よりの奥女中、もしこの短刀の詮議ではあるまいか。左樣な事では、我が寺ながらウカとは置かれぬ。アヽコレどこぞへ仕舞うて

ト件の掛け物、箱の短刀を取出し、いろ〳〵あつて

よし〳〵、有るワ〳〵。義村さまの使ひの歸るそれまで、氣の附かぬ所は閻魔の御首。さうだ、

さうだ。

トあたりを見廻し、閻魔の頭を抜いて短刀を差込み、元のやうにして思ひ入れ。よき時分雲才出で、隱せし蛸を見つかりしかと心得、膽を潰し

雲才　アヽモシ、閻魔の首に蛸はござりませぬ。

ト慄へて云ふ。閉坊悔り飛びのき

閉坊　ナニ、閻魔の首がどうしたと。

雲才　サア、閻魔の首に蛸は

トもぢ〳〵する。

閉坊　たわけ面め、閻魔の首が紙鳶にしてあげられるものか。いろ〳〵な無駄を吐かすな。

雲才　それでもお前が、閻魔樣の首を抜いで、どうやら蛸にでもしさうだから、それでとめました。既に以てお經にもござりまする。釋迦に提婆、西瓜に和中散、蛸に閻魔は大の禁物でござりまする。

閉坊　イヤ、此奴が樣々な事を吐かす。おのれ、斯樣な阿房は寺には置かれぬ。追ひ出してしまふ。サア、出てうせろ〳〵。

ト雲才を捕へ、花道の方へ突きやる。

雲才　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

閉坊　イヽヤ、置く事はならぬ。コリヤ、男ども、この坊主めが古繻袢を持つて來い。此奴、裸にして追ひ出す。

雲才　御免なされませ〳〵。

ト逃ぐるを捕へ、帶を解かうとして

閉坊　これはしたり、男どもは居ぬか。雲哲よ、古繻袢を持つて來ぬか。コリヤヤイ、何をしてゐるぞ

ト奥へ向ひ、獨り呼びながら氣をもみ、小言を云ひ〳〵足早に奥へ入る。雲才跡を見送り、思ひ入れあつて

雲才　あの和尚めがあゝ云ひ出しては、とてもおれは、この寺をお拂ひ箱だ。裸にされて追ひ出されては、出入りが出來ねえ。布子を取られぬ其うちに、おれが方から駈落ちしてやらう。幸ひ爰に脚絆草鞋、菅笠もあるな。占めた〳〵。これが本當の駈落ちだ。

ト そこにある脚絆草鞋菅笠を取つて、足早に行かうとして立ちどまり

イヤ〳〵〳〵、駈落ちするなら、閻魔へしまつた蛸を持つて行かう。あの和尚めに喰はれるも損だ。

ト駈寄りて御首を取のけ、件の短刀を取出し、ゆで蛸見えぬゆゑ、いろ〳〵氣を揉み

サア〳〵大事だ。折角隱したゆで蛸が、こんな刃物になつた。こいつは大變だ〳〵。

ト いろ〳〵して

イヤ〳〵、この耳くじりを古手買ひに賣つたなら、蛸の足の喰はれぬといふ事もあるまい。これから寺を隨德寺、蛸をなくして箱根を駈落ち。ドリヤ、一散に駈落ち。

ト菅笠をかむり、脚絆草鞋にて、短刀を差し、一散に向うへ入る。此うち通り神樂、奥より大藤内、狩場の繪圖面の袱紗包みを持ち出で來り、あたりを見て

・大藤　最前思はず彈正が、我れに渡せしこの繪圖面。富士の御狩の地の利案内、曉丸の褒美の合ひ紋、此方で繪圖面寫し取り、兼ねての大望、その節役に……さうぢや。

ト合ひ方になり、机の亂れ箱を取寄せ、件の繪圖面を開き、地理の樣子をよく〳〵見る思ひ入れ。

音樂になり、向うより八幡の三郎行氏、上下大小。侍ひ二人附き出で來り、花道にて

行氏　コリヤ、其方どもは、申し附けたる儀、承つたか。

侍ひ　左樣でござりまする。大江の御家老彈正さま、殊に御舍弟祐兼さまもお入りの樣子。

行氏　すりや、祐兼さまにも……ハテ、何用ござつて。

ト思ひ入れあつて

然らばこれより供待ち致せ。行氏一人御寺へ參つて……サヽ、罷り歸へれ。

侍ひ　ハヽア。

ト引返して向うへ入る。矢張り音樂にて、行氏舞臺へ來り、立ちどまつて

行氏　誰そ御案内頼みたう存ずる。

ト云へども、大藤内一向挨拶なく、繪面の地理を見詰めてゐる。

大藤　御領の假屋は戌亥の方、辰巳に當つて和田北條、祐經どのゝ假屋も同じく

行氏　ヤ。

ト聞き咎める。これにて大藤内、思はず顏を見合せ、件の繪圖をちやつと疊み、思ひ入れあつて

大藤　いつの間にやらお歴々。

行氏　案内乞へど何やらに、見惚れゐらるゝ樣子といひ、問はず語りは、慥かに狩場の

大藤　アイヤ、存ぜぬ失禮。

ト繪圖面を懷中して

御容赦下され、サヽ、お通りなされまし。

行氏　然らば許しめされい。

ト替りし合ひ方になり、思ひ入れあつて行氏、上座へ通る。大藤内思ひ入れあつて

大藤　見れば庵に木瓜の御紋附き、工藤家のお使者かな。

行氏　いかにも、身共ことは祐經が近臣、八幡の三郎行氏と申す者。

大藤　エヽ、あなたが當時の八幡三郎、ハテ、二代目の行氏どのか。

ト目を附ける。行氏もこなしあつて

行氏　寺院に居らるゝ取次の身を以て、木綿襷かけて居らるゝは、何とも以て。

大藤　成る程、御不審御尤も。拙者は卽ち權現の社人、大藤内成景と申す、神道者でござります。

行氏　その社人たる大藤内、所持いたされたは、慥か狩場の、繪圖面でござらうな。

大藤　イヤ、全く左樣な品ではござりませぬ。こりや何でござるて……オヽ、左やう〳〵、武家方に普請の家相を頼まれ、それを只今判斷いたして。

行氏　すりや、家相を見んが爲に、今の繪圖面。ハテサテ、狩場に似寄りの品を

大藤　ヤ、なんと。

ト兩人キツと顏見合せ、思ひ入れあつて

行氏　ハテ、其許には、どうやら見掛けし

大藤　其許とても存じた面ざし。
行氏　ハテ、いづれでありしか。
ト兩人互ひに顔を見詰め、思ひ入れあつて
大藤　オヽ、思ひ出した。しかも、過ぎにし安元二年、赤澤山の柏ヶ峠で、萇の火を貸さつしやいと、無心を云うた、伊藤どのゝ馬の口取り。
行氏　それ〳〵、さう聞いて氣が附いたが、火繩の火で萇を吸ひつけ、話さしつたる山獵師、弓矢携へ鳥獸、射て世を渡る狩人どのだの。
大藤　射とめる狸か野狐か、白狐か奴かお侍ひ。しかも二代目八幡の三郎。
行氏　狩人變じて神道者、大藤内とはこなたであつたか。
大藤　命があれば今日爰で
行氏　思ひがけなう落ちあつて
大藤　古い話しも……オヽ、十八年。
行氏　ざつとつもつて二夕昔。
大藤　ハテ久しうて

兩人　サア、樂にござりませ。
ト大あぐらになり、合ひ方替つて世話のやうになり
大藤　ハテサテ、人の成行きは知れぬ。馬の口を取つた奴どのが、工藤さまの御家老樣。家老の身共に
行氏　ヤ。
ト大藤内思ひ入れあつて
大藤　アイヤ、狩人が神道者、兩方ともに出世は出世だが、仕合せは、まだしも貴樣か。
行氏　イヤモウ、あの時分とは大きな相違。誠に今では浮み上がつた。
大藤　その出世した奴どのに、大藤内もあやかりたいが、身共も以前は武士の果て、工藤のお家へ其許が、推擧をしては下さるまいか。
行氏　イカサマ、袖振り合すも緣とやら、推擧いたして進ぜようが、その代りには此方もちつと、賴みがござるわえ。
大藤　そりや如何やうなお賴み事。
行氏　外でもござらぬ。貴公が御所持なされたる、家相の口傳、普請の繪圖面、見させては下さるまいか。

大藤　アノ只今のこの繪圖を
行氏　地利は正しく牧狩の、その繪圖、身共に
大藤　この儀ばかりは
行氏　叶ひませぬか。
大藤　いかにも。
　　トよき時分に彈正出かゝりゐる。
行氏　然らば、貴公のお賴みの、工藤の家へ
大藤　推擧のお世話は
彈正　この彈正が致して進ぜう。
行氏　ヤ、さう云やるは劍澤、彈正どのか。
彈正　祐經どのへ推擧いたさう。さすれば以前の近江の小藤太。
行氏　ヤ、これなる社人大藤内は。
大藤　歸參の上は某も、昔のまゝに小藤太と、變名いたさば名乘りの一字、元の成景、以前の成家、その時こそは、近江の小藤太成家と。

行氏　ヤ、、、、、近江の小藤太成家とは、工藤家の執權たる
大藤　その名もいつか埋れ木の、十八年の艱難も、伊東を射損じ祐安を、射て落したる越度ゆゑ、流浪の上に又ぞろや、主人の勘氣、扶持離され、當時は誠の素浪人。
行氏　すりや、赤澤山の狩倉にて。
大藤　河津を射たるこの身の誤まり。
行氏　さては河津を射とめしは、近江の小藤太。
彈正　今より歸參は身が推擧、それも射術に名高き成家、以前に變らぬものなれば、射術の程を拜見いたさう。
大藤　云ふにや及ぶ、覺えの手の内。
　　ト思ひ入れ。この時空へ、白鷺、山鳩、大分に舞ふ。
彈正　幸ひ空飛ぶあの白鷺、近江八幡の兩執權、新參古參の二人の手の内、彈正これにて拜見いたさう。
大藤　手練とござれば拙者めも、不拙者の盲目蛇、云はゞ座頭の垣のぞき、恥を垣根に朝顏の、小柄を以て、空飛ぶ諸鳥を
　　ト小柄を取つて思ひ入れ。行氏これをとめて

行氏　にぶき射術も正しきは、色づく山の紅葉に鹿……サ、しかも、時雨の赤澤山、その手の内は劣るとも、紅葉に鹿の弩にて。

ト弩拔いて立ちかゝり、兩人見やつて、大藤内は上の方、行氏は下手に寄つて、空飛ぶ鳥にキツと目を附け

八幡が手練はにぶるとも

ト思ひ入れあつて空なる鷺に目をつけ

いづれを一羽失ふとも、鳥類にも嘆きは同じ。

大藤　八幡どのには遲れの樣子、然らば身共があの鳥を

行氏　椎の木なくば、貴殿はよもや

大藤　ヤ。

ト窺ふうち、行氏すかさず弩を打つ。鳥にあたりし體。大藤内遲れじと小柄を打つ。これは外れる。

先に打ちし弩にて鷺はよき所へ落ちる。兩人駈けより、件の鳥に手をかけ、思ひ入れ。大藤内の小柄下へ落ちる。

行氏　この白鷺は拙者が弩。

大藤　イヽヤ身共が小柄にて

行氏　イヤ行氏が

大藤　いよ〳〵貴殿の手練とござれば、射術に暗きこの成景、一生埋れ木。さすれば矢張り神道者、家相の判斷、これが相應。

ト懷中の繪圖を出しかけ、思ひ入れあつて

花咲く折もござるまい。

ト繪圖へ思ひ入れして云ふ。行氏こなしあつて、鳥に中りし弩を、素早く拔き捨て

行氏　アイヤ、氣遣ひあるな成景どの、鳥に中るは朝顏の、貴殿の小柄に相違ござらぬ。拙者が紅葉の弩は、空より落ちて砂まぶれ、未熟の八幡が及ばぬ御手練、行氏驚き入つてござる。

ト大藤内の小柄をソツと鳥へ突き立て、差出す。大藤内取つて

大藤　すりや、某が小柄にて

行氏　空飛ぶ鳥も、まツこの如く。ハテサテ御手練、感心いたした。

大藤　然らばいよ〳〵いけ鳥の、勝を取りしは卽ち拙者。

彈正　手練の程を見し上は、いよ〳〵歸參の執持ち致さう。

トこの時祐兼出かゝりゐて

祐兼　祐兼しかと見届けた。兄祐經に成りかはり

彈正　祐兼さまには、今の樣子を御覽ありしか。

祐兼　それゆゑ彼れが勘當は、身共が赦して以前の如く、工藤が家の執權職。

大藤　すりや小藤太めを歸參とな。

祐兼　今より忠勤はけんでよからう。

大藤　こは冥加なき御仰せ、有り難く存じ奉ります。

行氏　すりや、其許には今日より

大藤　昔に變らぬ近江の小藤太。

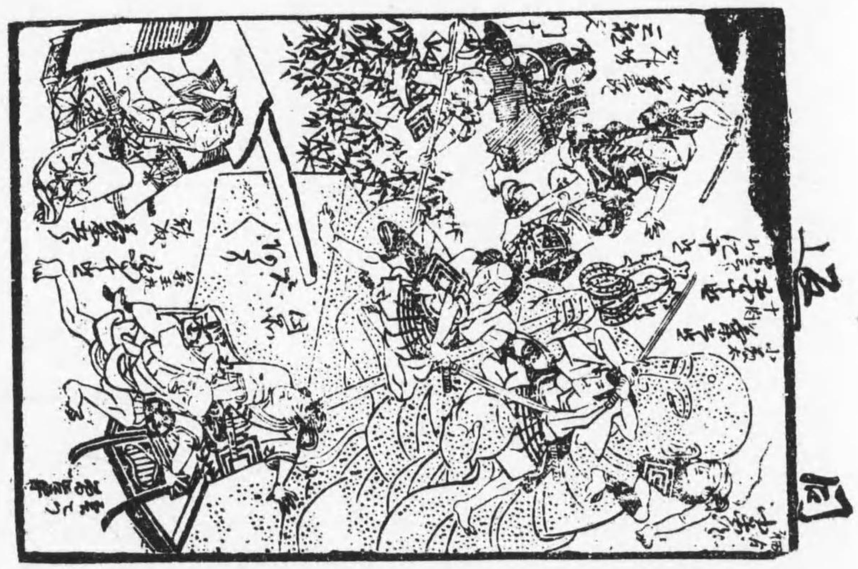
行氏　拙者は新參、八幡の三郎、以後は互ひに別懇に、申し

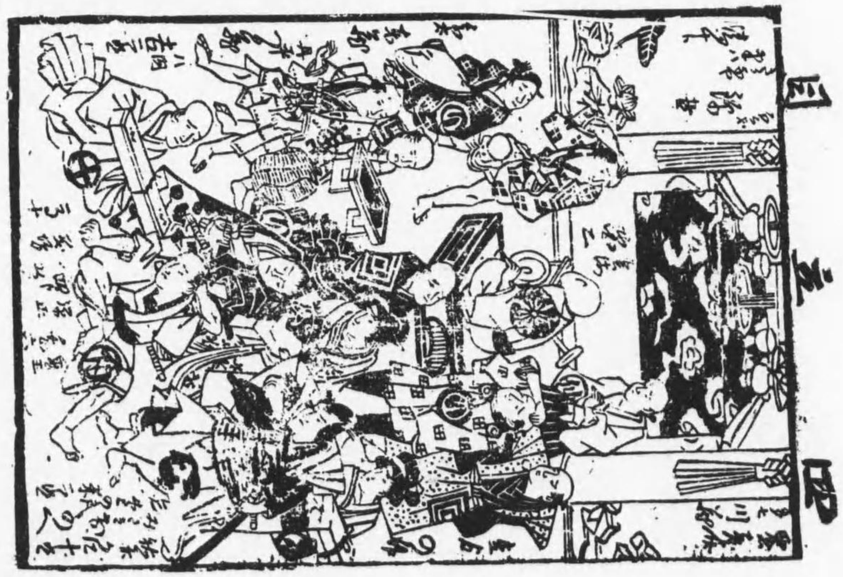
兩人　談ずるでござらう。

ト思ひ入れ。パタ〳〵になり、奥より七郎助、禪司坊を引ッ立て來り

七郎　禪司坊どの、動かつしやるな。

禪司　家來の身として團三郎、某を何とするのぢや。





七郎　科はその身に覺えがあらう。劍を入れた長持は、村方よりのお寺の預かり、それを窺ふ禪司坊、これも矢ッ張り箱王と、同じ畑の丁稚と存じ、それゆゑこれへ連れて來た。祐兼さま、御油斷なされますな。

禪司　コリヤヤイ、團三、身に覺えなきその云ひかけ、曾我の屋敷に勘當を、受けても古主の某に、無禮を申さば赦さぬぞ。

ト刀へ手をかける。

祐兼　ヤア、素丁稚の分際で、目に角立てゝの面がまへ。察するところ、箱王丸と馴れ合つて、名ある劍を奪ひ取る工面であらう。身共に荷擔の團三郎、禪司坊を拷問なし、箱王丸が在所を問へ。

七郎　畏りました。祐兼さまへの奉公はじめ、曾我の身内の禪司坊、箱王丸が行くへの詮議、丁稚め、キリ〳〵ほざいてしまへ。

ト禪司坊を引附ける。行氏これを留め

行氏　ヤイ、匹夫め、云はゞ古主の禪司坊、詮議呼はり、すさり居らう。

大藤　イヽヤ行氏、扣へさつしやい。團三が匹夫であるなれば、おてまへとても以前は匹夫、いはゞ伊東が徒中間。

禪司　ナニ、以前伊東の小者とは。

彈正　さては八幡は祐親が、馬添へなりし身を以て、工藤へ取入る二股武士。御油斷なさるな、祐兼さま。

祐兼　正しく兄の祐經を、つけ覘ふため入込んだる

大藤　伊東に仕へて河津が馬添へ、主人の館へ紛れこみ、八幡となつての奉公は、胸に一物あらうがな

行氏　イヽヤこの身に二心はない。よし又小者なればとて、左衛門さまのお目鏡にて、取上げられし新參者、古參といへどおてまへは、今日の今まで主人の勘當。

大藤　その御勘氣も忠義ゆゑ、伊東に所領を横領され、身は漂泊ひの金石丸、身共が勸めて奥野の狩、山獵師と樣を變へ、柏ケ峠に待ちうけしに、騎者を迎ひの飾り馬、口を取つたる歩中間、身共が咬へし莨の火、借りたる節に主人の噂、伊東が迎ひと口走るを、これ幸ひと小者の奴等、まつた飾りし鞍鐙、よつく目をつけ椎の下、窺ふ折から轡の音、よく〳〵見れば見覺えの、馬の飾りに口取りの、面體違はぬ上からは、これを證據に所領の仇、おのれ祐親ござんなれ、切つて放つ矢あやまたず、鞍の山形射削つて、大地へ撞と落ちたるは、伊東と心得退いて、跡にて聞けば河津の三郎。ヤアしなしたり、人違ひ、悔めど返らぬ身の誤まり。

ト此うち行氏、禪司坊無念の思ひ入れあつて

禪司　すりや父上を、その折、其方が

行氏　この面體を證據となし、射て落せしは相違して、父御にあらぬ祐安さま、この面がまへの目じるしが、主人の爲めに

祐兼　ナニ主人とは、河津が事か。

行氏　サ、その主人の祐經さま、御武運拙く小藤太どの、天晴れ忠義、此方は、覺えられたるこの面が河津の爲には敵のしやつ面。

ト無念の思ひ入れ。

大藤　射損じながらも主人の爲。それを勘當なされたは、ちつと恨みな祐經さま。河津を射たも成家は左衛門さまを思ふがゆゑ。この上敵と曾我殿原、つけ覘ふとも身共は存ぜぬ。主人の爲なりや敵は御主人、間違ひ立てして身を恨むな。

彈正　殊更最前預け置く、狩場の繪圖は主人廣元、まつた左衛門祐經どのが役目なれば、工藤へ歸參の成家どの、富士の狩場の普請奉行は、貴殿と某。

大藤　その繪圖面は卽ち爰に。これを欲しがる八幡が胸中、曾我の奴等へ渡す氣か。曾我を見切つた團

三郎、その丁稚めを苛なんで、箱王丸が在所をほざかせろ。

七郎 心得ました。禪司坊どの、團三郎が答にて、行くへの知れぬ箱王丸が、在所をキリ〳〵

ト立ちかゝるを、行氏さゝへて

行氏 又も主人を手籠めの緩怠。

祐兼 それを留めるは行氏も、いよ〳〵曾我の肩持つか。

行氏 全く以て。

彈正 工藤の扶持人、扣へさつしやい。

行氏 サアそれは。

皆々 但し聞者か、

行氏 サアそれは。

皆々 サア

行氏 サア

皆々 サア〳〵〳〵

敵皆 どうだ。

トこれにて行氏、禪司坊を圍ひ、ホツと思ひ入れ。

大藤 ぶち据ゑろ。

七郎 心得ました。

ト禪司坊へ立ちかゝるを、行氏、七郎助を捻ぢあげる。祐兼立ちかゝる。七郎助、行氏へ組みつく。

立廻りのうち行氏の衣裳脱げて、紺看板、奴の形、この時懐より飯行李落ちる。敵役皆々見て

彈正 さてこそ八幡が

敵皆 この形は。

禪司 ヤ、、、、、行氏どのゝ姿といひ。

七郎 工藤の家老の懐に、この飯行李は

敵皆 なんの態だ。

トあざ笑ふ。行氏思ひ入れあつて

行氏 小藤太どのゝ詞の如く、八幡が正體現はせば、根が盛切りの身を以て、今まで知行高祿の、御家老ながら日々の、露命を繋ぐ扶持米は、工藤のお家の米一粒、食はぬ氣儘の徒中間、曾我さまよりの貢ぎの飯行李、敵の手引きと入込んだは、三本足らぬ猿智慧も、つら赤澤の十内が、昔に返

る捻切りの、河津が馬添へ不忠者、恥を隱せしこの衣服、脱いだら元の奴らさ。御存じあるまい若旦那、よくも成長なされました。

ト禪司坊へ向ひ思ひ入れ。

禪司　すりや、其方が父上の。

大藤　河津を討たれし大腰拔け。主人の館へ入込んで、曾我へ手引きの不敵者。

祐兼　この祐兼が一刀に

ト立ちかゝるを大藤内とめて

大藤　お手にかけられお刀の、却つて穢れを存ずるゆゑ、命助けて爰追放。併し團三は禪司坊の、詮議仕拔いて箱王の

七郎　行くへをきつと私しが、白狀させるも主從の、緣の切れたる團三の面晴れ。

彈正　成家どのにはこの上に、口談いたす仔細もござれど、それより大事な彼の品の

大藤　アヽコレ、その儀は成家、胸にござる。

祐兼　その心底を見る上は、歸參の小藤太、用意の衣服、これへ持て。

ト向うにて

八内　ハツ。

ト八内、奴の形にて、廣蓋に袱紗をかけて上下衣服を載せ、これを捧げ、走り出て來り仰せ置かれし上下衣服、卽ち持參。

トよき所へ置く。

祐兼　今より歸參の小藤太成家、衣服を改め、祐兼同道。

大藤　思ひよらざる身の冥加、以前に變らぬ工藤の執權、今より忠勤勵みまするでござりませう。

ト行氏思ひ入れあつて

行氏　不興をうけし成家どの、以前に變らぬ家老職、その立身に事かはり、八幡は元の徒中間。

彈正　命助けて直さま追放。

七郎　曾我にゆかりの禪司坊、詮議の役は家來の團三。サ、丁稚どの、來さつしやい。

ト禪司坊を引ッ立てる。

禪司　エヽ、主人に刃向ふ人非人。

ト思ひ入れ。

七郎　ぴくしやくすると、曾我へお祟り。

禪司　サアそれは。

ト扣へる。祐兼花道の方へ行き

祐兼　定紋附きの上下衣服、直さま館へ持ち參れ。

八内　心得ました。

ト行氏の衣裳刀を取上げる。

行氏　せめて下郎が一腰なりと。

大藤　穢れた魂ひ、われにくれるワ。

ト投げてやる。行氏取って

行氏　この身になつては有り難く、頂戴いたすでござりませう。

ト押戴く。

彈正　然らば此まゝ、祐兼さま。

祐經　彈正左衛門。

大藤　御兩所、お先へ。

彈正　小藤太と。

大藤　お別れ申さう。

七郎　立たつしやい。

ト唄になり、祐兼彈正、八内、行氏の衣服を抱へ、向うへ入る。七郎助、禪司坊を引立て、奥へ入る。あと合ひ方、大藤内思ひ入れあつて

大藤　誠に人は正直の、頭に宿る神とやら、時節來れば以前に變らず

ト衣服を抱へ立ち上がる。

行氏　その御出世に事かはり、化あらはれし十内が、あなた樣へ折入つて、お願ひ申さにやならぬ一儀御所持なさるゝ狩場の繪圖、どうぞ拙者に

ト大藤内これを聞かぬ振りにて

大藤　工藤家へ歸參すれば、知行の高も、これ〳〵

ト指を折り數へてゐる。行氏、また向うへ廻り

行氏　小藤太さま、何卒下郎がお願ひを

大藤　用人、小者、若黨、下部……カウと。

トまた行氏、此方へ廻り

行氏　成家さま、何卒それなる繪圖面を

ト袖を引く。大藤内、行氏を見て

太藤　なんだ。最前から跡ねだりする犬を見たやうに……なにか、われが願ひは、身が所持したるこの繪圖面、見たいといふのか。

行氏　左樣でござります。

大藤　この繪圖面を見たならば、曾我へ手引のその目算、其方の爲には勝手がよからうが、歸參いたした小藤太が、主人の仇となるべき忠義。まづ、よしに致さう。

行氏　御尤もではござれども、そこを只管あなた樣へ。

大藤　すりや、どうあつても聞分けなく。

行氏　何卒願ひを

ト縋るを

大藤　たわけた事を。

ト衣服を肩にして、行氏を蹴倒し、キツと思ひ入れ。行氏「チエヽ」と思ひ入れ。この引張りにて、道具ぶん廻す。

本舞臺、柾木の生垣、向う本堂の横を見たる道具。よき所に草井戸。爰に七郎助、禪司坊を引附け、割り木を振上げゐる。お京、その手に縋りゐる。鬼王、禪司坊を圍ひゐる體。かすめたる禪のツトメになり、道具納まる。

鬼王　ヤイ〳〵、團三め、現在兄を打ち叩き、氣が狂つたか、惡黨め。

お京　兄さんばかりか勿體ない、お主樣を手籠めにして、お前に罰が當るわいなア。

七郎　おかたじけ。當るといふは延喜がよい。併し曾我には勘當の、この身になつた團三郎、主でも兄でもねえからは、祐經さまからお賴みの、箱王丸が詮議をする。云はねば團三が腕かぎり、古主のこなたをカウ〳〵〳〵。キリ〳〵在所を、云つてしまへ。

ト禪司坊をぶちのめす。その手に縋つてキットなり

禪司　いかに勘當うけたりとて、家來の團三が苛責の杖、思へば〳〵口惜しい。

鬼王　ヤイ〳〵〳〵、惡黨め、場所もあらうに小地獄の、地藏馬鹿にしをるか。

お京　家來の身としてお主を打擲。この世からなる修羅道の

鬼王　閻魔の前でおのれマア、罪を作つて先の世は、地獄へ落ちて鬼の責め。おれはこの世の鬼王でも

役に立たずのこのヨイ〳〵、側で見る目が口惜しいわえ。

ト自團駄踏む。

七郎　その世迷言聞きたくない。祐兼さまのお指圖で、在所を聞けば御褒美の、金でお京と二人して、夫婦暮らしに拵ぐ氣だ。必ずてめえ案じるな。

お京　エヽ、穢らはしい、其やうな、お主に刃向ふ横しま非道。コレ、心を入れかへ御主人を、大事に思うて下さんせいなア。

七郎　何を女のいらざる事。うぬらに構はぬ、禪司坊、箱王丸の在所を云へ。

禪司　たとひこの身はどのやうな、責苦を受けても箱王さまが

七郎　行くへを云はねば容赦なく、手ひどい刀の胸打ちに

ト一腰を抜き、振上げる。

お京　コレ、お怪我あつては

鬼王　おのれは磔刑。

ト兩人縋りよるを蹴とばし

七郎　わッぱを爰で

ト白刃を振上げる。この時後より行氏、ツカ〳〵と出て、この手を捕へ

行氏　天命知らずの人外め。

七郎　ヤヽヽヽヽ、うぬは十内。留立てひろぐと、われも側杖。

ト振上げるを行氏、立廻つて白刃をもぎ取り

行氏　お主に刃向ふおのれから。

ト振上げる。この時七郎助かい潛つて、懐より書き物を出し、サラ〳〵と開き、行氏へ差つける。

七郎　委細詳しく文言に。

行氏　ヤヽ、なんと。

ト立廻りに、この文言を見て

ヤヽヽヽヽ、さては團三は

七郎　お主の御難儀、友切丸。

行氏　その盜賊は

七郎　モシ。この身に引請けて

ト思ひ入れ、行氏こなしあつて